

---

# 赤井神社によるこそ

米竹乃鮓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤井神社によるこそ

### 【Zコード】

Z50450

### 【作者名】

米竹乃鮭

### 【あらすじ】

赤井神社の少年には、これといった自慢できるところは無い。さらには前世の恨みがどうとらこうとらで幽霊にもとり憑かれ、陰気な顔をして貴重な青春を浪費している。今の状態が良いとは思わない。だけどどうすることもできないそんなある日、少年は鬼を名乗る女と出会う。いささか強引な鬼に導かれ、少年は明るく社交的な人間になれるのか？

## 序章

俺の名前は赤井草治。極端に根暗な性格だ。

いつもどんよりとした顔つきは人々をさぞ不快にしているのだろう。何にもやる気にならない。友達もいないし勉強も運動も恋も全部どうだつていい。正直な話、早く死にたいなあといつも思つてゐる。とはいへ、自殺は良くないという倫理観は今のところ傷一つなく頑丈に俺の中にある。それに、まだ死ぬわけにはいかない。

誇ることの無い俺だが、実は少しだけ人とは違うことがある。俺には靈感がわずかにあるのだ。

更に言つと、俺にはときどきしか視ることは出来ないが、靈感の強い母が言つには俺は一風変わった女の子にとり憑かれてもいるようだ。なんでも前世の恨みがどうのこつたり。

いざれにしる、両面の田標としては俺に憑いた幽靈を除霊することだ。

今までも、いろんな除霊を試みた。

母曰く、「幽靈は荒んだ環境を好むけど、そうでない場所は嫌いなの。ほら、心霊スポットと言えば廃墟とか荒れたところばかりでしょ。つまり埃一つ無い家にいれば、自ずと幽靈は離れていくわ」そう言られて毎日掃除と洗濯をこなし、更には何故か料理まするように言いくるめられた。

当時の俺がこの行為は除霊ではなく単に母に利用されているのだと気がつくのはずいぶんと先のことだ。

しかしながら成長するにつれて母に利用されているのだとようやく気がついた時にはもう俺は手遅れだったかも知れない。何となく高名な除霊師を呼ばうと頭の中で思った途端、凄まじい頭痛と吐き気が俺を襲い、学校の教室で汚物を吐いてしまった。この生涯消

えることのないだらう想い出が刻まれた後、そういうことは考えないよとしている。

ああ、いかにすれば俺は自由になれるのだろうか。

## 赤井神社の少年

### 第一話 赤井神社の少年の日常

幼いころから度々同じ夢を観ることがある。

また、この夢だと彼は苦笑する。その夢の中で彼は血のようないい桜の下に腰を下ろしていた。

彼の視線の先には、散りゆく桜に紛れるように赤い着物の幼い少女が舞いを踊っている。

少女は頭から深紅の薄綿を被つておりその顔付きはよく見えない。それでも、身体を踊らすことで時々見え隠れする口元は本当に楽しそうな笑みを浮かべている。少女が手を広げて何かを言った。

「昨日は大変でしたね。ずっと見ていましたから私は知っていますよ。今日も、今日とて大変な一日になるはずです。でも私は貴方のことを見守っていますよ。だって私は貴方のことがものすつごく大っ大嫌いだからです！だから貴方の不幸な姿をたくさん私に見せて下さいね」

そんな弾んだ可愛らしい声が聞えた。

彼はそれを見てるだけ。そして彼の視界が震む。彼の瞳に直接墨汁をたらされたかのように少女も桜も溶けるように消えて、彼の眼の前は真っ暗になつた。唐突に体が真正に浮上していく感覚で意識が強引に引っ張られ、彼は夢から覚める。

はつきりとしない頭で周囲を見渡すと、教師がディスプレイの前で講義している。

今日の講義の内容は比較的楽な分野だったので少しだけと油断して机に伏せたのが間違いだったと彼は小さく舌打ちした。

（あーあ、またあの夢か。アレ観た後つて大体いいことないんだ

よなあ）

嫌な気分を紛らわせるために窓の外に視線を向ける。そのまま退屈な授業を無視して呑気に夏めいた景色を眺めることにした。

灰色の雲が空を満たし、出し惜しみするように雨を落していた。教室の窓から少年は空を見上げた。窓からは雨が緑色の葉を揺らすのを見ることができる。少年は魅いったかのように窓の外を見ていた。

少年の名前は赤井草治。顔立ちは整っているが身長は平均以下。流れるような漆黒の黒髪を胸のあたりまで伸ばしている姿は女子のようでもある。実際のところ男子用の黒い学生服を着ていなかつたならば、一目で彼が男かどうか見抜くことは難しいかも知れない。草治は何かと有名な存在である。今も授業の中、数人の生徒達が声を抑えて彼の噂をしているのが聞えてきた。

「ほら、あそこで赤井君が窓を見てるよ」

「ホントだ。やっぱ赤井の周りって何か淀んでるよな」

「窓の外に幽霊でも居るんじゃない？」

「今日も大凶だよ。凄いね」

「おい、もつと音量を下げる。赤井に聞えたら呪われるぞ」

（聞てるぞ）

不快な小声に草治は険を増す。草治はクラスメートの話が聞えていないかのように振る舞い、窓を見る。窓に拡がる緑色の景色ではなく、窓に写る己の姿をただ眺める。

ガラスの中にはるかの姿を見て草治は呆れていた。

不気味なほど黒い前髪の中から覗く、濁った目付き。その瞳を見て昨日スーパーで売っていた魚の眼を思い出した。トレーの中で拘束され、墨汁を垂らしたかのような暗い眼。幼馴染には、「草治の眼を見ていると草治の後に死神がいるような錯覚すら覚えるんだけど」と引かれたこともある。その瞳も原因の一つとなり、昔から草治は悪靈憑きだと不愉快なことを言わってきた。

高校に入つてからは気味の悪い目を隠すために髪を伸ばしてみた

草治だつたが、事態は好転することはなかつた。むしろ、髪を長くした所為で以前よりも更に日本の幽霊的雰囲気が溢れていた。

外の景色に浸るほうがまだマシだと思つた。

ふと、窓に映る己の姿が紅くぼやけた。草治はため息を吐きたくなつた。ガラスに薄い朱色の水をぶちまければこんな感じなのかもしないという印象を持ちながら、窓の外に浮かぶ赤い影を睨む。

草治の視線の先で、御巫女が着る衣のような着物の少女が浮いていた。小さな身体を覗ると10歳にも満ちていないかも知れない。頭から胸のあたりまで伸びる深紅の薄衣を乗せているため少女の顔が見えることはない。

いつも夢の中で会う少女。

幽靈の如く静止する女の表情は見えなかつたが、何かを伝えたいためか右手を突き出して写真を撮るかのように草治に向かつてV字を作つている。

(何がしたいんだあの馬鹿)

両の目に力を入れてから強く心の中で毒づいた。

幸か不幸か、教室の外で薄笑いを浮かべる少女に草治以外は気が付かない。少女はスースと、足も動かさず草治のとこに移動する。窓をすり抜け、草治に顔を近づけた。薄縁の向こうでニンマリと笑うのが視えた。

「ねえ、ねえ、いいこと教えてあげますね」

少女が無邪気に笑つた。少女の声も草治以外は特に気にした様子を見せない。

教室では教師がディスプレイの横で喋つている。生徒達は人それぞれで、集中して耳を傾けていたり、寝ていたり、喋つていたり。草治は真横で浮かんでいる少女に視線だけ向ける。

「ほら、草治つてばお財布どこかで落しましたよねー?」

薄縁の上から口元に手を当てて、不注意ですねえと呟く。草治は

白けた様子で少女を眺める。

(どうせ、お前が手引きしたんだろ)

「言つておくけど、私が盗んだわけじゃないですよ。私には盗みをする趣味はないのです。それに、そんなに直接的に行動するのは怨靈としてルール違反ですから」

少女は草治の疑うような視線に気分を害したのか少し怒った口調で言つた。それから右手で草治の頭をペシペシと叩いてきた。。

「そう落ち込むことはないですよ」

少女は愉快に微笑み、草治を覗き込む。

「実は、一寸前に食堂に落ちてるのを見つけました」

右手をピシリと伸ばし、薄縄の上でおそらく額であわいといひで敬礼のポーズを作つた。

草治は胡乱気に見つめる。

「感謝の言葉とかはないのですかあ」

少女が尖つた口調で不平を漏らした。草治は頭を抱えたくなつた。

憂鬱な氣分で窓を眺めていたといつしか授業の終わりを告げるチャイムが教室に響いた。赤い少女から目を逸らしてからチャイムの音を聞くや否や、草治は即座に立ち上がる。

(急がなくては)

数人が驚いたように草治を見上げてきたが、彼は気にすることなく鞄に教科書を詰め込み教室を出て行つた。

(食堂に急がなくては)

廊下で生徒にすれ違う度に恐怖の表情が浮かぶのを無視してズカズカと進む。

「見て、赤井草治よ。どこに行くのかしら?何?何か様子が変じやない?」

「きつと何か幽靈の気配を感じたのよ」

「そういうえば赤井さんの家つて神社なんでしょう?確かに赤井神社とかこうボロ神社。きつとお祓いとか失敗したから憔悴してるんじゃ

ない？」

「ああ、きつといろんなものが憑いてるんだろうな」「見た？赤井君のあの日付き。ホントに何か濁つていいか、背中に悪靈とか死神とかついてても頷けるよね？」

（憔悴しているのか？何か憑いているのは当たりだが）

生徒達は草治に触ると呪われると言わんばかりに彼から避けるように道を空けて行く。傍から見れば草治はヤクザのように堂々と歩いていく。ヤクザといっても小柄で、そこらで怯える女子生徒達とそれほど格好は大差はないのだが。その暗い瞳と雰囲気だけで周囲を怯えさせる。

授業が終わつたばかりのこともあつてか、食堂のあたりには生徒はいなくなつていつた。草治にとつても皆にギヤー・ギヤー騒がれるのは好きではないので好ましい。

ところが、食堂の扉の前で草治は中から話声が聞えてくるのに気がついた。妙に高い声で騒いでいるので女子であることが分かる。「こんなところまで連れてきて何か用？」

「あんたさあ、調子にのりすぎ」

「そりよ、さつきだつて偉そりにしてさあ。マジウザい」  
いたむか刺々しい女子の会話に草治は立ち止つた。簡単に入れる雰囲気ではない。とはいへ食堂に財布があるかもしれないわけで。あの財布には今月の赤井家の食費がたんまり入つているのだ。  
(どうして俺はこうもついてないんだ?)

ひとまず食堂の中を覗いてみようと草治はゆっくりと扉を開いていく。

「アンタ達が馬鹿だからしようがないじゃない。つていうかさあ、わざわざ教えてあげた私に対してもこの態度は酷くない？」

そつと扉の向こうを覗くと金髪の少女が挑発するような声を上げていた。

「何が教えてあげたよ。私が英語の訳を言つたとたん爆笑しやがつ

「いや、だつてさあ、あれは無いわよ。よくその頭で高校入れたわ  
ね」

食堂の左隅で3人の少女が金髪の少女を取り囲むように立っていた。少女達は尋問のような雰囲気で中心の金髪少女に向かっている。傍から見ると典型的な苛めの構図であるが、苛めを受けているはずの位置で、金髪少女は悠然とした態度でむしろ馬鹿にするような笑みを他の少女達に向けていた。

半ば唖然としながらも、草治は本来の目的である財布を探すため、食堂を見渡す。そして喜ばしいことに財布は簡単に見つかった。食堂の左隅の机にぽつんと置いて少女達がたむろっている丁度後である。

財布を取りに行くためには少女達に近付かなくてはいけない。草治はため息まじりに眼の前の扉を音を立てないように開けることとした。

「だいたいアンタつてさあ、遺伝子教育受けてるんでしきう？それなら私達よりも頭が良くて当たり前じゃない」

「いえいえ、そんなことはないわ。確かに遺伝子も生物の才能を決める重要な要因でもあるけど、人間の周りの環境と何よりも努力が一番大切な要因であるって生物の授業で習つたでしょ？」  
「そんなのは詭弁よ、だつて、」

草治が完全に扉を開いた時に、少女達の言い争う声がぴたりと止んだ。それから少女達が目を丸くして草治に視線を向けてきた。  
突然の沈黙の中、草治は何か声を掛けなくてはと思考していると取り囲んでいた少女が今までにない高い声を上げた。

「あああ赤井草治？」

怯えるかのような少女の声を皮切りに他の少女達からも甲高い声が草治の耳に響いた。

「赤井草治つてあの不幸を呼び寄せる男？」

「歩く7不思議つて噂の？」

不本意な噂に草治は目を細めるもゆっくりと財布に向かって、引いては少女達に向かつて歩き出す。草治の長い黒髪と暗い瞳が醸し出す不吉な気配に少女達が圧倒される中、金髪の少女だけが面白い見せモノが始まつたとでも言うかのように静観していた。

ある程度少女達に近付いたところで草治は立ち止つた。要件だけ伝えて早々にここを立ち去りうと大きく息を吸い込む。

「邪魔だ」

(俺の財布があるからね)

女の子のような小柄な外見にしては低く地鳴りのような声が食堂に行きわたつた。不吉を背負う少年に相応しい声に、取り囮んでいた少女達は怯えの表情を濃くした。

少女達の反応を見て、草治は言葉が足りていなくて気がついた。これでは喧嘩を止めようと脅しているかのような物言いになつてしまつ。ただ財布を取るために食堂に来たことを伝えるため、補足をしようと草治は口を開こうとした。

しかし、草治よりも早くリーダー格であろう背の高い少女がヒステリックな声を上げた。

「何よ。アンタには関係ないでしょ」

「いや、大いに関係ある」

(俺の財布があ前達の後にあるからな)

草治は勢いで反応してしまい、補足を入れるのを忘れてしまう。草治の声に背の高い少女が後ずさるも、突然後ろを指差した。

つられて草治も指の方向でにやける金髪の少女を見る。改めて見ると外国の映画で主役を張つてもおかしくなきようなグラマー美人といった感じだ。背は草治と同じか少し高いぐらいで、女子にしては高いほうだろう。

草治はこの少女に見覚えがあった。

(確か、先月に転校してきた天竜寺妃だつたかな)

「言つておくけど、こ、こいつが悪いのよ。いつもいつも私達のこ

とを劣勢種の遺伝子だつて馬鹿にして」

「別に、馬鹿にはしてないわ。事実でしょ？私はきちんと遺伝子を改良してもらつて優勢な遺伝子にしてもらつたのだから。それに全ての才能が遺伝子だけで決まるわけじゃないってさつきから言つているでしょ？きちんと努力すればそれなりに結果が出せるのよ」天竜寺妃が高笑いするのを聞いて、草治もようやく状況を把握することができた。

（ああ、また遺伝子教育を巡る争いか）

遺伝子とは生物の設計図である。生物の形、色等の形質を決定する設計図。その設計図を書き換える技術、遺伝子の組み換え技術により、理論上は効率的な生物を造ることができ。植物の品種改良から始まり、動物の遺伝子操作、さらに近年では人に対する遺伝子教育と呼ばれる用は人間にに対する遺伝子操作も流行りつつある。「ほら、今のを聞いた？こいつ私達のことやつていつも馬鹿にしてくるのよ。許せないでしょ？」

少女が苛立ちながら草治に同意を求めてきた。草治は賛成も反対もせずに堂々としている妃を観察する。

遺伝子教育では瞳の色、髪の色、運動能力、脳の記憶容量や演算能力などの形質を書き換えることで理想的な子どもを造ることができる。しかし、この技術は倫理的にも問題視されることもあるが何よりも費用がかかることが問題となる。

つまりところ、英才教育の如く、裕福な家庭の子どもたちにしか遺伝子教育を行うことはできない。

眼の前で胸を張る少女は噂を聞いたといふ、親もかなりの資産家で、勉強も運動神経も完璧らしい。

このことは遺伝子教育のもう一つの問題点を生む。遺伝子教育を受けたかどうかで人を判断する選民思想のような流れ。現に、天竜寺妃は自分の容姿と能力を鼻に掛けている節があるという噂も草治は聞いたことがあった。とはいえ、遺伝子教育を受けてない者達も過剰に嫉妬を抱いているという感覚も草治にはあるのだが。

しかし、と草治は改めて少女達も見渡す。

「アンタだつて遺伝子教育を受けたぐらいで威張られるのは嫌だろ？」

少女に言われて草治は深く息を吐く。

「そんなことはどうでもいい」

草治は心底どうでもいいといつ風に咳く。天竜寺を除く少女達が息を呑む。音量は非常に小さかったがその低い声は食堂の中で不気味に反響した。自分の声の不吉な感じに呆れながらも続けようとして草治は粘つくような濁りの瞳が尖る。

「問題は、一人に対しても多数という手段に出たお前達が理に適つているとは思えない」

多少ながら武道を嗜む草治は曲がった事を好まない性質である。だが今日のところは説教をしようなどとは思つてはいるわけではない。伝えたいことだけを言つて草治は満足した。

「俺は言つたぞ。邪魔だと。とにかくだけ」

（そこに居ると財布を取ることができないんだけど）

草治はそう言つて少女達を睨む。見かけによらず低い声音は少女達の耳に粘つくる。

「あ、アンタは天竜寺の肩を持つわけ？」

背の高い少女が震えるながら叫ぶように言つた。他の少女達は顔を青くして草治に言いかかる少女を止めようとしていた。

「早く、逃げた方がいいよ」

「だつて、あいつは、赤井は、」

少女達が喚くのを聞きながら草治は頭を搔いた。

「どうしても、そこをどかないと言つならば」

草治はそこで口を閉じた。一瞬、静寂が訪れた。興奮していた少女も、草治のそら怖ろしい声に顔を引きつらせた。妃は相変わらずにやけた笑みを浮かべている。

（遠回りして財布を取りに行くしかないな）

彼女達を説得するよりも遠回りして財布を取つたほうが早いと判

断した草治は彼女達から視線を外し、身体が強張った。草治は右頬を震わせながら己の視たモノを注視する。

彼の頭上では赤い影が揺らいでいる。時が止まつたかのような感覚を草治は感じた。

「ほらあ、私の言った通り、お財布がありましたよ。それでは」  
（裏美です）

薄綿の間から下品に口元を笑わせて、赤い着物を着た少女が言った。両の手を水平に伸ばし、赤い袖を垂らしてから、パチンと掌を打つた。

（こいつが俺の前に来るといつも、）

少女たちは滑らかな黒髪を撫でてから頭草治がため息を吐く。  
「お前は何がしたいん、」

その時、真上から大量のガラスが一斉に割れる音が轟いた。  
「な？」

草治は目を見開き、天井を見上げる。天井からはいくつもの透明な大粒の塊が当たり一面に落ちてくるのが見えた。

食堂は張り板の天井であり、ガラス等一切ないことを草治は知っていたが、実は食堂の天井はガラスでそれが今、突然粉々に割れて降つてきていたのだとすら感じた。

周囲からは少女達の悲痛な悲鳴を聞きながら、草治は目を閉じた。（これだけのガラスが突き刺されば、さすがに命はないかもなあ）そんな諦観にも似た感傷に浸つた瞬間、凄まじい衝撃が草治の身体を揺らした。

衝撃は、数々の破片が突き刺さる感覚ではなく心臓が止まるかと思うほどの冷たさと、重たい布団が頭の上に落ちてきたかのようなものだった。

（これは、水？）

未だに頭の上から押し付けられるのを感じながら草治は目を開い

た。滝に打たれているかのような光景に苦笑していると、次第に水が止んでくるのが分かつた。

眼の前でも少女達が茫然としているのを横目に草治は天井を観察した。

「スプリンクラーの誤作動つてやつね」

天龍寺の弾んだ声を聞いてから、草治は天井の上に水道線がついた水巻機がぶらさがっているのに気がつく。

「まあ、旧式に散水機だから仕方ないと言えば仕方ないか。さつきのガラスが割れるような音は、スプリンクラーが作動した時に起る音だわ。さすがは不吉を呼ぶ男」

天龍寺が楽しそうに言うのを聞いて、草治はびしょ濡れになつた少女達に視線を移す。天龍寺だけがはしゃいだ目を向けていて、他の少女達は顔を引きつらせて草治を見ていた。

「噂では聞いてたけど、すごいわねえ。赤井草治が窓に近づくとガラスが割れる。赤井草治が薬品を扱えば誤爆する。そんなあり得ない噂ばかりだつたけど案外、本当かもねえ。ってか不吉を呼ぶ男に近付くと不幸が伝染するつて聞くけど、私達にもう一つちやうのかしら？」

天龍寺は笑いながら少女達に話しかけた。途端に少女達の間に顔が引きつる。

「そういえば、赤井草治と話すと呪われるんでしょう。どうしよう」「いやああ」

一人の少女が叫び出すとともに他の少女達も怯えた顔で逃げだした。

草治としては複雑な気持ちだった。確かに不足の事故が起こる回数は学園の中でも草治が一番である。先日も草治の側にあつた窓ガラスが割れたりしたのを思い出す。そのたびに赤い少女が現れたのだが。

（マジでお祓いをしてもらおうか）

食堂には天龍寺と草治だけが残る。

草治は濡れた髪を搔き上げながら財布を探した。財布は水に流れ床に落とされていた。おそらく中身もびしょ濡れだろう。

草治はため息を吐いた。天竜寺はしげしげと草治を見つめている。「あら、不吉を呼ぶ男って名前にしては案外かわいい顔つきじゃない」

「別に俺の名前は不吉を呼ぶ男ではない。それに不吉を呼んでいるなんて思ったこともない」

不機嫌そうに草治が言うと天竜寺が愉快そうに笑い、天井を見上げた。

「もしかしてアンタって遺伝子教育者?」

突然の話題に草治は眉を顰めてから首を振った。

草治が通う聖葉学園にも何人かの遺伝子教育をされた者がいるが、彼らのほとんどは突出した才能を持つている。対して、草治はこれといった才能はない。確かに成績も悪くないし、運動も出来ないわけではないが、それはあくまで普通と比べればの話である。

「何で俺が遺伝子教育をしてると思うんだ?」

「だつてアンタって面白い才能があるみたいじゃない」「天竜寺が不敵に笑うのを見て草治は首を傾げた。面白い才能などこれっぽちも思いつかない。」

草治の様子に天竜寺はキツネのように目を細める。

「だつてアンタには不幸を呼び寄せるっていう才能があるんでしょう? スプリンクラーが誤作動するなんてなかなかないわよ」「は?」

珍しく間の抜けた声を草治が漏らした。不幸を呼ぶなんて才能なのだろうかと草野は目を瞬かせて天竜寺を見つめる。

天竜寺は唇を舐めて草治にむかって優雅な足どりで近づいてきた。

「アンタは遺伝子教育ができた理由って知ってる?」

「遺伝子教育で優秀な子どもがほしいからだろ?」

そう答えた草治に対して天竜寺は裾から水を垂らしながら両手を交差させバッテンを作った。

「不正解。正解はある研究者達が人間を超えた人間を造るつもりと思つたから」

肉食動物のように犬歯をむき出しにして天竜寺は笑つた。草治は何を言つているのか分からずに何も言わない。というよりも頭のねじが外れたかのようなことを言つエリート少女のことを呆れるような感情を抱く。

と、人々がかけてくる音が聞えてきた。

どうやらスプリンクラーの誤作動に気がついたようだ。

「それじゃ、また今度」

天竜寺は親しげにも思える口調でそう言い残し、草治の横を通り過ぎて行つた。

ずぶ濡れの格好にも関わらず颯爽とした足どりで去つて行く少女に感心してから草治は床の上で大量に水分を含んだであろう皮の財布を拾つた。

「また、お前か。赤井」

小太りの担任の教師がいつの間にか食堂の入口に立つていた。

「3日前もガラス割つていたし、何て言うか頑張れよ赤井」

教師のほうも草治の対応には困つてゐるらしかつた。別にいつも草治が悪さをしているということは明らかなのだが、草治の周りでは事故が多くすぎるのだ。

## 赤井神社の少年（後書き）

ちなみに、赤井神社といつが前の神社は実際にあるそうです。佐渡の赤井神社、長野県の北赤井神社、おそらく福島県にある赤井諏訪神社があるらしいです。しかしこの話で登場する赤井神社は私が思いつきで考えたもののですのであしからず。

## 赤井神社に祀られし姫

草治が暮らす神社は赤井神社と呼ばれている。手入れのなつていな雑草が無造作に石置の間からいくつも顔を出し、本殿である神社のほうは埃だらけだ。

草治は石の階段を上り、本殿の横にある古臭い瓦葺の日本ならではの家に向かう。

草治はこの家に祖父と一人暮らしである。父と母を早くに亡くし、祖父が管理するこの神社に引き取られたのだが、祖父は近くにある大学で働いていて何かと忙しいせいか神社のほうはほとんど放つてある状態である。

「ただいま」

引き戸をこじ開け、草治は霸氣のない声で家中に入つて行つた。

「お帰り～」

間の抜けた声が奥から響いてくるのを聞きながら玄関に飾つてあつた時計を見上げる。

（9時。今日は帰るのが遅くなつたな）

スプリンクラーの誤作動した所為でずぶ濡れになつた草治であったが、学校から予備の制服の着替えを貸してもらうことができた。居間に行くと祖父である赤井源蔵が床に本を広げて熱心に読んでいた。

「今日は遅かつたな。草治」

「いろいろあつた。それより」

言葉を区切り、いつもと雰囲気が違う居間を眺める。

8畳の和室の中心には卓袱台が置かれている。その上に何故か古臭い刀が置いてあつた。刃渡り1メートルくらいだろうか。茶色の塗装が柄にも鞘にも施されているようだが、所々塗装が剥げている。柄には丸い円の紋様の中に蛇を象つた絵が刻まれている。

「その刀って家の神社の家法みたいなやつだろ。何でこんなところに出してるんだよ」

「ああ、まあ少し気になることがあってな」

祖父は今年で60歳になるが未だにその外見40代と言つても納得してしまうそなぐらい若い。

そして祖父は草治と違い、性格も陽気で声が大きい。

祖父の源蔵が呼んでいる文献も古臭く紙が茶色に変色している。おそらく神社の倉庫にあった本だらう。源蔵は大学では日本史の研究をしている。

祖父は文献を読み進めながら口を開いた。

「最近、神社の裏にある井戸から音がするらしいんだよ」

「裏にある井戸って、御札が貼つてある板で封鎖されているやつ?」

「そうそう。子どもがこちら辺で遊んでたら井戸からトン、トンって叩く音が聞えるんだってさ。まるで封をされた板を破るつとするよに」

源蔵の話に草治は顔を曇らせる。

神社の裏にある井戸にはイワクガある。その所為か赤井神社は一種の神靈スポットであると近所では有名になつてゐるのだ。

端的に言えば昔、ここの土地にいた鬼を閉じ込めたという話だ。井戸の中の鬼を鎮めるため、人々の願いの窓口としてここに神社を建てた。

それ以来、その井戸は誰も開けることができないらしい。井戸は一応は簡素な御札等や縄で塞がれている。草治も子どものころに井戸を塞いでいる粗末な板を取ろうとしたことがあるが、びくともしなかつた。というか立てつけ悪すぎるだけだらうと草治は考へているのだが。

「そんでワシも井戸の近くに行つたら本当に音がするわけよ

「か、風とかじゃないの?」

草治は不吉を呼ぶ男、歩く七不思議等といわれてゐるが決して怖いものが好きなわけではない。むしろ苦手な方だ。正直なところ、風呂場で頭を洗つた後に鏡に映る自分を惡靈と勘違いをして肝を冷やすような思いをしたことも何回がある。

「まあ、大した音じゃないけど風の音とは違つ氣がするんだよ」「へえ」

「それなので、とりあえず除霊の仕方を探そつと思つてな」「は？」「は？」

草治が本田一度田の間の抜けた声を発すると共に、源蔵は文献を閉じた。

「ひとまず、神社の文献に鬼を井戸に閉じ込めた時の様子が記されてたから読んでみたけどワシでも何とかなりそうだ」

源蔵は満面の笑みを浮かべて立ち上がり、卓袱台の上にあつた刀を手に取つた。

(何する氣だ?)

草治が困惑しているにも構わずに源蔵は刀を抜こうと手に力を込めた。

「抜けないな」

(そりやあ、錆びてるからだよ)

しばらく源蔵が刀を抜こうとしているのを眺めながら草治は頭を搔いた。

「その刀を抜いてどうするつもりだよ?」

草治が疲れた口調で質問すると源蔵は刀を抜くのを諦めた。それから草治に真剣な視線を送る。

「この刀で井戸から出てきた鬼を斬る」

真顔でそんなことを言つた祖父を見て草治は頭を抱えたくなつた。源蔵は草治と違つて怖い物知らずな性格である。率先してホラースポット等とはやし立てられたここにも行くこともある。祖父は自分が専攻している民俗学の研究のためだと言つているが。

「ウチの神社に鬼なんているわけないだろ?」

草治が言つと祖父は肩を竦める。

「お前は何でそんな夢のないことを言つつかね」

「高一になつてもそんなこと言つてると頭がおかしいと思われるからな」「

「何がまるでじいちゃんの頭がおかしいみたいな言い方だな」

草治がにべもなく言うと源蔵は子どものよう眉を顰めた。しかしその表情もすぐに消え、突然口元を緩めた。まるで悪戯を思いつた子どものような笑みに草治は嫌な予感を感じた。

「そうか、そうか草治は怖くないんだね。それなら今から井戸のところに行つて変な音がどうして鳴るのか確認してこれるよねえ?」

子どものような祖父の言い分に草治は顔を引きつらせた。祖父は草治が怖がりなことを知つていてる。

「いや、夜は暗くてしっかりと確認できないからな。明日の朝のほうがいい」

「そんなこと言つて、本当は怖いんだろう?高一にもなつて鬼が怖いつてダサいなあ。恥ずかしいなあ。お前の中学の友達に言いふらしてやろう。きっと皆笑うだろうなあ。そんな不吉な顔してホラーが怖いだなんてさあ。きっと仙石さんの娘さんなんか大爆笑だろうなあ。あれ? そういえば草治つて仙石の娘さんが好きだったよねえ? 振られちゃつたけど。いやあ、本当に悲惨な振られ方だったよねえ」源蔵の得意顔でペラペラと口を動かすのを眺めながら草治は観念した。本当だったら「ンプレックスすら感じている低い怨霊の如き声で威嚇したかつたが、口下手な草治では本を読む時と寝る時以外は喋つてないと死んでしまつかのような祖父に口で勝てるわけない。それはいつものことと分かつていい

「分かつたよ。確認していくよ」

草治は口を尖らせながらぼやいた。

勝ち誇った祖父を横目に草治は再び玄関に戻り、外に出た。

夜空には少しだけ赤みを帯びた三日月が浮かんでいた。玄関にあつたライトの余波を浴びて神社の古びた本殿を見て草治は背中に寒いものを感じた。まるで本殿の掃除などをサボっているのを怒つて草治にたいして報復をしようとしているのではというような妄想も持つた。

(とにかく神社の裏に回つて、井戸を見てくるだけ、それだけだ。

走れば5分もかかるない）

草治は自分に言い聞かせて急いで神社の本殿を横を回る。

突如、建物の下から細長い物が横切った。慌てて影をライトで追う。猫がいた。この神社の境内でときどき見かける猫だ。夜の中、眼を見開いてこちらを見ていた。内心、怖がっている所為かその猫が笑つたように思えた。ガサガサと本殿の裏の森の中に入つて行つた。（あと少しで、井戸がある。とにかく井戸を見たらすぐ帰ろう）神社の森に入った途端、周囲の温度が劇的に下がつたのを草治は肌で感じた。

草治は全身から血が引いたと。

草治を脅かすようにどこかでカラスが啼き、羽ばたく音が聞えてきた。

風が木の葉っぱを揺らし、森が呼吸しているかのよつな葉のこする音が聞えてくる。

（あ、井戸が見えた）

太い木々の間から四角い椅子のようなシルエットを確認し、草治がホツと胸を撫で下ろした。その時、

ズドン

壁を蹴つたような音が森に響いた。草治は驚いて身を竦ませる。

ズドン

再び、井戸の方から鈍い音が聞えてきた。

ズドン

井戸の蓋の部分が盛り上がつた気がした。

（えつと、あれ？）

困惑しながらも草治は思考する。その間にも定期的に井戸の蓋を蹴りあげる音と、井戸の蓋が盛り上がるのが見えた。

(今からじいちゃんを呼ぶわけにはいかないし)

ズドン、ズドン、ズドン

井戸の底から暴れるように音が続く。まるで井戸の底から二二かが這い上がってくるような。

(とにかく、井戸の蓋を押さえつけよう)

慌てて草治は走り出した。

木々が開き、井戸しかない広場のような空間に出た時だった。木の根っこに足を取られた。(あら?)勢いよく転び、額を井戸にブツケテしまった。バットで頭を打ち抜かれたかのような衝撃が草治の頭を揺らす。

(痛え)

額からやけに凄惨な刺激を感じた。血が出ているのだうとぼんやりと思いながら立ち上がる。次第に額から血が出てくるが草治の表情に苦痛の色はない。だが血が滴つているせいでいつも以上に死人のような顔つきにはなっている。

倒れた時にライトも手から落ちて地面に転がり、井戸を照らしていた。

ズゴン

今度は拳銃を撃ったかのような音と共に、井戸の蓋が吹き飛ぶのを草治は見た。

そして蓋から紙のようなものが剥がれる。

(御札が剥がれた)

御札は暗い森の中を蝶のように草治の眼の前に舞ってきた。草治は御札に視線を奪われ、昨日停止したロボットのように茫然と立っていた。

「よ、う、や、く、で、れ、た」

草治の真下から、井戸の底から女の声が響き、右足に冷やりとしたものを感じ心臓が跳ね上がる。

井戸の中から赤色の腕が伸びてきて草治の足をものすごい力で鷲頭かみにしている。

「つうお」

草治を井戸に引きずり込もうとする腕の力に引きずられ、足払いされて滑るように倒れた。

草治が倒れても人間の力とは思えないほどの力で彼の足は引っ張られる。

無我夢中で腕の力に抗う草治の真上から御札が風に舞う葉のよつて下りてきてペタリと草治の頭に張り付く。

足を引きもどすことに必死で張り付いた御札に気付く」とはなかった。それどころではなかつた。

井戸からぬつと茶色い何かが飛び出してきた。

もじやもじやとした茶色の綿に包まれたお化け、それが草治の一印象だった。良く見ると茶色の綿からは一本の細長い棒が角のように生えており、そして二つの赤い目があつた。一瞬だけ草治の足を掴んでいた力が抜けて、草治と茶色の物体は無言で見つめ合ひ。彼自身も額に御札を張り付け、出血している様は人間には見えず、化け物同士が向き合つてゐるようでもあるが。

草治はこの井戸から出てきた何かを見て井戸にまつわる説話を思い出した。

(井戸から鬼が放たれた?)

モジヤモジヤの物体も草治の顔を見て息を吸う気配を草治は感じた。

「IJの悪靈があああああ」

井戸から出てきたお化けが突如叫び、草治に飛びかかってきた。草治は呆気に取られる。

反射的に草治は茶色い物体を左足で蹴りあげた。二つの赤い目玉の真ん中をめがけて。見事に草治の足がもじやもじやお化けに突き刺さつた。草治を掴んでいた手が離れ、再び異形の物体は井戸に落ち

て行く。

(助かつた)

草治が蹴った恰好のまま固まつていると、すぐに井戸からもじやもじやの髪が這いあがってきた。

「てめえ、女の顔を蹴るなんて最低だな」

脅すような男口調が茶色のお化けから聞えた。構わず草治はもう一度蹴った。形勢逆転。今の草治にはこの井戸から出てきたモノに恐怖は感じなかつた。触ることもできるし、話すこともできる。つまり眼の前に居るのは鬼の変装をした人間であるとこつ答えを草治は出した。

(どうせじいさんが俺をからかうために誰かを雇つたんだろう)  
草治の祖父ならあり得ることだ。そして祖父の頼まれた脅かし役は草治の不気味な雰囲気に逆に怯えてしまつたといつうところだろうと草治は推測した。

草治に蹴られた自称女のお化けが再度落ちそつてになるも今度はすぐにして体制を整えて踏ん張つた。

「おー、低級靈。私を誰だと想つている? 薦めぞ」

「誰が低級靈だ。お前こそジジイにそそのかされて俺を驚かそつて魂胆だろ」

「はつ何を。血を流しながら頭に御札を付けて良く言つ。どうせ魔導師にチョッカイでも出してのされたんだろ? ザコが

「そつちこそ何を意味分からんことを。潰すぞ」

草治は会話が噛み合わない女に呆れながら足に渾身の力を込めて女を押しもどそうとする。

「ちよ、お前、調子に乗るなあああ

女が大声で叫んだ瞬間、草治の眼の前にいくつかの金色の粒が蚩のように横切つた。蚩達はゅつべつと蚩が女の下に集まる。

(いや、蚩じやない)

光の粒は全て金色の文字で出来ていた。本に印刷されている程の小さな小さな文字がどこからともなく現れ、いつしか文字は草治を取

り囲み、浮いていた。

文字の群れは女の周りを茧の如く舞い始める。

「くたばれ、クソガキ」

女が手をかざし、口元を吊り上げた。同時に文字の光が輝きを増す。光の群れが草治に一斉に群がり飛びまわった。

しかし、光は草治に当たると雪が溶けるように消えて行く。熱くも何とない。

（火の玉、でもないし糸も付いてない）

草治が薄らぐ光に困惑して女を見ると、女も赤い瞳を見開いていた。女の顔にも困惑が見てとれた。

「あれ？ 成仏しない？なぜ？もしかして人間？」

女が首を傾げる。草治も女を押しつけていた足から力を抜く。

草治はお化けだの悪靈だの間違えられることは毎度のことだ。文化祭でのお化け屋敷に客として参加したのに脅かし役が悲鳴を上げるのも慣れたものであるし、その不気味な容姿をして脅かし役としては最強だと言われこともある。そのため肝試しの仕掛けは一通り知つているつもりだった。だが今回ばかりは訽然としなかつた。

「今の光はどういう仕掛けなんだ？」

「いや、仕掛けはないけど」

そう言つて女が癖のある髪を搔き上げる。ここで初めて草治は女の顔をまじまじと見ることができた。色白の肌に癖のある長い髪が赤い着物を覆つっている。

また神秘的な赤色の目が鋭く、剣呑な印象を人に与える。そして特に目を引くのは頭から生えている一本の角である。

草治は女から生えている角に手を伸ばしてグイッと引っ張つた。

（取れない。飾りじゃないのか）

草治が女の角を搔すつていると女の眼が更に険しくなる。

「おい、何するんだ。角に触るな。変態」

ほぼ毎日不気味だの死人みたいだの言われているが、変態と言われたのにはさすがに傷ついた。仕返しのつもりで角を持つに手に力を

込めて井戸の上で女をグルグルと回す。気分としては煮込んだ鍋をオタマで搔き回しているようだった。ちなみに草治は料理が好きである。

「俺は変態じやない」

「それならまずは角から手を離せ。破廉恥男」  
女に言われてようやく草治は角から手を離す。女の厳しい口調に角を触ることは予想以上に良くないことだと草治もひとまづ反省し、もう一度名誉を取り戻すために口を開いた。

「俺は変態じやない」

「知らない。死ねばいいに」

「おい、すぐに変態を撤回しぃ。名誉既損だ」

草治が憤つて聞いたが女は答えずに井戸から出ってきた。女は十一單のような豪勢な着物を着ていた。

井戸を覗いてみると暗いためもあるが底が見えなかつた。近くにあつたライトを手に取り井戸を照らしても黒色の絵具で塗りつぶしたような空間しか見えない。どうやらかなり深い井戸であることが分かつた。

(この女はどうやって井戸を這いあがつてきたんだ?)

女を見ると着物を手で叩いて埃を落とすような仕草をしていく。草治は改めて女の角を見てから咳いた。

「鬼姫」

草治が呼んだ名前に応じるよつに女が顔を向けてきた。口元には薄笑いが浮かんでいる。

「それだ。それが私の名前だ」

女の赤い瞳が妖しく光つた。

魅入ったように草治はその瞳を見つめた。

鬼姫、それは赤い神社の文献に伝わる神社の裏の井戸に封じられた鬼の名前である。

「それで?お前は誰だ?」

女、鬼姫が草治に尋ねてきた。

草治は頭を搔く。

「赤井草治」

草治が名乗った途端、鬼姫が目を見開いた。

「お前が赤井家の当主。やつぱり死ね」

「何で死ななくちゃいけないんだ。俺が何をした」

鬼姫の罵詈雑言に草治も声を荒げた。

草治は怒っていた。先ほどから聞いていれば特に悪いことをしたわけではないのに鬼姫の草治に対する態度は癪に障る。もはや草治の中では先ほど彼女の顔を足蹴にしたことは忘れている。

憤る草治に対して鬼姫は彼から視線を外しながら口を開いた。視線の先には赤井神社の本殿がある。

「何で私の神社がボロボロなのか知ってるか？」

草治の顔が再び青褪める。

鬼姫は草治を睨む。

「答えはな、お前が神社の手入れを怠ったからだ。せめて一年に一回くらいは掃除をしろよボケ。神社がボロいと私も気持ちが悪くなるんだよ」

鬼姫の目にはうつすらと涙が浮かんでいるような気がした。罪悪感を感じた草治は鬼姫から逃げるように目を逸らしながら言い訳を考えた。

「考えてみたら当主は俺じゃなくてじいさんじやん」

(つまりじいさんの所為)

心の中で祖父に責任を押しつけてから真っ直ぐに鬼姫を見つめた。

「俺は悪くない」

堂々とした草治の態度に呆れるかのように鬼姫は息を吐いた。

「赤井源蔵は赤井家に婿に来たわけだから当主の資格はない。覚えておけ神主として必要なのは血筋だ。つまりお前が犯人だ。償え」  
鬼姫はどこからのドラマの主役のように人差し指を突き立てて草治に向ってきた。

(人に人差し指を向けるな)

気分を害しながらも草治は背中に引汗が流れるのを感じた。どうやら悪いのは自分という流れになつてきているのを感じた。というか智樹はほとんど家に居ないため神社の管理をしなくてはいけないのは草治であり責任の多くも自分にあるのは確かなのだ。

「償うつて何をだ？」

草治が恐る恐る聞くと鬼姫は小さな顔に手を当てた。

「無論、神社の復興だ。今や私の神社は誰ひとり参拝に来ないどころかホラースポットとして名を馳せている」

「言つておくが参拝者がほとんどいのはずっと前からだぞ。俺の所為じゃない」

「それは知つている。だから私の封が解けたことを機に再興を計ろうと思つている」

「それを俺に手伝えと？」

「そうだな。私の神社の神主に手伝つてもらいたいのだが」「明らかに嫌々な草治に鬼姫は上から下まで不躾に觀察した。それからため息を吐いた。

「チエンジで」

「は？」

鬼姫の脈絡を得ない発言に魔の抜けた声を出す。こんな簡単なことも分からぬのかと鬼姫は出来の悪い生徒を前にしたよに声を強める。

「だから、お前じや私の神社の神主として相応しくないからすぐに私の神社の神主としての地位を誰かに譲れ。早くチエンジしろ」「失礼な物言いに当然ながら草治は機嫌を悪くする。というか、鬼とやらが外来語を使うな。

「何で初対面のお前にそんなことを言わねりやならねんだ」別段神主の座がほしいわけではなかつたが、面と向かつて否定されるのは苛立たしい。怒つた態度を氣にも留めず鬼姫は堂々と答える。「私は普通の人間には見えないものも見えるからな」

見えないものが見えるからと言つて草治を否定することに繋がらな

い。未来でも視えるのだろうか。「いったい何が見えるんだ?」

「そうだな。色々見えるが」

鬼姫は考え事をするように少し間を置いた。

「一番は、魔法の文字の流れかな」

「何だそれ?」

胡散臭い視線を向ける。魔法の文字なんて聞いたことはなかつた。しかしながら先ほど見せられた金色の文字が脳裏を過つた。あれのことだろうか。

「ああ、深く考える必要はない。様は、森羅万象を司る氣の流れだな」

説明を受けた草治は釈然としないものを感じ、ため息をついた。

「その流れが見えるからって、俺の何が見えるんだ?」

「だから言つているだろ。森羅万象を回している流れが見えるつてそこで草治は気がついた。鬼姫の瞳が紫色に変化している。呑みこまれそうな光に見とれる。

「つまり、俺の周りの気が良くないと」

今まで様々などところで祟られている等と言われてきただけあつて草治に驚きはない。むしろ納得すらしてしまう。確かに呪われているような人間が神主というのは不吉だろう。ところが鬼姫は曖昧な表情を浮かべる。

「まあ、そ่งだが。特筆すべきはお前に憑いている守護霊のことだ」

「守護霊?」

またも草治は胡散臭そうな声を上げる。守護霊と言えば人間を災いから守ると言われている霊のことだ。

「今はいないが、赤い着物を着た少女の霊だ」

「ああ、あれか。なんか前世の恨みだとか言つてるんだよね」

げんなりと草治が言つた。あの少女とは長い付き合いだが、あれが守護霊だということには驚きを持つた。

「何にせよ、お前の守護霊は正常に機能していない。本来なら宿主の周りの気の流れを良くすることが日々の職務なのだがお前のはむ

しろ悪くしている。つまり呪われているわけだ」

少しだけ同情するような表情で草治を見る。一方で草治はやはりなあと頷く。生まれてから16年、本当に不幸続きだった。きっと彼女がいないのもその所為なのだろうと考えだす。

「俺が祟られているのは了解した。俺の守護霊を良くすることは出来るのか？」

自分でも馬鹿げたことを聞いていると思いながらも尋ねずにはいられなかつた。一応眼の前の女は井戸から出てきた時にも種も仕掛けもなさそうな光を出現させている。それに、いつの間にか紫色だった眼の色も赤色に戻つていて。彼女の胡散臭い話を信じて良いと思うようになつていた。しかし鬼姫は再びため息を吐いた。

「そんなことは出来ん。そんなことよりも大切なのは次の神主のことだ」

薄情な否定の答えに草治は顔を引きつらせた。

「おい、本当に方法はないのか？」

思わず鬼姫の角を掴む。さすがに呪われていると分かると氣分は悪い。前後に角を動かす。鬼姫は迷惑そうに顔を顰めて草治を引き離そうとした。ところが草治の力が以外に強くなかなか離れない。

「分かった。私が後で守護霊に悪さをしないようにかけ合つてやるから、角から手を離せ」

鬼姫が折れ、草治は名残惜しそうに手から力を抜く。いつのまにか角で遊ぶことに夢中になつっていた。「話を戻すが、お前に神主を続けてもらつるのは困るのだ。だから早急に次に役目を引き継いでもらいたい」

草治は素直に頷いた。拒まれていた理由が分かり草治自身ではどうしようもないのでもはや鬼姫に抵抗しようとは思わなかつた。むしろ不幸が減るかもしけないので珍しく胸を躍らせていた。

「そうか、良かつた。それならば早く相手を見つけなければな」

「そうだな」

草治は鬼姫に協力しようとするよりわざかに弾んだ声を出す。神主が

何をするのか知らないが、とにかく暇な奴を身繕つてこよつと意気込む。と、草治は神主に必要なことが良く知らないことに気がついた。靈感みたいのが必要なのだろうか。

「それって誰でもいいのか」

草治が聞くと鬼姫は眼を丸くした。

「いや、お前がいいならだれでもいいが」

「へえ、そうか」

草治は満足そうに言う。次の神主を自分で決めていいならば適当に決めてしまおうと草治は暇そうな知り合いを浮かべる。とは言つても草治に知り合いは少ないが。中学では割かし友達はいたのだが高校の友達なんてたつたの一人。しかも不登校。悲しいことに類は友を呼ぶ。不登校の友の顔を思い浮かべた。不登校だし暇であるひつと結論付ける。

「よし決めた。有馬に決めた」

草治が鬼姫に言つと彼女は表情を固めながら一步草治から身を引いた。

「有馬つて有馬辰巳か？」

「そうだが。なんで知っているんだ？」

「それは、私は先ほどまで封印でここらの土地と繋がつていたから大かたの土地の情報は把握している。一応は神主のお前の身近な人物の情報は集めやすかった」

鬼姫の話を聞きながら、草治は感心したが鬼姫は軽蔑したような視線を送っていた。何か顔に憑いているのかと顔に手を当てて血が付いていることを思い出した。それほど深くはないがこちらも早く手当しなければいけないであろう。

「とりあえず明日ぐらいに有馬に頼めばいいか？」

「いや、ダメだろ」

草治が選んで良いと言つた癖に鬼姫は反対した。

「何故だ？」

「なんでつて有馬辰巳は男だぞ？」

「普通は男が神主だろ」

それを聞いて鬼姫は今まで一番大きなため息を吐いた。訳が分からぬと言つた表情で草治は鬼姫に文句を言う。

「何だよ。それならお前が決めればいいだろ。だいたい俺は不平を言つていると、鬼姫は疲れたように目を閉じながら草治との間に右手を出して制した。

「お前は勘違いをしている。神主は赤井の血を継いでいないとなれないと」

鬼姫に言われて草治は首を傾げた。混乱している草治に鬼姫は説明を続ける。

「現在、赤井の血筋を継いでいるのは草治、お前だけだ。しかし、お前は絶望的なほど神主として向いていない。よつて」

そこで鬼姫は真剣な面を上げる。

「今すぐにでも草治には貰つて子ビもをつくつてもらわないといけない」

草治は小首を傾げた。今言われたことが頭の中で上手く変換出来ないのか、呆けた顔を見せる。相変わらず鈍くさい奴だ、と鬼姫は空を見上げながら呟いた。

## 少年と姫の赤井神社復興計画

赤井草治、16歳。初恋というか初の告白は中学2年の夏。撃沈の思い出。それから恋愛などしたこと無い。

言い訳をすれば、周りの女子は怖がって近付いてこないのだが、実際のところ怖がられてなくとも口下手を自覚している草治には女子と仲良くなれるとは思えなかつた。それなのに、といった感じで草治は心中で愚痴を振りまきながら、雑巾をゴシゴシと動かした。「いやあ、本当に有難いことですよ」

赤井源蔵は上機嫌な調子で自称神様に話しかけている。鬼姫も愉快そうに胡坐を掻いている。彼らの横には酒がいくつも転がつていた。「正直なところ、草ちゃんの将来が不安だつたんですよ。何せ本当に根暗で」

「安心してくれ。私のチカラでの社会不適合なクズをハキハキとした性格に矯正しててみせる」

鬼姫が大口を開けて酒を一気飲みしていく。グラグラと笑いながら祖父も酒を仰いでいる。さりげない祖父からの中傷にもめげずに草治は赤井神社の掃除を淡々とこなす。

家に着くなり、鬼姫を見て茫然としていた源蔵だったが事情を説明したところ、というか草治の嫁探しをするという話をした途端両手を上げて喜び歓迎し出してしまつた。一方で草治は神社の掃除を命じられ、ようやく一通りの草治が終わつたところだ。

本当なら掃除機を使いたいところだつたが、夜中といふこともあり雑巾がけをしようということになつた。近くに民家どころか昼間にも人通りもない山の麓に神社があるのだからそんなことは気にする必要はないと草治は思つてゐるのだが。

「掃除が終わつたぞ」

ひとまず全体の雑巾がけが終わり、話し合つて一人に声を掛けた。すると酒の所為か若干顔を赤らめた鬼姫が睨んできた。

「私の本体は、井戸にあり、今はこうしてここにあるわけだ」  
そつ言つて彼女は自分を指差し、次に上座に飾つてある鏡を指差した。

「しかしながら、この神社を通してこの土地からの文字を食べるわけで、ここは人間で言つ口に等しい。口が汚れていてお前はどう

厳しい口調で草治が問われ、彼は頭を搔いた。草治の態度が気にくわなかつたのか鬼姫は更に顔を赤らめて口を開いた。

「おもにこの鏡が私と繋がっているのだが、この鏡は神主と繋がっている。草治、変に呪われたお前がこここの神主になつた所為でこの鏡も汚れ、結果私の力も激減している

「それは、俺にはどうしようもないことだろ」

「そうだな。確かにそうだ。だから、誠心誠意を込めて必死に掃除をしろ。そうすれば、私がこの土地を征服し終わつた後、貴重なポストをお前に宛がつてやろう。頼りにしているぞ草治」

「征服って何だよ。お前、一応は神様だろ。それと俺は貴重なポストなんていらない。俺に憑いてる女の子をどうにかしてくれればいいよ」

草治が言つても、彼の言葉が耳に入らないのか鬼は拳を握りしめ、決意を述べる。

「私は鬼だが神様の資格もある。今の世の中は不条理に満ちている。だから、支配しなおさなくてはならない。その第一歩としてまずは新しい神主を設け、草治を遠ざけ、私のチカラを戻さなくてはならないのだ」

「それは神様の言つことでは無いと思つぞ」

一応現時点の神主がため息まじりに言つた。

しばらく神様について語つていた鬼姫だが、眠くなってきたのかいつしか神社の床に寝転んだ。風邪を引いてはいけないということでした。

草治が彼女を抱き、祖父と一緒に神社を離れ家に戻ることにした。源蔵は安心しきった表情で草治に抱がれている鬼姫を見ていた。まるで父におぶさる子供の様である。

「麻美が言つていたよ」

呟くように源蔵が言つた。草治は怪訝な顔で祖父に視線を向ける。麻美といつのは草治の母親だ。彼女は先代の神主といつことになるのだろう。

「世の中は、神様にとつてどんどん生き難くなつているつて。私達のような者がサポートしてあげないといけないと言つていた。」

「そう、俺には関係無いよ。こいつのサポート何て面倒くさいし」

素つ氣なく、草治が呟く。

「でも、まあ、誰かに頼りにされるのは久しぶりだから、少しは協力してみるよ。もちろん子どもをつくるのではなくて他の方法でね」そう言つてから草治はため息をした。相変わらず暗い淀んだ瞳を祖父にかえす。

「母さんはひと際靈感が強かつたみたいだけど、鬼姫のことは知つていたのかな」

「どうだらうな。麻美はこの神社を怖がつていたようだから、何かを感じたのは確かだ」

20歳になるくらいだらうか、麻美は神社に近付くことを頑固に否定するようになつたのを源蔵は思いだす。「私は、ここに相応しく無いみたい」麻美は逃げるようになついていた。

あれから、およそ20年。赤井神社の神様を背負つことは彼女の息子にとつてはどうだらうか。

今日も夢を見る。

桜の下、そこで踊り狂う赤い着物の少女。

「私は知っていますよ。鬼が目を覚ましたようですね。あの鬼はきっと私とご主人様を引き離そうとするに違いありません。本当に困りました」

少女の声が聞こえてきた。

少年はため息をつく。

「君が俺にとり憑くのを止めれば問題は無くなると思うけど

「そうはいきません。」

力強い声が響いた。

「私はご主人様に深い深い恨みがあるのです。私はご主人様の幸せな姿なんて見たくないですから。私は不幸でやる気の無いご主人様が大好きなんです。だからご主人様に彼女が出来るなんて認められません。何が何でも邪魔して見せます」

踊るのを止め、少女が握り拳を固め「えい、えい、おー」と意気込む。

赤井草治が通う聖葉学園はそこそここの進学校だ。

校門から校舎までのやたら長い道を対照的な黒い制服の少年と赤い制服の少女が歩いて行く。

疲れのためか、草治の顔はいつも以上に暗い。

その隣りで長身の鬼姫が楽しそうに歩いている。鬼姫が学園に行くと今朝宣言した時は非常に焦った草時だったが、今は頭には大きめのリボンを巻いて角も隠し草治の母がかつて使っていた制服を着こんでどうからどう見ても普通の、むしろ美人の女の子という感じだ。「サイズもぴったりで以外と似合うな」

「ああ、この制服のことか」

鬼姫が視線を落とし自分の姿を眺める。少し顔が紅い。

「聖葉学園は50年前に設立されてから制服のデザインは変わらないから助かつたな」

男子は黒が基調、女子は赤が基調なので見事に一色が学園の中を動

かしている。制服さえ着ていれば部外者の鬼姫も学園に上手く紛れることができるのだ。

「近頃の学校では変出者が校舎に入らないようにカードで認識登録しないと校舎に入れないと。この学園はこんなんで大丈夫かと疑いたくなるな。設備も旧式が多いし」

草治が不平を漏らした。しかしながら草治は聖葉学園の外観は嫌いではなかつた。設備は古いが校舎は整つていて、西洋風の高級ホテルのような白い校舎は建てられた年月を感じさせない。

「まあ、そのおかげで私もこの学園に遊びに来れたわけだが」

機嫌が良いのか声の調子が軽い。

「良いか、草治。私はこれでも一応は縁結びの神様を目指しているつもりだ。私が学園の女を吟味し、今日の下校時間に候補者たちを体育館倉庫におびき寄せる。お前はどうやってその子たちを口説くか授業の時間に考えておけ」

「あほか」

「ふふ、確かにアホのような作戦だが、私の眼にハズレは無い。必ずやお前に気のある生徒を見つけてみよう」

「そんな子はいない」

「そんなことはないわ。任せておけ。きっと私に結べない縁は無い」

不敵に鬼姫が笑う。

草治はため息をついた。

「ところで草治はどういう子が好みなんだ？」

そんな学生同士のような質問に草治は少し考え込んだ。

「そうだな。特に、そういうのは。性格が合えば誰でも。というか誰でも縁とうのは繋がるものなのかな」

「そういうわけではない。大方、繋がるべき縁というのは決まっているものだ。ただ、聞きたかつただけだ。それに、私にどつては子どもがほしいだけ」

そう言つてずんずんと前に進む。その話を聞いて、草治もいたさか

引っかかるものを感じた。

「それなら、例えば、俺のクローランとかはどうなんだ？」

あまり言いたくなかったが、言つてみた。血統が大事だと言うなら問題は無い。それに鬼はくるりと踵を返した。その顔は少しだけ陥がある。

「確かに、それでも問題無いかもしかんが、私は私達は生命の儀式を冒涜するような行為は認めないからダメだ」

「いや、こつちも何となく言つただけだ。それにクローラン技術は公に禁止されている」

鬼が意外にも怒つた口調だつた所為か少し言い訳のような感じで言った。

と、鬼が足を止めた。何事かと草治が視ると、前方で登校している少女に視線を向けている。

「あの、色黒で金髪の女は誰だ？」

「ああ、天竜寺か。天竜寺妃」

妃は優雅とも呼べる足どりで歩いている。

「嫌な感じの人間だな」

ぼそりとした囁きに草治が驚いて振り向いた時だつた。

鬼姫の頭上に白いものが落ちてきた。

叩きつけられたヨーグルトのごとくそれは飛び散つていく。だがヨーグルトは空から降つてこない。空から落ちてくる白いものと言えば、鳥の排出物だ。鬼姫は口をぽかんと開けたまま放心している。

「ばーか、ばーか」

真上からの声に草治が顔をあげると、空に赤い着物の少女が浮かんでいた。今日も夢で見た幽霊少女だ。最近の彼女は夢以外の場所に出現する頻度が高くなつてているような気がする。

この少女を鬼姫のチカラで何とかしてもらいたいわけなので、このまま少女を懲らしめてくれると喜ばしい。

白い液体的なものをたらしながら鬼姫はわなわなとふるえていた。

「あの、ちび殺す」

草時の隣りから怒りを抑えた声が響いた時には赤い着物の少女は消えていた。

「私から逃げられると思つなよ」

そう言つて鬼姫が校舎に向かつて走り出すのを草治はひきつた顔で見送つた。

周囲から白い視線が草治に突き刺さる。「赤井君が呪いで女の子に衛生的に良くなものを振りまいたわ」などというひそひそ話も聞こえてくる。

「帰りたい」草治は暗澹たる気持ちでため息をついた。

## 赤井神社の復興計画2

楽しく騒がしいお昼の時間。

草治は食堂の隅でちらりと周囲を見る。草治は未だ今日一日の間に誰とも交流を持つていなかった。うん、これは不味いね。と一人自嘲する。

「おい、草治何をしている？」

後から声を掛けられて草治は仕方がなく振り向いた。

「何一人でたそがれている」

そこには鬼姫が不機嫌な顔で立っていた。

「本当に大変だったわよ。一応、シャワー室がこの学園にあるって知つてたからプールのところまで走つて頭洗つてからあのチビを捕まえてぼっこにしてあげたわ。だから当分は悪さはしないと思うわ。でもまあ、あの子を怒らすと厄介だから、少し作戦を変更しなくちやいけないかも知れないけど」

「へえ、そう」

軽い相槌を打つて草治はカレーに手をつけようとした。鬼姫が隣りに座り、草治のスプーンを奪つてカレーを頬張つた。鬼姫は草治の昼飯を口に入れてから、眼を見張る。

「こんな辛いものを良く食べるれるな」

「俺はそれほど辛いとは思わないが、激辛らしいぞ」

「草治は変なものが好きなのだな」

鬼姫は涙目になりながら草治の「コーヒーを奪い、一気に喉に流し込んだ。

「しかもこのコーヒー無糖かよ」

苦味のある薬を飲んだ子どものような顔で鬼姫は草治を睨んできた。

「コーヒーに激辛カレーって草治はマゾなの？」

大変ご立腹である。草治としてはお気に入りの組み合わせなのだが。少し傷つきながら草治は話題を変えることにした。しみじみと鬼姫

の服装に注目する。

「母さんの制服つてまだ残つてたんだな」

「まあ、草治の祖父は思いでを大切にする奴だからな」

そう言つて鬼姫は立ち上がつた。食堂の中央から水くみ所まで向かう。先ほどは制服を着ていれば鬼姫が浮くことはないと思っていた草治だが、他の生徒達の流れに入つていく彼女を見てその考えを改めた。鬼姫は背も高く、スタイルも良い。モデルのような鬼姫は周囲の注目的となっていた。水を汲み、歩きながらコップを煽つてしているのは御行儀が悪いことだが、鬼姫がそれを行うと何故か絵になつていて、戻つてくる鬼姫を見ながら彼女が部外者だとばれるのは時間の問題だなあと草治は感じた。周りの視線が気にならないのか、クールな表情で草治の隣に座りなおし唐突に言つた。

「さて、そろそろ作戦を説明しよう」

「何だいきなり」

草治が怪訝か顔付で尋ねると鬼姫はニンマリと笑つた。ポケットからまつたく見覚えのない携帯を取り出した。黒猫のストラップが付いている。

「これは、お前のか？」

鬼姫はニヤニヤと笑いながら首を振り、彼女の斜め向かいをピシリと指差した。

「この携帯はお前の知つているあそこの金髪のものだ」

鬼姫の人さし指は食堂で一番派手な女子の集団を向いている。その集団の中で金髪は数人いるが草治の知つている人物は一人しかいないかった。天竜寺妃。鬼姫が示す先で彼女は女王のような雰囲気を出しながら自慢話を侍従の如く彼女に笑つてている生徒に聞かせている。

「なんで天竜寺の携帯をお前が持つていいんだ？落ちたのか」

「そんなミスは彼女はしないさ。先ほどの彼女は体育の授業の時に鞄に入れっぱなしで更衣室に置いてあつたから拾つてあげたのさ」してやつたりな表情の鬼姫と食堂からそそくさと立ち去り人通りの少ない廊下で草治は声を顰めながら軽く叩いた。

「それは拾つたのではなく、窃盗だ。すぐに返して来い」

「だから、それが作戦なんだって」

叩かれた所を撫でながら鬼姫が言つ。

草治はいつも以上に顔を青くした。

「作戦つて何だ？」

「昨日言つただろ？ お前に恋人を作るんだよ」

「それは聞いたが、それとこの携帯はどう関係あるんだ？」

「本当に草治は頭が悪いな。だから天竜寺妃とお前をくつつけるんだよ」

胸を張る鬼姫の額を草治は軽くつついた。「アホか」それ以上の言葉が出てこなかつた。言いたいことは山ほどある。相手は草治が選んでよいはずではなかつたのか。というよりも昨日高校生でそういうのはまだ早いと言つたばかりではないのか。何故よりもよつて天竜寺なのか。草治が口をパクパク動かしている鬼姫が口を開いた。

「言いたいことは大体予想はつくんだけどね」

申し訳なさそうに笑いながら水を一口。

「私には気の流れが見えるって話はしだらう。流れは全ての事柄を指し示す。つまり人間のその流れを見ればどんな奴なのかってことが大方見当がつく」

それから天竜寺の携帯電話を軽く人差し指で弾いた。

「そんでもつてその流れを確認したところ。ここら辺の土地の中では草治とあの娘が非常に相性がいいことが分かつた」

自慢気に説明を聞きながら草治はようやく我に帰る。

死人のような濁つた眼を三角にして草治は目の前の女に睨みを入れる。

「そもそも俺はお前の考えに賛成したつもりはない」

頑固とした声で反対した。昨日、恋人探しをしろと言われてからも草治は即座に否定した。第一、友達もまともにいない自分に恋人など作れるはずもない。

「それじゃあ、私に任せなさい」

と鬼姫は言つたが、他人の恋路に茶々を入れるやつなど信用できるはずがない。そういうのはキチンと好きな相手が出来てからがいいと思つてゐるのだ。

姫はむつとした顔を見せるも、草治にとつては引くことが出来ない。

「あなたの腰の引けた態度だと一生出来ないの。アンタのやり方じやダメ。それは私が保証する。こう見えても私は縁結びとしても機能していた」

そんな話は信用できない、草治は鼻で笑つた。頑固な草治に思案氣に少しだけ眉を顰めた。

「いづれにしろ、ここに携帯がある。これは返さなくちゃならないだろ?」

「それはお前が盗つたものだからお前が返すのが道理だ」

怒つた口調の草治にそれはできないと首を振る。

「今、私が彼女の前に出ていくと色々と厄介なことが起こる」「何が厄介なんだ」

詰め寄る草治にそれは秘密だがと嘯いてきた。

「とにかく私に言われた通りに彼女に携帯を返してみろ。そうすれば彼女と草治の仲は急転していづれは恋い仲に陥ることは間違いない」

自信満々な態度に怒りを通り越して呆れを感じた。草治から陰が薄れたところで鬼姫は急に優しく微笑んだ。

「私はお前を見てきたからな少しお前のことを知つてゐる。本当はもつと人と関わりたいんだろ?」

初めて見せられた柔らかい表情に草治は更に毒氣を抜かれた。そして彼女に言われたことは存外的外れでもない。

「今まで少しだけ草治の周りの運が悪かつただけだ。今からでも少しずつやり直すことはできるさ。今回のはまあ、簡単なりハビリみたいなものだ。とりあえず携帯を返すだけでいいから騙されたと

思つてやつてみな

しばらくの間草治は肩まで伸びた前髪を弄っていたが、  
「携帯、返すだけだからな」 そつとつて携帯をふんだくった。

草治が見るかぎり、天竜寺妃は浮いていた。もちろん草治より浮いているわけではないのだが、彼女はいつも一人だ。というよりも人を近づけさせない雰囲気があつた。

容姿も勉学も運動も家柄も完璧というだけあってなのか、それとも遺伝子教育者ということが人を遠ざけているのかもしない。遺伝子教育には多大なお金が掛るため、ほとんど一般家庭からはそれを行う者はいない。さらに遺伝子教育と言つても簡単な操作だけしてもらつたような少し裕福な家庭が弄つた程度の遺伝子操作が普通だ。天竜寺のような完璧さを持ち合わせていてはうが不自然なのだ。そして彼女の性格や言動にもかなりの問題があつた。

いつも嘲笑しているかのような笑みを浮かべて、時には明らかに侮蔑したことを平氣でのたまう。

そんな人物に好き好んで近付く人間は少ない。遺伝子教育者専用の学校に行けばいいのにという陰口を草治は何回か聞いたこともある。とはいえ、天竜寺の父親の天竜寺財団が非常に強い権力を持つている。結果ごますりのためか天竜寺に媚びへつらう生徒は多い。

彼女の周りには取り巻きがいることが多いため、簡単には携帯を返すことが出来ない。それなら仕方がないあきらめて職員室にでも届けよう、草治はため息をつきながら思った。

しかし、鬼姫はそんな草治の気持ちを見透かすように言つ。

「大丈夫よ。約束通り体育館倉庫に彼女を呼んであるから」 鬼姫は楽しそうにそう宣言した。



## 少年の葛藤と少女の疑惑

ありとあらゆる資質は設計図である遺伝子によつて決まる。だから血縁というものが大切なのだ。母である麻美は草治にそう言い聞かせた。

「努力しても、設計図に入つてないものは出来ないの。人間は空を飛べないし、海で生きることは出来ない。同じように遺伝子の設計図の中に、幽靈が見える要素を持つていない人には幽靈は見えない。遺伝子の中に魔法を操る要素が無い人には魔法は操れない。それならば、遺伝子の中にこれらの要素を無理やり付加すれば魔法が使えたり、幽靈が見えるのよ。これはすごいことだと思うわ。でもね、問題はその貴重な遺伝子の設計図がどこにあるかよね。彼らはずつと探し続けるのよ。私たちの持つ異形の遺伝子を」

麻美は疲れた口調でそう言つていたが、幼い草治には理解できなかつた。

ただ、自分の設計図は人見知りで頭の回転が悪くなるように造られているのだろうなと思ったのだった。

「何してんだ、俺」

放課後の倉庫の扉の前で赤井草治は固まっていた。

鬼姫の作戦に嫌々ながら草治は参加することにした。他人の携帯をいつまでも持つているわけにはいかない。しかしながら、草治には直接学校で渡す勇気はなかつた。本来ならばこっそり下駄箱にでも入れておきたいところだが、彼女の言によると「大丈夫だつて。今日の所は直接渡すだけでフラグが建つし。そんな睨みつけるなよ。

独断でことを進めたのは悪かったよ。でも安心しなさんな。後での子の下駄箱に体育館倉庫の中で待つてるよ。ハートつて文を送つておくから。いや、冗談だつて。ちゃんと携帯拾つたので倉庫に来て下さりつて書いておくから「そんなことを自信満々に言い残しどこかに消えてしまった。

そうして放課後になつた今、草治は予定通り倉庫にやつてきたのだ。気だるそうな表情だが、彼の心臓は様々な思考で早鐘のよつに脈打つっていた。というか頭が真つ白。

(彼女はきちんと手紙を送つたのだろうか。何か妙に楽しそうだつたし、何か好きで的なことを書いてないだろうか。というか放課後に呼び出しなんてまるで告白みたいじゃないか。やっぱり帰ろうかなあ。でも携帯どうしよう)

色々な不安はあつたのだがとりあえず今日は携帯を返すだけでいいと彼女も言つていた、つまりこれはただの親切。とよつやく気持ちを割りきり、倉庫の扉を開いた。

あまり使われていらない倉庫の所為か埃が舞うのがはつきりと見えた。薄暗かつたが誰かがいるようには思えない。考えてみれば特に時間を設定されていたわけでもない。

(もしかして鬼姫に遊ばれてただけだつたりするかもな)

実は携帯を盗んだというのは嘘で、倉庫に入つたらドッキリとか書いてある可能性もあるのではと考え直し、一寸前まで緊張が嘘のように溶けていく。

埃が収まるのを待ち、中に踏み込む。誰かがいる様子も、何か細工をしている様子もない。倉庫はじめじめとしていて暑苦しい温度である。

(考えてみれば、仮に天竜寺が手紙を見てもここに来るとは考えにくいな)

冷静になつてみるとこんなところに呼び出されて来るような人間はあまりいない。おまけにあの天竜寺なら無視する可能性のほうが高い。そう考へるとホッと胸を撫で下ろしたくなるような気持になつ

た時だった。

後ろから差し込んでいた赤い光がスッと抜けた。がつシャン、と鍵を閉める音が暗くなつた部屋に響いた。開けっぱなしにしていたドアが突如閉められたことに気が付き、はつと後を振り向こうとした。しかし、背後から力強く両腕を回され身動きが取れないようにながつちりと草治は固められた。

押しつけられた腕からどうしようもない痛みがあつたが、そんなことよりも草治は頭に血が上るのを感じた。

(鬼姫の奴、何がしたいんだ)

イラつく頭の中で草治は理解した。草治を押さえつけている腕は以外にも細かつたが、掴まれている腕の血が止まると思えるほど人間離れした握力があつた。こんなことをする奴は、そしてこんなことが出来るのは一人しかいない。自分は鬼姫にいよいよ遊ばれていたのだと。

「遊ぶのもいい加減にしろお。クソ女あ」

草治は首を後に反らせてから持ち前の低い、自分ですら寒気のするような声を背後に囁いた。化け物であり、優勢な立場の鬼姫が怯えてくれるとは思わなかつたがいらついたら黙つていられないのが彼の性分である。内公的な人間ほど沸点は以外と低い時がある。

しかし、以外にも後ろからは「ひつ」と息を呑む音が漏れ、一瞬だけ腕から力が抜ける。瞬間、草治は弾かれたように身体を捻りながら飛びあがり、右足を引きつける。そして背後の小柄な人影が視界に入る。

(鬼姫にしては小さくないか?)

湧き上がつた疑問を振り払い、相手に反応させる暇を与えず草治は至近距離から右ストレートの蹴りを放つた。

蹴りを放つてからの小柄な影の動作は素早く、余裕をもつて蹴りを両腕でガードする。それでも草治は蹴りの反動で影から飛びあがるように離れることに成功した。空中で態勢を整え、地面で受け身をとる。埃を舞いあがらせながら床を転がり真横にあつた細長いポー

ルを抜いた。子どもの頃から祖父に剣術を習っていたので多少の心得はあつたりもするので獲物が手元にあると妙に自信が湧いてくるようにも思えた。

「てめえ、俺に何の用だ？」

少し強気になりどこかチンピラの如くドスを効かせる。埃も次第に収まりうす暗かった倉庫にも眼が慣れてきたのか眼の前の人物の輪郭が確認できるようになってきた。（鬼姫ではないな）

「何を今さら、白々しいわね」

不機嫌そうな声を聞いて草治は間の抜けた声が喉から出た。

「天竜寺？」

草治の眼の前に立つのは、草治よりも少し背が低いぐらいの毅然とした顔付きの少女だった。

草治はポールを握る手から力を抜いた。しかし天竜寺からただならぬ形相をしている。

「貴方が倉庫に来いって手紙で書いてきたじゃない」

瞳を剣呑の細め、天竜寺妃は草治を睨んできた。とてもじゃないが、落ちていた携帯を返しにもらいに来ましたあという雰囲気は欠片もない。

もしや鬼姫があらぬことを書いたのではという不安が草治の心で膨らむ。つい先ほど背後から襲われたことを考えると、「果たし状」的な手紙を入れたのではなかろうかすら思えてしまう。はたまた「オマエノ携帯ヲ盗ンダ。返シテ欲シクバ体育館倉庫一二来イ」的な脅迫文かもしれない、と草治の顔は青白くなる。

（何が恋愛成就だ。縁結びの神だ。やっぱりあんな不得体のしれない奴の言うことなんて聞かなければ良かつた。というか手紙の内容を確認しておけば良かつた）と草治は悔やむ。

「アンタの携帯が落ちていたのを見てな。ただアンタに返そうと思つてここに呼んだんだ」

咄嗟に鬼姫と打ち合わせした脚本が口から出していた。今さらどうしきつてここに呼んだんだ

ていいか分からず、半ばやけになつてポケットから天竜寺の携帯を取り出した。

「これ、だろ?」

天竜寺に近付こうと乱氣な様子であるがその瞳はしっかりと草治を見据えている。

「よく落ちたのが私の携帯って分かったわねえ」

からかうような口調に草治は内心動搖するも、憮然とした表情は崩さない、と言つよりも崩れない。「裏庭で落ちたのを見てな。だからと言つてアンタに声を掛けるのは躊躇われたんだよ」

アンタは目立つから俺みたいのは近づきがたいと呴いてから、天竜寺を伺つた。相変わらず意地の悪い笑みを浮かべながら口を開く。

「あらあら。私は今日裏庭に行つてないんだけど」

さすがに草治は顔を引きつらせた。「騙されたと思って」と言つていた鬼姫の優しげな顔が浮かぶ。(マジかよ。本当に騙しやがつて。もう誰も信じられないや)

「ちょっと待て。本当のこと言つとだな。この携帯は」

そんな草治に対しても天竜寺は遮るように言つ。

「ふん、分かつてるわよ。アンタが盗つたんでしょ」

言いながら、天竜寺は燃えるような傲慢さを瞳から消した。そうして懐に手を突っ込んだ。先ほどとは間逆に獲物を見つけた獣のよう容赦のない眼差しを向けながら刃渡り20センチくらいのナイフを取り出した。

「さあ、始めましょうよ。互いの行く末を賭けて。古き世の魔物さま。私は『ヤオヨロズ』直属の魔人狩り部隊の妃と申します」

歌つように口ずさみ、表情を歪めた。右手に収めたナイフで真横に空を切つた途端刀身に小さな小さな電光が走り青色に染めていく。(つて、何で盗みだけでナイフを出すんだ?)

草治は尋常でない殺氣を受けてパイプに力を込める。

天竜寺は獰猛な殺氣を放ちながら態勢を低くした。天竜寺の全身、頭から足先まで薄い青色の光の膜に覆われ、暗い部屋の中で飢えた

獸の如き存在感を放つ。天竜寺の髪から静電気が弾ける音が立ち、それを合図としたのか一直線に草治に向かつて突っ込んで行った。霞んでしまうほどに天竜寺の動きは速く、およそ9歩はあつた距離が一瞬で縮まる。草治は驚愕しながらも天竜寺の右手に握られたナイフの軌道を先読みして獲物を掲げ受けの型を作る。しかし天竜寺から振られたナイフの蒼い閃光は鉄のパイプを古枝のように両断した。美しい弧を描いていた青光りするナイフは草治の喉元で止まつた。

「油断したな。馬鹿め」

天竜寺の嘲笑の言葉と同時に草治の左手に冷たいものが鈍い音を立て掛けられた。草治は首にナイフを突きたてられているため何が起こったのか確認できない。状況に付いていけずに茫然と立つていると、天竜寺は以外にもあつさりとナイフを離した。

草治が未だに背筋を伸ばして立つていると天竜寺がにやけながら、左手を掲げた。ジャラッと音を立てて草治の左手も持ちあがる。不思議に思つて腕を見る一つの間にか左手首に手錠がかけられ、黒い鎖で天竜寺の腕の手錠と繋がつていた。

「お前、何がしたいの」

草治が聞くと、キツネのように笑みを深めてから口を開いた。

「これは封魔の手錠。もうお前のチカラは使えないわ」

「おい、意味分からんぞ」

「シラバクレても無駄よ。依然から怪しいと思つていたのよ。アンタの周りで珍妙なことがたくさん起きてるから。何より私のポケットから、携帯を取つたのが証拠よ」

投げ捨ててしまつた携帯を一瞥してから言いきつた。当の草治は失礼にも何だコイツといった印象を抱いてしまつ。黙り込む草治を勝ち誇つた顔で眺める。

「私の遺伝子に設計された刻印はね、小さな雷を造ることしか出来ない。それこそちょっと強い静電気くらいの。でもね、電気を身体中に流して神経を刺激させれば身体能力は格段に上がるわけ。それ

に、特注性のこのナイフに私の電気を与えて振動させれば、鉄も簡単に一刀両断の武器の完成つてわけよ」見せびらかすように右手に握られた青く放電しているナイフを持ち上げてから話を続けた。

「そんでもつて私は学校ではいつも周囲に微弱な地場を張つてるわけ。だから私の身体のおよそ半径1メートルくらいに誰かが近づけば嫌でも気が付いちやうのよ。でも私の胸ポケットに入っていた携帯は私が気が付かない間に抜き取られていた。つてことは私から携帯を盗んだやつは奇妙なチカラがあるって分かるの」

天竜寺の頬は草治を捕まえられてよほど嬉しいのか上氣して赤く染まっている。と、ここまで説明を聞いてようやくお互いの誤差に気が付いた。

「言つておくがアンタの携帯を取つたのは俺じやないぞ」

草治がげんなりとして言うと今度は天竜寺が呆ける番だつた。天竜寺の話から考えると彼女が魔人というものを捕まえようとしているのを推測できる。そして天竜寺が探している魔人というのが鬼姫であることは連動して推測出来る。

「ちょっと、下手な嘘は止めなさいよ。アンタ以外の誰が私のチカラを相殺しつたって言うのよ。つて何ため息付いてんの」天竜寺が怒鳴るような声で草治に詰め寄つてきた。

その時、うす暗かつた倉庫に一筋の光が差し込んだ。

「予想の斜め上をいつてるな」突如、倉庫の扉が開き、底抜けに楽しげな笑い声が響いた。

「お前ら、本当に最高に愉快な阿呆だ。私の目論見よりも全然良い結果だ」鬼姫は腹を抱えて笑つている。

麻美は時折、『神の島』と呼ばれる空飛ぶ大陸の話を草治に聞かせた。

「その土地は、かつて偉くて力のある神様が住んでいた土地なの。今では人間たちの手に渡っているけど。その土地は普通の人間には見えない美しい土地らしいわ。でもね、そこで暮らしている人間たちはとても汚い人ばかり。彼らは日々良好な『魔術師の遺伝子』を研究しているわ。彼らは地上でも様々な奇怪な現象を探すために、地上にたくさんの工作員を流しているの。だから、草治も気をつけるのでよ。彼ら『ヤオヨロズ』に見つからないように」

「おい、これはどういうことなんだ？」

険しい声音で草治は尋ねた。鬼姫は草治と天竜寺となら仲良くやれると言つておきながら事態はその間逆の結果を生んでいる。というよりも鬼姫の代わりに面倒なことに巻き込まれだしていることに気が付き始めていた。別段、鬼姫は草治に嫁を探してあげようという言葉を鵜呑みにしていたわけではないが、利用されるような形でそれを裏切られるのをさすがに傷つくというか腹が立つ。

「いやいや。別に草治を騙したわけじゃないぞ」

草治の険しい表情を見て鬼姫は笑うのを止め、真顔で答える。「波長だけならけつこう相性がいいんだよ。お前達は」鬼姫は嫌らしい笑みを浮かべた。

「こいつは誰なのよ

天竜寺は鬼姫を直踏みするような視線を向けている。

「初めてまして、新しき世の神の使い。私は古き世に守巣の山で懲伏された鬼の姫。そして守巣に祭られた神」

「何が神よ。ただ人間達から怖がられているだけの存在の癖に。アンタなんか魔人で十分よ」

天竜寺は瞳を細めた。

「とはいって、アンタが魔人狩りである私の標的のことね」

「そうなるわね」鬼姫は頷いた。

「でも、貴方じや無理」

「そんなの、やってみないと分からぬわ！」

ヒステリックにも聞える天竜寺の声に会話に参加していない草治が驚いてしまう。しかし鬼姫は意にも介さず、右手を持ち上げて細長い銀色のカギを取り出した。すると天竜寺の顔色が変わる。

「ちょっと、それって私の手錠のカギじやない。返しなさいよ。この泥棒」

「泥棒とは心外だな。私はこの土地の神様だから、この土地にある物は全部私の物。それが私がこの土地で大人しくしている替わりに決められた条件」

澄ました顔で嘘か真か飛んでもないことを言つ。

「そんなこと知らないわよ。いいから、それを返しなさいよ。じゃないとこの手錠が外せないのよ」

天竜寺からの話を聞いて草治も自分に掛けられた手錠を眺める。いつまでもこんなものをしているわけにはいかない。第一動きにいく。

「とりあえずその鍵は返しつくれ。俺も困る」

草治も願いであるが鬼姫はゆっくりと首を振る。

「残念ながらこれを返すわけにはいかない」

「おい、調子に乗るなよ。クソガキ。お前の角引っこ抜かれてえか」「そ、そりよ。早く返しなさいよ」

草治は我慢出来ずにドスの効いた調子で、天竜寺は草治の声に驚いたのか少し勢いが引いた調子で文句を言う。それを聞いて困ったよ

うに鬼姫は呟いた。

「この鍵を返せば、私はそここのヒステリック女に狙われてしまう」

「誰がヒステリック女よ」

「それが何だ。俺は一向に構わない」

「うわ、私の神主兼下僕の癖に最低なことを言うのな」

「言つておくが下僕になつたつもりはないぞ」

まあそれは置いといて、と言つて鬼姫が咳払いをする。

「私としてはこの土地で神様を続けたいと思っているの」

「そんなこと言われても、私はアンタを『ヤオヨロズ』の本部に連れて行つて報酬貰いたいんだけど」「ああ、新しい導き手がこんなに貪欲な奴で、世界も可哀そう」

そう言つて鬼姫はよよよと泣きまねをする。

「そんなこと言つてもね、私の他にも大勢魔人狩りはいるのよ。どうせいつか誰かに捕まるんだから今のうちに私に捕まっちゃいなさいよ」

「それは大丈夫。私には考えがある」

得意顔で不敵な笑みを見せた。そして天竜寺に真剣な表情を向けた。

「私は貴方と取引がしたい。それに応じてくれれば、この鍵を返してもいい」

「取引？」

「そう、私にとつても貴方にとっても利になる取引」鬼姫は言つ。

「へえどんな条件なのかしら」

「貴方には私の存在を新しい者達から情報を隠すために動いてほしい」

「はあ。そんなの私に利が無いじゃない。それなら私はアンタを捕まえたほうがいいわ」

しかめつ面で天竜寺は言ったが、鬼姫は頭を振る。

「その替わり、私が貴方に私以外の、異形を捕まえる手伝いをする」鬼姫は少し黙り込んだ。草治には何が何だか分からぬが、要は天竜寺にスペイになれと言つてているように聞えた。彼にとつてはとにかく

かく早く手錠を外してほしかつたため、特に横やりを入れずに静観を決め込んでいる。

「貴方のチカラはさつき見せてもらつた。とても小さな雷を応用して身体のチカラを高めた技術は見事だった。でも、私達異常な存在はそこらの人よりも強い程度じゃ敵わないのは、貴方も分かつていいはず。つまり、貴方のチカラじゃ一匹も捕まえることは出来ない。でも私が協力すれば、あるいは」

そこで言葉を止めて、天竜寺を伺う。撫然とした表情を消し彼女は口元を吊り上げた。

「それは、面白そうね」

「それでは取引成立ということで」

二人は顔を見合わせて狡猾な笑みを浮かべる。

日が沈み込んだ夕刻、二人は街並みを草治と鬼姫は歩いている。来週の花火大会のためか道に沿つて提灯が飾られている。所々に巨大な提灯も飾つてある。

「結局、お前は何がしたいんだ？」

錠が外れた手首を回しながら、草治は聞く。

「それは、決まっている。草治のお嫁さんの候補探しを」

「嘘つけ。要是お前を狙つている天竜寺を出し抜きたかつたんだろ」  
げんなりとした調子で言った。今日一日散々振りまわさてもはや怒るのも面倒だつた。鬼姫は角を隠すためか帽子を被つている。

「正直なところ、私も困つている。草治にとり憑いているあのチビが威嚇してくるから草治の嫁を探すのは難しい。ということで、まずは私達の敵の『ヤオヨロズ』をどうにかする方向にしたわけ」  
鬼姫の表情に起伏はなく、本心がどうか分からなかつた。

「よく分からぬが天竜寺と仲良くするのは難しいと思うぞ」  
氣位の高そうな彼女の表情を思い出す。

「そうでもないと思うの。私は確信しているの。私を信じるの」

薄い胸を張り、自己主張するが草治はうんざりして口を開いた。

「どうかの誰かさんを信じて俺は今日酷い目に遭つたけどな」

「失敗は誰でもあることなの。気にしてはいけない。下手な鉄砲も数撃てば当たる。草治は私の言つことを聞いていればいいの」

「人」とだと思って随分と無茶なこと言つた

「ぶつちやけ、草治がどうなると私には構わないの」

「お前なあ」

と疲れたように鬼姫を見ると、彼女は以外にも真剣な表情で草治を見ていた。

「正直な話、私にとつて草治が不幸になるうが幸せになるうが心の底からどうでもいいと思える心のつくりを持っている。でも、貴方がいつまでも私の神主でいると本当に困るのは事実。それは貴方も私も同じ。だから、明日から必死にアプローチしていくことを勧めるわ」

「アプローチって天竜寺のことか。俺の彼女作りは終わつたのだろう」手錠を外す時、鬼姫は異形の居場所を教えるから神社に来ることを伝えていたのを思い出した。

「いずれにしろ、草治はもつと人と接するべき。そうしないといつまでたつても結婚できない」

高校生で結婚のことを言われてもなあと草治は思つた。社交性が無いのは事実だ。

まばらではあるが屋台も並び、心なしか人通りも多いように草治には思えた。

「天竜寺のグループにお前は狙われてるんだろう?下手したら、仲間にお前のことを報告してるんじゃないのか?」

「それはない。彼女達の組織は、基本的に個人プレー。最初に異形を捕まえた者に報酬が渡されるの。だから誰もが、他人を出し抜くことに必死なの」

へえと草治は簡単に相槌を打つ。

帰つたらすぐに寝ようとぼんやりと思つた。

今日も夢を観た。草治は真赤な桜が散る樹の下で腰を下ろしている。この日も少女は桜に塗れながら踊っている。

「ねえ、大変なことになつたりしましたよね。変人達に振りまわされて大変ですよね？」

はしゃいだ様子で少女は聞いてくる。

「もつと大変なことにして見せますからつて本当は言いたいのですけど残念なことに、あの無粋な鬼が私の邪魔をするんです。おかげで最近の私は直接的に貴方を使って遊ぶことが出来なくなつてているんです」

少しだけ悲しそうな声を出した。それも僅かのことですぐに元気な声が届いた。

「でも、安心して下さいね。私、頑張りますから。頑張つて貴方に繋がる赤い糸も貴方を結ぶ縁も全部ちょん切つてから、貴方に関わる全てのモノの運命を歪めて纏れさせて不幸のどん底に落として見せますから」

幼き少女は健氣さも感じさせながら言いきつた。そんなこと頼んでないというか止めてくれ、と草治はため息混じりに言おうとしたが声が出なかつた。そして彼の腹に重たい何かが降つてきたような錯覚を覚え、周囲の景色が霞む。意識が遠のき、

「いい加減、起きなさいよ」

不機嫌な声を聞いて草治は眼を覚ました。瞼を擦り、見上げると知つている顔があつた。

「天竜、寺？」

眼の前で顔を顰める少女を見て草治は咳く。

「ほり、早く着替えて用意しなさいよ」

良く見ると腹を踏まれている。困惑している草治を見て天竜寺はすぐ足をどかし、睨むような感じで草治を見下ろす。

「ここの子から聞いてるでしょ？今日は異形を捕まえに行くつて」

天竜寺は横に視線を向ける。そこには鬼姫がこちらも寝むそうな顔

でうつらうつらとしている。

「俺も行くのか？」

「人では多いほうがいいってこの子が言つてたのよ。早くしてよね」  
そう言い残し、天竜寺は部屋から出でていった。枕元にあつた携帯を確認すると朝の4時前。いくらなんでも早すぎだろと草治は呆れた。鬼姫を見る立ちながら眼を閉じている。草治は起きあがり、鬼姫の角を引っ張つた。

「？」鬼姫がビクリと身体を震わせた。

「何で、俺までお前達の手伝いしなけりやならんのだ」

「それは昨日言ったはず。共同作業はお互いの心を近づける凄いチヤンスなの。あと、角を掴むのは反則」

鬼姫は草治の腕を引っ搔きだした。さすがは鬼と言つべきかなかなかのキレ味である。草治は手を引っ込めた。

「まあ、今日は学校がないからな。少しぐらになら手伝つてやらんでもない」

草治は髪を弄りながらつまらなそつに言つた。とはいえ、草治としては悪い気はしなかつた。鬼姫が主張するアプローチはともかく、考えてみれば学校でも周りから怖がられ、グループ活動なんてまともに出来たことはないためちょっとだけ心が弾んでいる。

「まったく素直じやない男」

可哀そうなものを見るような視線を送りながら鬼姫は言つた。

「別に、嬉しくなんかないぞ」

「はいはい」

「それよりも、今日は変な夢というかとり憑かれてる女の子の夢を見たんだけどあまりこいつ、疲れた感じがしないんだよね」  
と、草治は肩に掛る髪を撫でながら強引に話題を変えた。すると鬼姫もからかうような雰囲気を消し瞳を細めた。

「草治に寄生しているチビはいつもお前から生氣を奪つているの。今は私が牽制してるから草治も心なしか良い感じになつてるわ。でも、これも長くは続かない。だから、」そこで鬼姫は言葉を区切つ

「早く子供を作れ」  
た。

早朝、と言つこともあるが何より山の中で人は誰もいない。樹の根っこが地面に張つて出ていて足場が悪いことこの上ないが、草治は赤井神社の裏山を歩いていた。標高が高い山というわけでもないのだが、霧が立ち込め視界が悪い。

彼の横では天竜寺妃も撫然とした表情で歩いている。一人とも息が荒く、草治に至つてはぐつたりとした表情で歩いている。

鬼姫曰く、この裏山の井戸の前に参拝に来る猫が異形のものだと言い張つた。それを聞いて天竜寺と一人で井戸の近くで張り込み、しばらくして猫がやってきたのだ。

二人がかりでそれを捕まえようとしたが予想以上に素早く裏山に逃げ込んだのを搜索している。

「小さい時から爺ちゃんとの裏山に上つてはきのこ取つたり遊んだりしてたわけよ。だからけつこう方向感覚もいい方だと思うんだが」

「そう、それならここのどこか分かるのね」

「いや、それが全く分からん。どっちに赤井神社があるのかすら」「使えないわね」

天竜寺はそう言つて山を見渡す。草治も同じようにするが、どこを見ても木々が生い茂つている。空もいつの間にか曇りがちな天気になり太陽を指針にすることも出来ない。

「これは、所謂化かされたってやつなのかしら」

天竜寺が汗を拭う。

「狸や狐じやなくて猫に化かされたとでも?」

「魔物に関われば何があつても可笑しくないのよ」

諭すように天竜寺が言うが、その顔には余裕がない。彼女の能力は昨日聞いたのだが、今のような状況では役に立つとは思えない。こまま山の中で餓死したら嫌だなあと草治が考えていると、「いた

！」天竜寺が大声で言い、走り出した。慌てて草治も天竜寺の後を追う。霧の奥にどこにでもいそうな茶色の毛の色の猫が走っているのが見えた。

「お前、昨日みたいな感じでアレ捕まえろよ。何か身体能力高めるとか言つてただろお」

隣に向かつて怒鳴り声を上げる。彼の横では天竜寺もさすがに息を切らしている。

「私のチカラは短時間しか使えないのよ。それに、あの猫完全に遊んでるわよ。ほら、今もこっち見た。何かあの猫笑つてない？」天竜寺が怒鳴るが、草治の視力はそこまでいい方ではないので猫が笑つているかあ分からなかつたが、確かに口元を吊り上げているような気はした。やはり遊ばれていいる。そう思つとこつして息を切らせて走るのが馬鹿らしくなつてきた。

霧の中に猫が消える。二人とも走るのを止めた。草治はぜえぜえとその場に膝をついた。かれこれ一時間は今のように猫に遊ばれているのだ。正直なところ嫌になる。頼みの綱の魔術師とやらの天竜寺はチカラを使う気が無いいらしく今まで石を投げたりと普通の策を実行している。

どうしても届かない目標というのを眼の前にすると人間誰しも諦めたくなるものだが、霧が濃い所為で諦めるにも帰り方が分からない。おそらくあの猫を捕まえるまでここから出られないのだろうと思ふと泣きたくなるほどだ。

そんな状況でも天竜寺の瞳に諦めはなかつた。思案するように黙り込んでいる。感心するような呆れるような視線を向ける。するとその視線に天竜寺が気が付き、草治を睨んできた。

「相変わらず、地上の人間はダメね。これだけの運動でへばるなんて」

侮蔑するようなことを言つた。これでこそ天竜寺妃、性格の悪さは学園一位の噂は伊達ではない。とはいゝ、今の天竜寺の発言は草治には違和感があつた。呼吸も整つてきたこともあり草治は聞いた。

「地上の人間つて、お前はどこに住んでるんだよ」

「へンテコな島の上よ」

鼻を鳴らしてそっぽを向く。猫を摑める算段が付かづ相当機嫌が悪い様子だ。

「ところで、『ヤオヨロズ』ってどういう組織なんだ」

草治は特に返答を期待したわけではないが、以外にも天竜寺は話してくれた。

「『魔術師の遺伝子』って知ってる？」

「ああ、知ってるよ。確か昔の学者さんが不思議な形質を生みだす遺伝子を見つけたって一時期世界中が盛り上がった話だろ。でも、デマだつたって聞いたけど」

「そうよ。公にはその説はデマダッタつことになったわ。そういうことにしたの『ヤオヨロズ』が。第六感に関するチカラを人間達に知らしめることは神が決めた最大の禁忌。当時は『ヤオヨロズ』なんて呼称はなくて一体の魔人が人間達から奇跡を遠ざける仕事をしていただけだつたらしいわ。長い年月をいつまでもずっと一人で奇跡を管理し続けたその魔人は疲れを感じていたと言うわ。だから魔人は科学的に奇跡が解き明かされたことを知り人間達に己の職務を引き継がせることを告げた。魔人は研究者達に住んでいた奇跡に包まれた島も船も与えて眠りに付いた。それを引き継いだ人間達が私達『ヤオヨロズ』」

ここで天竜寺は話を止めた。

「へえ。でも何でお前達は魔人を捕まえようとしているんだ？」

「そんなの、魔人がいなければ奇跡も広まらなくなるでしょ？」

そんなことも分からないの？と天竜寺が言う。

「いやいや、それだと魔人が可哀そだろ？」

強引な話に草治が驚いて声を上げる。

「可哀そつて偽善じや、世界は回らないの。それに島に連れてつた魔人にはかなりの好待遇が約束されてるらしいわ」

「いや、それなら話合えば、」

と、草治を遮るよつに電子音が鳴る。天竜寺は携帯が鳴っていることに気が付き、携帯をポケットから出した。携帯を開くと、草治のほうにそれを寄こしてきた。着信登録は「根暗」となつている。

「そつちの様子はどう?」

通話ボタンを押すと鬼姫のか細い声が聞えた。携帯を持つていない鬼姫は今草治の携帯を持っている。つまり根暗は草治のことのようだ。

「全然、ダメ。俺達じゃ、あの猫捕まえられない」

とりあえず登録のことは置いといて現状を報告する。

「そう。それじゃああの女はどんな感じ?」

「天竜寺か?かなり不機嫌みたいだぞ」

「折角一人つきりにしたのに進展もなし、草治は男の風上にも置いておけないな」

携帯の向こうでわざとらしくため息を吐く。

「おい、そんなことはいいから俺達はこれからどうすればいいだけを言え」

身体中が重いこともあり、いつもよりも短気になつていて草治は脅すような低い声を出す。しかし携帯の向こうでは怯えた様子はない。

「今回の男女二人つきりのハイキング大作戦はどうやら効果がないことが判明した。よつて私も少し手伝うことにするよ」そう言って携帯が切られた。

「あの鬼つ子、何か言つてた?」少し期待を込めた様子で天竜寺が聞いていた。

「何か私も手伝うとか言つてだぞ」

そう言って携帯を返す。それから立ちあがつた。少し休んだだけで未だに身体は重かったが。

「ねえ、あれ何かしら」

天竜寺が草治の後を指差した。つられるように草治も振り向くと極少数だが蛍のような金色の小さな光が飛んでいた。少し前に草治は

それを視たことがあつた。（鬼姫の光だな）

霧の奥からいくつもいくつも虫が現れる。光は草治達の周りを踊るようにならばる。そして光は霧と混ざり合っていく。最後には光も霧も無散していき、燐々とした太陽の光が注ぎ出した。

茫然と立っている草治の視線の先で、消えていく霧の中から猫の姿が浮き上がる。猫は金色の光に囲まれていたが、勇敢にも毛を逆立てて威嚇している。

草治の近くで、バチリと静電気が弾ける音がした。草治が首を動かすと横で天竜寺が凄惨な笑みを見せた。その瞬間、天竜寺妃は青い微弱な輝きを残してこちらに気が付かない猫にむかって駆けだした。足場の悪い地面をものともせず瞬く間に一〇メートルはあろう距離を天竜寺は縮める。天竜寺の跳躍は地面を滑るように滑らかで思わず草治は見とれてしまう。猫と天竜寺との距離がなくなり、天竜寺は右手を猫に叩きつける。

「ぐへえ」と猫からおっさんのような声が吐きだされたが、それに動搖することなく天竜寺はどこかで見たことがある黒い手錠を猫の首に掛けた。

それを見て草治も天竜寺の元に向かう。ようやく終わつたのかと、意味もなくじつこいしょと言つて進む。霧が晴れ、何だかんだで遠くに守禿神社の本殿も見えた。そこまで遠くに行つてないことが分かり草治は安心した。

「女の子が隣に居たのだからもつと根性を見せるべきだつたと思う」後ろから草治と同じくらいの少女がため息を吐いてきた。鬼姫がかめつ面で睨んでくる。

「実は近くで待機してた」

聞いてもないのにそんなことを言つ。偉いでしょと鬼姫は胸を張る。

「そんなことよりも駄けっこは、得意じゃないから疲れたな。いい運動にはなつたけど」

「私が手を貸してあげたと言うのに、随分な態度ね。ムカつく」

鬼姫が草治の背中にのしかかつてきただ。草治はよろめきながらも鬼

姫を引き離そうとする。

天竜寺のどこまで「行くこには鬼姫を引き離す」とに草治は成功する。天竜寺も捕えた猫を引きずりながら草治達に向かつてきた。

今までにないくらい頬を上氣させ、純粹に嬉しそうな笑みを天竜寺は湛えている。

「ねえ、ほら見て、この猫、実は狸だった」

天竜寺は散歩で言つこと聞かない犬を無理やり引っ張る如き勢いで鎖を引く。鎖の先で仰向けに寝転がつた狸が胡乱気な瞳をこちらに向けてから口を開いた。

「おいおい、これは何の冗談ですかい鬼姫様」「

可愛らしい外見とは裏腹に渋い声が狸から発せられた。狸は後ろ脚で立ち上がる。前足を胸の前で組み説教するように草治達を見上げる。

「お前達もさあ、俺様が誰か分かつてゐるわけ? 調子乗るなよガキども。早くこの手錠取れ馬鹿」

偉そうな態度の狸を草治達は見下ろす。不細工な狸だなあという感想を草治は抱くが、鬼姫は何を思つてか狸の頭を撫で出した。

「久しぶり、奈菜霧」とやさしい声音で言つた。奈菜霧と呼ばれた狸は改まつた調子で頭を下げる。「ええ、お久しぶりです鬼姫様。鬼姫様が眠りに着いてからもほぼ毎日、健気に赤井神社に参拝していた奈菜霧です。それよりも、この錠を外して下さいよ。これの所為で気分が悪いのです」

礼儀正しい紳士のように笑み、毛深い前足で首に掛けた錠をポンポンと叩く。しかし鬼姫は悲しそうな表情を浮かべて首を振る。

「それは出来ない相談ね」

「な、何故ですか。この人間達はおそらく最近私達神を誘拐している不遜な者達ですよ。このままでは私もこいつらに連れ去られて何をされるか分かつたものじゃありません」

奈菜霧は天竜寺を憎らしげに指差した。鬼姫は優しげな眼差しで奈菜霧を見つめる。

「私も身が裂けるほど辛いけど辛い。でも、私の替わりに貴方が新しい管理者の元に引き渡すことで、私の身の安全が保障される。だから私のために大人しく拘まつてほしいの。一生の頼みを言わせてもらう」

かなり無関係の草治が聞いても自分本位なことを鬼姫は言った。それを聞いて狸も怒った。

「自身の保身のために神としての誇りを捨てるのですか」

強い口調で奈菜霧が言う。鬼姫は狸の頭を撫でるのを止め替わりに頭を鷺頭かみしてギリギリと力を込める。その瞳が紅く染まるのを見草治は見た。

「折角私が下出に出てるのにいい度胸だな。このまま中身の少ない頭を握り潰したい気分」

「あ、あの鬼姫様、調子に乗ってすいません。それと痛いです」

「ぶっちゃけ赤井の神社を復興して再び神としてこの土地に居られるなら神としての誇りなんてどうでもいいの。そんでもってお前のような狸もどきがどうなろうと、私には関係ないこと」

つこたつきまで身が裂けるほど辛いとか言っていた奴の身代わりの早さに草治は舌を巻く。よほど怖いのか狸は硬直しながら鬼姫を見る。

「それと、これだけは覚えてほしい。もしも私のことを誰かにバラシタラお前がどこに居ようと必ず喰いに行く。私は人間も喰うけど狸もけつこう喰つたほうだ」

もはや狸は涙目になりながら何度も頷いている。鬼姫は狸を離す。すると天竜寺も満足げに狸を引きずり出した。

「そういうことで、こいつ連れてくわね」そういって天竜寺は山を降り出した。草治も何だか氣のどくのなつてきた。

「あの狸、お前のとこに毎日参拝してたとか言つてたし。俺も何回か見たことがあるぞ」

「別に狸が一匹来なくなつてもこの神社は困らない」

「そうじゃなくて、あの狸が可哀そうと言いたいのだが」

「そうでもない。アレはずっと人間達から隠れてために一人で暮らしてた。それよりも向こうで気楽に暮らすほうがきっとアレにとてもいいはずな。絶対、そうだ。それにここに居てはアレの縁はずつと繋がらない」

鬼姫は言い聞かせる様に言つた。ここで草治は天竜寺が捕まえたモノは好待遇で接待しているという話を思い出した。

「よく分からんが、一応はあの狸のことも考えてたんだな」

「失礼なことを言わぬいでほしい。基本的に私は草治以外に対しては神として幸せになつてほしいと願つているのだよ」

「何で俺以外何だよ。そんなに俺のこと嫌いか?」

「別に嫌いとかじやないの。単にどうでもいいだけ」

それだけ言つて鬼姫も山を下りていく。「よく分からんな」残された草治は呟いた。

狸の奈菜霧を捕まえてから、数日が経つた。それから毎日天竜寺は赤井神社に顔を出すようになった。草治はまた変なものを探すのを手伝わされるのかと思ったが、そうではないらしい。神社に来ては鬼姫と、今度はどこに異形が居るのかと聞いては勝手にどこかに行つては帰つてくる。そして今までの収穫はゼロ、らしい。見つけてもすぐに逃げられてしまつていいようだ。そして鬼姫も面倒なのか奈菜霧以降手伝うことをしていない。草治にとつてここ数日の忙しさが嘘のようにのんびりとした日々を送つている。

幸い、補習期間も終わり祖父も出かけている。特にすることもなく草治は今日もじろじろと床に寝転がる。

「たまには外に出たほうがいいと思うぞ。まさにダメ人間だな」鬼姫が草治のポータブルゲームを動かしながら言つた。

「俺はダメ人間じやないぞ。学生として必要な勉学は毎日きちんとこなしている。ただ昼間はどうしても動く元気が出ないだけ。俺つて夜型だから」

「そうじゃなくて外に出て身体を動かせと言つてているのだが」

「それも大丈夫。少しは鍛えてるから」

基本的に草治は祖父との稽古以外で動くことはない。その替わり祖父が居れば修行だと言つて裏山に登つて色々やらされたりする。

「どうか、お前なんて勉強もしないで一日中家でじろじろしているだけだろ」

「私はこう見えて忙しいのだよ。頑張つて草治とあの女の距離を縮める作戦を考えている途中なの。でも中々良い案が浮かばないから最近の人間の嗜好を深く理解するためにこうして恋愛ゲームをしているの」

「言っておくがそのゲームかなり古い奴だぞ。それこそ爺ちゃんの若い時に出たぐらいだぞ」

人の思考に関しては詳しい神様も現代機器には疎いらしく、呆けた顔をした。

玄関のドアが勝手に開けられ家の中にズカズカと入ってくる足音が聞えてきた。居間のドアが開かれ、天竜寺が入ってきた。

「今日も一匹見つけたわ」

弾んだ声を天竜寺が出した。学校では見せたことがないであろう、笑みを湛えて草治は不思議な気持ちになつた。学校では成績も毎回トップで体育の授業だろうが音楽の授業だろうが誰よりも頭一つ分抜き出た結果を出しても特に喜ばず周りを馬鹿にしたことしか言わないことを草治は聞いていた。それが今は子どものような邪気のない笑みを浮かべている。学校での賞賛などよりも彼女にとつて異形を捕まえることが大切であるよつだつた。

「ねえ、聞いてよ。この子の言つた通り千曲橋のとこ地蔵に手錠掛けようとしたら狸になつたわ。しかもその狸つてば私に捕まつた後に離してくれつて泣いて謝るのよ。本当に面白かったわ。逃げられたけど」

天竜寺が草治の横に座り話しかけてきた。その様子は子どもがか弱い動物を苛めて遊んだ出来事を報告するようでもある。今日捕まつた狸が可哀そうな氣もするが、鬼姫曰く捕まつたほうが幸せとのことなので黙つておく。天竜寺の学園とは全く違うこのノリにももう慣れた。それよりも草治は気になつたことがあり鬼姫に向けて聞いてみた。

「また、狸か。ここにはそんなに狸が多いのか」

「確かにどこでも狐や狸の異形が化けているのは多いね。でも他にもいろんな異形がいるよ」

「ふーん。以外にも妖怪だらけだな」

「昔から八百万の神と言つ。つまりいくらでも異形はいるの。でも大抵は化けていたり、眠つたり、見えなかつたりで人間達が気がつくことはまずないので。ちなみに化けるチカラのある狸や狐はとても弱い部類の異形」

それを聞いて草治は不思議な感慨を受けた。

「そう言えば、天竜寺は狸一匹でどのくらいの報酬を貰えるんだ？」

「そうねえ。こっちで考えれば家が三件は建てられるくらいかしら」予想以上の値段だ、と草治は呆れる。高校生の草治はよく知らないが今の御時世家を建てるには土地が非常に少ないためどんどん家を建てるための費用が上がっていると聞いている。少なくとも高校生が持つべき額ではない。

「そうだ、今日はせっかくだし貴方達に何か奢つてあげるわよ」天竜寺が言った途端、鬼姫が食いついた。

「はい。焼き肉が食べたい」

鬼姫は本当に良く食べる。少なくとも草治の三倍は食べるのだ。おかげで赤井家の財政に悪雲が掛つてきている。

「赤井もそれでいい？」

草治がうらみがましい眼で鬼姫を見ていると天竜寺が聞いてきた。特に断る理由もない。というよりも、凄く行きたい。しかしながら今はもう夜遅い。

「お前のほうはいいのか？もう、夜の九時だけど、一応は天竜寺財閥の娘なんだろ？門限とか無いのか？」

何となく聞いてみた。すると天竜寺は笑みを消した。

「別に、その設定はカモフラージュよ。一応、娘ってことになつてゐるだけ。現に私は一人暮らしよ」少し不機嫌な声だつた。草治はもう少し聞いてみたくなつたが他人の家庭事情に首を突つ込むのは良くないと考え直した。

「それで行くの？行かないの？」

「いや、別にどっちでも」

「そう、それならすぐに支度して」

天竜寺財団総帥には七人の子どもがいる。そのうちの七人全員が

『ヤオヨロズ』と呼ばれる組織で遺伝子教育を受けた者達であり、「魔術師の遺伝子」を所有している。彼らに血の繋がりはない。一応は養子ということになつていて、ところがその全員天竜寺財団総帥の天竜寺明久を父親と見ている者はいない。何故なら彼らの本當の姿は天竜寺明久をリーダーとした「魔物狩り」の構成員だからである。むしろ彼らはお互いを同じ職場の人間と見なし、仲良しこよしを装いながらも互いを出し抜くことを計つている。

そしてその一人で天竜寺家次男、天竜寺円治は天竜寺家の内も外も城のような自宅の食堂で表向き妹とそれでいて天竜寺渕莉と食事を取つていた。

円治は短めの金色の髪を逆立て紺色のスーツでワイシャツを胸元ではだけて着崩している姿はどこぞのホストのようでもある。一方、妹である渕莉は長い赤い髪に白色のドレスを着て気品に満ちている。ワインに口を付けてから渕莉が口を開いた。

「聞きました？ 妃が昨日も魔物を捕まえたらしいですよ」

「ああ。聞いたよ。何でも化ける狸らしいじゃないか。随分と下らないモノを捕まえたものだね」

「ええ。無能なあの子にはお似合いじゃないですか」

クスクスと渕莉は上品に笑う。

「でも妙だねえ。一匹も魔物を捕まえられなかつた妃が突然魔物を捕まえ出すなんて。しかもその狸達は僕達の検査リストに載つてなかつたそりやないか」

「ええ。そうです。ですから私も気になつて調べてみました。そしたら面白いことが分かりました」そう言ってから焦らすように再びワインに口を付ける。その様子を円治は微笑みながらも隙のない目付きで伺う。

「何が分かつたんだい？」

円治が尋ねると渕莉はグラスをそつと置く。とも純真そうな笑みを浮かべる。しかし円治はこの女が兄弟の中で一番意地汚いと思っている。

「妃つたら近頃、赤井神社に通っているらしいの」

「赤井神社というと、曰くつき付きの場所だったね。確かに、その神社の跡取りの赤井草治とか言う子どもが僕達のリストに載っていたよね。何でも彼の近くだとポルターガイストが起るとか」「ええ、そうです。でも調査によると赤井草治は白。少なくとも魔術的要因はないとのことです。しかしながら近頃身元不明の変わった少女が赤井神社にいるらしいですよ」

「ふむ、なるほど気になるね」

円治が下唇を舌で軽く舐め、蛇の如く瞳を細めた。

「分かった僕が調べてくるよ。もしかしたら妃は僕たち兄弟に黙つてずるをしているかもしれないからね」

そつ言つて円治が立ち上がる。とも、優しい笑みを浮かべて。

## 天竜寺家の兄妹

「花火大会に行きましょ、うよ」

天竜寺妃は赤井神社に来るなりそんなことを言つた。心なしか今日もなかなか機嫌が良いように思える。

「おお、それは面白そうなイベントね。ぜひ行つてみたいな」

鬼姫もゲームから眼を離し、賛成する。

「赤井は？」

草治はいつかの焼き肉屋の時も同じような流れだったのを思い出した。

「別にいいぞ」前髪を弄りながら答える。正直なところ凄く行きたいのだ。

「そう言えば、押し入れに浴衣があった」

鬼姫はそう言って居間から出ていった。

「へえ浴衣もいいわねえ。私もどつかで買おつかしら」

そんなことを呟くのを聞いて金持ちは違つと感心する。

「赤井は何か着ないの？」

「ああ、着ないな」

同世代の女の子に面と向かつて普通に接する機会がほとんどなかつたため片言で返事をしてしまう。いつだかの様に緊迫した状況や頭に血が上つた状態ならもつと舌が回るのに、と思いながら妃との沈黙を息苦しく思った。いつもなら鬼姫が助け舟を出してくれるのだと、カラーーンという呼び鈴の音が響いた。

「！」のぼる神社に人が尋ねてくるのは珍しいな

草治は雑多な物で埋まつた場所を歩く。

玄関にある黒ぶちの時計は午前9時を差している。花火大会が始まるのは午後の5時からでありそれまでどのように時間を潰そつかとチラリと考えた。

聞きたいや、やらなくてはいけないことがあるならばともく、

意味もなく他者である妃と一緒にいるのは草治にとっては間が持たない。今も客が来たことでほつとしている自分に気が付く。こんなじやダメだなあと思うのだが致し方ない。

がちやり、草治がノブに触る前に勝手に回った。扉が開き一人の青年が現れた。金髪で長身のその男は柔らかい笑みを向けてきた。

「突然訪れて失礼。僕は天竜寺円治。実は妹がここに居るって聞いてね」

草治とは違う通りの良い優しそうな声で名乗った。天竜寺の妹と言つたその男は色白で一見本当に似ているところがない。しかし遺伝子教育によつて髪の色も肌の色も変えらる今日に於いてそのような家庭もなくはないのは確かであるが。

「ええと、妃さんですか。すぐに呼んできます」

「いや、それはどうでもいいんだ。今日は君に少し聞きたいことがあるんだよ。赤井君」

天竜寺を呼ぼうとした草治を円治は制した。怪訝な顔をする草治に微笑みながら続ける。

「あの妃と仲良くなる男の子つてのがどんな風なのが気になつてね。何でも頻繁に君の家を訪れているらしいじゃないか」

「いや、あの」

草治は首をぶんぶんと振つた。つまるところ妹に悪い虫が付いていないか確認しに来たのだろう。そう考えるとあまり良い気分はしない。

赤井草治はぼろ神社の家系にして祖父の大学教授としての安月給で凌いでいるここのが根暗息子。一方で天竜寺妃は日本でも屈指の天竜寺財団のお嬢様である。普通に考えれば友達としても釣り合つわけがない。そんな男のところに妹が通つていると知つてどのようを感じるかは想像に難くない。

別段草治自身はやましいことを考えているわけではないが、鬼姫は草治と妃をくつ付けたいとか言つてるわけで。（よくよく考えれば、家柄的にも無理だろ）

「少しだけ君のことを調べたんだ。君は祖父と一緒に暮らしのようだね。でも先週から祖父は出張で出かけている。つまり妃がここに来れば一人つきりなわけだ」

予想道理というか、円治は詰め寄るようにいつに言つ。表情も僅かに険しくなつたのを草治は感じた。

「いえ、あの、別に変なことをしているわけじゃないです。ただ、その、成績優秀な天竜寺さんに勉強、そう勉強を教えてもらおうと思つたんです」

「一人つきりで勉強会ねえ」慌てて言つた草治を見て円治は笑顔を消す。

円治の様子を見てどうやら鬼姫のことは内緒なのだろうとこうことを探し、彼女のことを探けるための言い訳を考えようとしたがなかなか上手くいかない。鬼姫からはとにかく彼女の存在を黙つていることを命じられている。

表情の変化に乏しい草治の顔も引きつる。すると円治が悪戯つ子を思わせる笑みを浮かべる。

「はは。冗談だよ。別に君と妃との関係を疑つてはいるわけじゃないよ」怖かつたかい?と楽しそうに笑う円治を見て、草治もほつと息を吐く。

円治はそんな草治を優しげな瞳で観察しながらその口を開く。

「いやいや、正直なところ心配してたんだよ。妃は今まで自分から誰かと関わつて行くことがなかったから。それにしても、君のような暗い子が妃と仲良くなるなんて以外だなあ」

「まあ、そうですね」

相槌を打つ。実際のところは妃とそこまで仲良くはない、とは言えない。しかしながら、妃の兄から見ても草治と妃のペアは以外らしい。やつぱり鬼姫の眼は節穴じゃないのかと疑いたくなる。

「少し興味が出てきたから家の中に上がつていもいいかな」「は?別に構いませんけど」

草治が許可すると円治は床に上がり、草治の前に出て進みだした。

「おーい。妃」

あたかも自分の家の如く進む円治は大声で妃を呼ぶ。おいてかれな  
いように草治も歩き出すと、居間から妃が顔を出した。その時の表  
情は、草治が初めて見る彼女の顔だった。

「やあ、妃元氣かい？」

妃は何も言わず、ただ頭を下げて挨拶をした。さきほどまでは笑み  
を浮かべていた顔が明らかに、固まっている。顔を上げてからも妃  
は兄に目を合わせずにむしろ伏せるように下を見ている。そして何  
より、彼女の瞳から生気が抜けている。

草治が驚いていると、円治がこちらに振り向いてきた。

「赤井君、何か飲み物でも持つてきてくれるかな？喉が乾いてしま  
つて」

草治は頷き、台所の冷蔵庫で冷やしてあつた茶を取り出し、持つて  
いくと兄妹は居間で対面式で向かい合っている。兄はとてもにこや  
かだが、妹の方は人形のような虚ろな視線を眼の前の卓袱台に向け  
ている。とてもじやないが、仲の良い兄妹には見えない。

ひとまず一人に茶を差し出し、自分は下がったほうがいいのかと空  
気を読んで下がるうとした。円治は草治は笑顔を向けてきた。

「驚いたかい？」

「は？」

何のことか分からずに呆けた声を出した。

「妃のことだよ」

円治に言われて草治は妃を見つめる。話題に出された妃は反応すら  
示さない。

「学園だと、妃はさも高飛車でクソ生意気な態度を取つていいんだ  
ろ？でも、僕達家族の前になると人形のように寡黙になっちゃうん  
だよ。どうしてか分かるかい？」

「家での礼儀作法とかが厳しいんですか？」

聞かれた草治は思いついたことを言った。中流家庭の金持ちに対す  
る偏見かもしれないが。円治は苦笑する。

「ウチだと、礼儀作法とかは合つてないようなものさ。大事なことはね、」円治は口元を歪めた。そして妃を指差して言つ。

「コレが欠陥品のクズだからなんですよ」

そう言つてから先ほどまでの笑顔が嘘のように円治の顔には残忍な笑みに変わつてゐる。嘲笑を受ける妃も普段の学校での顔とは同一人物とは思えないほど反応がない。

「はあ、それでどうしてまた欠陥品なんですか？妃さんは学園ではほぼ全てに於いてトップです」

草治は低い声にならないように氣を付ける。心の平安を愛する草治の本心としては、わざわざ草治の家に来て兄弟喧嘩をするその神経が信じられなかつた。

「それは普通の人間が出来ることが優れている程度ですね？それくらいのとは僕達にとつては当たり前なんですよ。なんせそこらへんは君達とは比較にならないほどの精密な遺伝子教育をされてますから。それじゃあ、僕達にとつてはダメなんですよ。僕達にとつて大切なのはどれだけの魔法が使えるかどうかなんです」

円治は諭すように言つ。妃の家族は魔法を使えることは聞いていたが、面と向かつて魔法という単語を使われると違和感がある。

「それなのに、コレの使える魔法は本当に矮小なもの。赤井君も聞いていると思いますけど静電気ですよ、静電気。そんなの普通の人間でも起こせますよ」

「しかし、魔法が使えるからつて別段、生活に支障が出るとは思えないんですけど。この時代に炎を出したりする魔法が使えても使いどころがありません」

草治はついつい反論してしまつたがそれが本心だつた。  
しかし円治は呆れたように鼻を鳴らして草治を見た。

「確かに、地上では魔法なんて使い道はありませんね。むしろ大勢に魔法を使つてているところを見られたら即殺されますね」

「それなら、妃がクズという等式は成り立たない」

「だからそれは地上の話です。僕達が生まれた島では魔法が全てで

す。魔法は科学なんて凌駕します。信じられますか？誰にも知覚されることなく空を進む船、島。正確には魔法を科学的な算段で活用しているわけですが。より評価の高い魔法を持つものは島から優遇される。もしくは魔法についての研究に貢献したものが優遇されます。まあ魔術研究に対する研究者には魔眼がないと大抵はなれませんがね」

想像を絶する話に草治は睡然として押し黙る。そこで話の論点を戻すこととした。

「それと妃の性格とどう関係があるんだ？」

「それは、簡単だよ。コレは魔法もだめ。魔眼ももつていなかから島では散々バカにされるしチカラでも敵わない。そうなると島の人間には絶対に逆らわないようにしようと決めたわけ。人形のように反応しなければ誰も面白がってからかうことも止めるからね。でも、地上の人間達は魔法ももっていない。それに遺伝子教育で人間としての機能を強めているわけじゃないからほとんどのことでコレは簡単に勝てちゃうわけ。そうなると人形だと言い聞かせながら我慢する必要はない。むしろ今度は今まで馬鹿にされた鬱憤を晴らすことが出来るわけ」醜いだろ？円治は楽しそうに言つた。

それを聞いてから改めて妃を見る。兄に馬鹿にされているというのに悲しそうな顔も苛立つような顔も見せない。

「さて、そろそろ本題に入るぞ、欠陥品」

茶番は終わりだとでも言つよう、遠慮のない声で今度は妃に話しかける。呼ばれた妃は顔を上げた。

「お前が見付けた化け狸についてなんだけど」

化け狸、つまり奈菜霧のことだろうと草治は当たりを付ける。

「いったい、どうやつて見付けたんだい？」

「たまたま、偶然です」

「いや、嘘はよくないな。あの狸はリストにものつてなかつた。それだけ隠れ上手な異形が君如きに見付けられるはずがない」  
そうして険しい表情を見せた。

「どんな手を使つたんだい？」

「いえ、本当に」

「本当に、ウザいよ。お前」

妃が言い切る前に、君の悪い笑みを円治は浮かべて言つた。突如円治が湯呑を投げつけた。パリンと割れる音が響き、妃の頭で湯呑が割れた。湯呑の茶が赤色を帯びてダラダラと流れ出す。痛々しい光景を見て草治すら寒気を覚える。

「おい、アンタ何するんだ」

すかさず草治は円治に掴みかかった。掛ろうとした。

「紅の蛇よ」草治が動く前に、にやけた顔の円治が唱える。円治の肌から赤い蟲を思わせる文字の羅列が浮きあがる。彼の掌から細長い炎が生じた。それを見て草治の動きが止まる。

「僕の遺伝子に刻まれた刻印は炎を作ることに特化しているんだよ。凄いだろ?」

あざ笑い。火に手を突つ込む。草治はそれを睨むように見ていた。「それが何? アンタさあ、馬鹿じやねえの。ちょっとした火の芸が出来るからなんだよ。クダらねえ」

草治は低い声で吐き捨て泰然とした態度を崩さない。というか足が竦んで動けない。それでも頭に血が上っている所為か口だけは動く。弱い犬ほどよく吠える、という言葉が草治の頭にチラつく。

草治の挑発を受けて円治は瞳を険しくした。右手を優雅に動かすと火は激しさを増し草治に襲いかかつた。火は蛇のように草治に取り巻いていく。

「つ」紅の蛇の寒氣を誘う田と合ひ、草治の足から力が抜けた。

「あらら、やっぱ君は外れか」

無様に地べたで固まる草治に円治のつまらなそうな声が届いた。

「このガキじゃないとすると、一体誰が君に入知恵したんだ」

閉じそうになる眼を見開くと円治が妃の髪を引っ張り問い合わせていた。妃の顔には変化はない。痛くないのかと草治は疑問をぽんやりと感じた。

「妃は電気信号を送り、脳に送られる痛みの刺激を抑制しているわけ。ザコはザコなりに工夫しているんだよ。本当に下らない工夫だけど」

円治がそう言って妃を放った。

一方、草治は息苦しさを感じ始めた。彼の周りを取り巻く炎が、周囲の酸素を奪っている。このままでは一酸化中毒になってしまふから立ち上がりつつとしても次第に彼の臉が閉じていく。

「それでは、神社に棲む少女とやらを探さねばならぬよ。おやすみなさい草治君」

最後に円治は玄関で会つた時と同じような柔らかい笑顔を作つた。

草治は夢を彷徨っていた。

草治の母である麻美の話はいつも難しかった。そして非現実的であった。

母の話を草治はいつも聞き流していた。だけど、そのいくつかは今でも草治の中に残っている。

「反射させればいいの。草治はただ反射させるだけでいいの」一度だけ、麻美は赤井神社の古臭い倉庫に連れて行って息子にそう言つた。倉庫には様々なものがある。

「私には出来なかつたけど、貴方なら出来ると思うわ。確かに、貴方の魔法への視力は本当に弱い。だけど、貴方には魔法に触れる力がほんの少しだけあるの。これは本当に凄いこと。だつて私にはその力が全くないから」

悲しそうな麻美の声が倉庫の中に満ちた。

麻美は埃かぶつていた一つの剣に手を伸ばす。

「この倉庫にあるものはきっと貴方を受け入れてくれる。いいえ、赤井の神社はきっと貴方を受け入れてくれるわ。だってこの神社は魔法で出来ているから」

ずっと昔に麻美は草治に言つた。だけど、赤井神社で暮らしてみたが神社が彼を歓迎してくれているか草治には分からない。だけど、もしも本当にこの神社が魔法で出来ているのなら今だけでも力を貸してはくれないだろうか。せめて彼女たちを助ける力を。

「どうして、そんなことを思うのですか。ずっと前に言つていたではありませんか。貴方は現状を受け止めると。あの二人がいなくなつても貴方の現状に変化はありませんよ」

その声を彼は知つていてる。

彼の前に、赤い着物の少女が現れた。

「しかしながら、貴方が力を望むことは理解しました。貴方に教えても良いですよ、この神社の魔法を」

円治が優男ぶつた笑みをさせて、草治の家と赤井神社を物色していが件の少女の姿は無かつた。

「この神社に見慣れない少女を見かけているという情報が出てきているが、それは何者だ」

穏やかな調子で円治が後ろに控える妃に聞いた。

「分かりません」彼女は人形のような無表情で言った。  
それに円治は肩を竦めた。妃は己の感情を魔法で制限しているためそれが嘘か本当か分からない。同じ理由で妃には拷問も効かない。魔法の力が弱い彼女だが、この少女との駆け引きは本当に苦手だった。

別の方から試してみるしかないようだ。

「それはそうと、あの草治って子はどうじつか」

「どうするとは?」

「どうするって魔法のことを、ひいては僕らのことを知っているんだよ。口止めしないと」

「あの程度の人間が私たちのことを知ってるからと言つて問題は無いと思いますが」

妹が珍しく、彼に反論をした。内心、円治の中でどす黒い愉悦が広がっていた。円治の口にいやらしい笑みが広がる。

「いや、そうでもないだろ。彼は僕の魔法を視た。僕としては大問題だ。だからいつそのこと殺してしまおう」

「そうですか」

妃は静かに言つた。

その表情から何も読むことはできない。円治は彼女があの少年に情

を移していると期待していたのだが、やはり彼女にとつてはどうでもよい存在なのかもしない。

いずれにしろ、少し様子を見る必要があるだろう。妹が何かを隠している可能性は高いのだ。どうすれば上手に情報をかすめ取れるだらうか。円治はそのことをずっと考えていた。

「とりあえず、彼を僕らの家に連れて行こうか

あの草治という少年が何かを知っている可能性もある。

円治はこの神社に何があることには半信半疑ではあるのだが、この気に食わない妹の心を踏みにじれるかについても思考していた。

「そうだ。いいことを思いついた。この神社を燃やして草治君が焼け死んだことにしようか。焼死体の替わりは後で持つてくれればいいしね」

そう言つて円治は神社に向かつて手を伸ばした。

彼の掌から火が作られる。幼いころから、彼は呼吸をするのと同じように火を造ることができた。

蛇のような細長い炎が蛇行して神社に飛びかかる。

その様子を見ても妃の表情には変化が無い。円治は軽く舌打ちしながらも更に大量の炎を作りだした。

（妃の出方を見ようと思って神社を燃やしたのはやりすぎたか）

円治の苦々しい思いが膨れ上がるのに比例して炎も膨れ上がついく。その時だった。

突如、神社から光の粉が吹き荒れた。その光の粉の一つ一つは本で書かれているくらいの小さな文字だ。光は炎を取り囮み、雪のように降り積もり、炎は物質が分子と原子に分解されるように光に変化していく。

そして神社の正面のドアを突き破り、一つの人影が砲弾を連想させる轟音と速度を伴つて飛び出してきた。

人影は金色の光をいくも纏い、鬼姫は咆哮を上げて円治に突撃する。

「人の神社を燃やすんじゃねええええ

怒声に円治は眼を見開きながらも鬼姫に反応した。鬼姫が一直線に飛来しながら彼の顔面に鉄拳を構える。円治も右手を突き出し鬼姫との間に炎の壁を構成した。

しかし、鬼姫の振りあげた腕は伸び上げられたバネの如く跳ねあがりながら炎を突き破り爆風が巻き起こる。

爆風の後、鬼姫が静止する一方、円治は鬼姫の運動エネルギーを全て貰つたかのように砲弾のように森の中に飛んでいった。

二人の激突からすぐさま離れた妃は、鬼姫の怖ろしいまでの強さに呆然としてわずかに目を見開いた。

鬼姫はかつてないほど険しい瞳で円治が飛んでいった方を見ていた。妃も鬼姫の視線の先を追う。彼女は知っていた。兄がこの程度で終わることが無いことを。円治が吹き飛んだ先では森の樹がなぎ倒され、暗い森に穴が空いているようだつた。森に空いた穴の中から青白い人魂のような炎が浮かび上がる。それを見て妃は兄が再び炎を造り出したことを悟つた。

「やっぱ全然力が出ないわ」

鬼姫が唇を舐めながら言つ。妃は森の穴から猛獸が忍んでいるような錯覚を覚えていた。

人玉が膨れ上がり、膨れ上がり、膨れ上がるのを妃は視た。ビルをも越す森を突き破り炎の蛇がアギトを開いて妃と鬼姫を見下ろしていた。息をするのも忘れる一瞬。

風に乗るよう、波に乗るように光の文字を揺らし人間離れした速度で鬼姫が妃のもとに駆けつけ、抱きかかえて空を掛け上がつた。二人が居た場所に蛇のアギトが落ちた。鬼姫の足が空を蹴る度に光の文字が舞い、波紋のように広がる。空に階段の様な波紋を残して二人は遥か空の上にいた。それは一瞬のことと妃には何が起きたのかを把握することは出来なかつた。気付いた時には眼の前に赤く燃える蛇の眼球があつた。炎の蛇がここまで追つてきたのだ。

「マジかよ」

鬼姫が舌打ちをする。蛇の動きは鬼姫の予想よりも速く貪欲で、ア

ギトを開いて一人を包みこもうとした。鬼姫は光を纏つた蹴りをアギトに向けて放つ。光の粉が舞い、蛇の動きが止まる。蛇に触れた瞬間アギトを根こそぎ分解する。蛇の頭が消えて助かつたと妃は漠然と思った。

だが一瞬でまた蛇の頭が再生する。

「危ない」妃が叫ぶ。

「分かつてわぼけ」

こわばつた鬼姫の声。

鬼姫はすぐさま空を蹴った。空の上ではなく、その逆の下に。つまりは術者である円治に向かって。

「貴様を潰せば、この魔法も壊れる」

そう鬼姫が笑つた。だが、妃は見てしまった。抱きかかえられる所為で、鬼姫の背後に居たモノと目が合つてしまつた。

まじかに迫りくる口を開いた炎の蛇を。

間後ろのさつきを感じ取つたのか、鬼姫は妃を虚空に投げた。

次の瞬間、空を舞う妃の瞳に鬼姫が炎の蛇の口に包まれた光景が映つた。

そして、そのまま蛇は地面に隕石の如く落としたのだ。

妃は空中で必死に体勢を整え、地面で受け身を取ることに成功した。だが、体の負担はとても大きい。それでも頭をあげて状況を確認しようとした。

炎の蛇が消え、その下から真っ黒の鬼姫が倒れていた。

「おやおや、これは大当たりのようだ」

円治が高い声を出して鬼姫に近づいていく。

「この子は魔法を分解する力があるようだね。こいつは珍しい魔術師の遺伝子をもっているようだね」

彼は明らかに興奮していた。

だが、その理由は彼女には理解できる。

地上に出てきている『ヤオヨロズ』のメンバーというのは簡単に言えば賞金稼ぎだ。珍しい獲物を捕まえればそれだけ報酬がもらえる。

「妃、君はこれを隠していたのか。でも残念これは僕のものだ」

「いや、違うな」

きつぱりとした低い声が響いた。

円治が眉をしかめて声の方を向き、無表情だった妃の顔からは明らかに驚きが走った。

二人の視線の先に、赤井草治の姿があった。彼はふらふらとした足取りで夢遊病のように一人に向かっていた。そしてその右手には古臭い刀が握られている。

「鬼姫は、この土地のものだ。昔も今も遠い未来も。下衆はこの土地の外に消えてくれ」

「君は黙つていろ」

円治がぴしゃりと言つて、再び炎を造る。

「止めてください。兄さん」

意識せず妃の口から言葉が漏れた。

次に、体が勝手に草治の前に走り出した。妃の動搖した態度に円治がいやらしい笑みを浮かべる。

「どうして止めないといけないんだ」

「兄さんには、あんたには関係ありません。ただ、彼を傷つけるなら私も黙つてはいません」

草治と円治の間で妃は静かに言つて、懐からナイフを取り出した。呆れるような顔を円治は見せる。

「お前の考えていることは分からない。しかし、この僕に刃を向ける気ならば容赦はない。君たち一人とも消してあげるよ」

円治が炎を造り、妃が体全身を緊張させた時。

「お前たちは分かつていない、魔法というものを。君たちの魔法は原始的すぎて魔法と呼ぶにはあまりに幼稚だ」

草治がため息混じりに言った。

それを聞いて円治の顔が歪む。「どうこう意味だ」

「説明は難しい。俺も詳しくは知らない。でも、とにかく反射させればいいんだ。そうすれば魔法が反応してくれる」

草治は足元に右手をつけた。瞬く間に、彼を中心とした巨大な魔法陣が膨れ上がった。この魔法は結界だ。赤井神社と外界を切り離す魔法。

妃と円治は驚愕するなか草治が静かに告げる。

「この神社は俺を歓迎しているようだ。いや、待てよ。俺も君たちを歓迎しないといけないな」

赤井草治は立ち上がる。彼の瞳はよく見ると紫色を宿していた。

「よしそ赤井の神社に

## 赤井神社の魔法具

時は少し遡る。

炎の蛇にとり憑かれ、意識を失つた草治は一人の少女と会つていた。

そこには、桜が雪のようにしんしんと舞つ彼の夢の中。

「楽しくなつてきましたね。『主人様』

紅の薄綿の頭を隠した少女は本当に嬉しそうな声を出す。幼いころはこの少女に会つことも、夢を見るとも本当に少なかつたが、近頃はよく彼女に会つ。だが、少女のことを彼は何も知らない。覚えていない。

「そういえば、君は誰だい？」

「長い付き合いですけど名乗つたことはありませんでしたね。私は赤蓮と言います」

「それで、赤蓮は何の用？」

「はい、実は貴方を止めようと思つて」

「止める?」

「そうですよ」

「貴方は、あの鬼をどつしたいのですか？あの鬼を手伝つて私を払いたいのですか？」

少女は少し悲しそうな声を出す。それに草治は首を振つた。それに少女も首を傾げる。

「てっきり貴方は私が邪魔だと思っていたのですが」

どちらかと言えば、彼女には草治を呪おうとすることは嫌ではあるが。

「邪魔というか、呪うのは止めてほしいだけだ。君の性格は嫌いじゃない。むしろ悪霊なのにその明るさは羨ましくある」

「あは。でも私は貴方を呪うのを止めるのは出来ませんよ」

「何故？」

「貴方を愛しているからです」

「愛している？嫌いじゃないのか？」

草治が尋ねると少女は頷いた。

「ええ、嫌いですよ。でも、同時に愛してもいるんです」

そして頭を覆う薄綿に手を乗せる。

「かつて、忌子として捨てられた私を貴方は拾つてくれました。そして私に貴方の側に仕えさせてくれました。私は嬉しかつた。でも、私を二工とするためだけに貴方は私を拾つた。そして私を二工として殺した。アナタにも貴方の理由があつたことは知っています。だけどやつぱり私は貴方を許せないです」

少女の声は相変わらず邪氣がなく、歌うような声音である。

「でも、それ以上に私は貴方を愛しています。だから、私は決めました。アナタをこの手で不幸のどん底に落として、でも私は貴方の側に付き添つて、最後に貴方に理解してもらいます。貴方には私しか無いということを。そうすれば、貴方は私を最も愛するのでしょうか？」

少女から薄綿が外れた。桜と共に風に揺らめく綿から見知った少女の顔が現れ、草治は驚いた。

肩まで伸びた癖毛の髪とそこからチョコリと飛び出る一本の角。そして紅い瞳。その顔は鬼姫に瓜二つである。

幼き頃の鬼姫、そんなことを草治は思つた。

赤蓮は微笑む。

「私は赤蓮。かつて鬼と忌み嫌われ、前世の貴方に拾われ、裏切られ、殺されてこの神社に祀られた鬼姫の半身」

言い聞かせるように、けれども軽やかに赤蓮は草治に告げる。

「けれども、私は鬼姫ではないのです。鬼姫は私が殺された後に私から分かれた私の一部。鬼姫はこの土地の神として職務を遂行するための存在。そして、私は鬼姫が何の気負いもなくこの地にあり続けるために生まれた鬼姫の持つた負の感情を司る存在。だから私は

ずっと貴方の末裔にとり憑いていました。とはいっても、別に貴方にしたように呪つっていたわけじゃないですよ。本当は祟りたかったんですけど、鬼姫が仕事しろつて煩かつたんですよ。一応、本体は向こうですから私じゃ敵わないんですよ。だから今まで大人しくしてたんですよ。でも貴方への感情が強すぎて、貴方をめちゃくちゃにしたいと願うほどなんかチカラが湧いて来ていつの間にか鬼姫のチカラに対抗できるようになっていたんですよ」少し恥ずかしそうに言う、少女からは暗い感情は欠片も見えない。本当に楽しそうな顔をしている。

「だから貴方以外のことは私にはどうでもいいのです。この土地もね。逆に、鬼姫はこの土地のことしか興味が無くて、貴方への感情は全くない、はずなんだけどね」

ここで困った母親のような笑みを見せた。

それは置いといて、と赤蓮は言つ。

「さて、本題に入ると私にとって、あの子はどうでもいいのです。けれども私は貴方があの子のために、そして生意氣な天竜寺妃のために危険にさらわれることは嫌なのですよ」

それを聞いて草治は不思議そうな顔をした。

「俺が不幸になることがお前の望みだろ？ それなら、俺の好きさせてくれても」

「それは嫌なのですよ。私は私の手で不幸に落とすことが楽しみなんですよ。それに、下手をしたら貴方は殺されますよ。彼らは理を守るために容赦が無いですから」

「本当は、やりたくないよ。面倒くさい。でもね」

喋る草治に赤蓮は眼を細める。

「俺が人を救うことが出来るなら、他の人のために出来るなら、俺は頑張りたい。今まで俺に出来ることなんてなかつたから。何をしても、失敗したり、逆に迷惑をかけたりしてきた」

「私が、貴方の縁をそういう風にしたんです。私は貴方の邪魔をして、貴方を人から遠ざけようとした。貴方の心根は優しいから。

誰にでも優しくしようとするとから、それを諦めてもらいたかったのです』

赤蓮がふっと笑う。

『それでもやっぱり、貴方の優しさは消えないのですか。そういう情けない所が昔の貴方にそつくりです。良いでしょ。私は忠告しました。後は好きにして下さい。仕方が無いから貴方を神主と私も認めます。貴方に少しだけ私も協力することにします。まあ頑張つて下さい』

そして草治の意識は強引に引っ張られた。

眼を開いて草治は驚いた。彼は居間で寝ころんでいた。時間もさほど立っていない。

しかし今までと景色が違う。

赤色の砂が草治の下にいつの間にあってそれに草治は足元まで浸かっていた。そしてその赤いモノは草治の周りにしかない。草治が何歩か動くとそれは影のように点き従い、そして動いた振動の所為か赤色のモノが舞い上がった。それは水槽の中を揺らした時の砂のような光景で草治は見とれる。

と、草治はゆっくりと登つてくる赤を見て再び驚く。その赤は文字で構成されていた。小説の中の文字よりも小さく砂粒程度の文字の集団が草治を取り巻いていた。

『見えましたか？その文字の集団が所謂、魔法の因子です』

頭の中で赤蓮の声が届いた。草治は驚き、首を回して辺りを確認する。

しかし当然の如く誰もいない。

『今は私が貴方の中に入つて魔法が見える状態にしているんですよ。これは妃さん達で言う魔眼と同じようなものです。この力は貴方の母親の麻美も持っていました。しかしながら鬼姫のよりも高性能なものではなく、あくまで貴方の周りのモノしか見えません。つまり、これが貴方の魔法の元です。ちなみに、この自分に取り巻く文字の

集団の羅列を造つて魔法が出来あがるんですよ』

その説明を畠山は唖然としながら聞き、草治は田の前の魔法の元に手を伸ばす。少し触れただけで赤が煙の如く浮き上がる。しかしながら感触はない。

『ちなみにその赤い文字は貴方が命令すればその通りに動きますよお』

赤蓮に言われ、草治は頭の中で赤に向かって舞えと念じる。すると瞬く間に草治の足元にあつた赤が噴き上がり草治を取り巻く。なかなか面白いと思ったが、赤色の文字達が蠢く光景は若干不気味でもあつた。さすがは魔と言うだけのことはある。

『それと、大抵の人の魔法の文字はその所有者の性格といつか縁に深く結びつきますからね』

楽しげな声を聞きながら、自分の文字を見て草治は憂鬱な気分になつていくを感じた。ほとんどは読めない漢字のような単語であつたが、中には草治にも読めるのもあり、アルファベットもちらほらとあるのだが。

「と、いうか、呪、死みみたいな不吉な文字がけつ、こんな頻度であるんだけど」

『ああ、それは私が頑張つて書き帰しました。不幸になれつて強い気持ちを込めて。その所為か魔法もこんなに汚れたんですよ』

満点のテストを自慢をするような赤蓮の声がした。

『俺つて、いつもこんなの憑けて歩いてるのかよ』

げんなりとした声を草治は出した。とはいへ、草治はいくつかの命令を赤い文字に出しながらそれらを躍らせる。（これを上手く並び替えれば自分も魔法とやらが使えるのかな）

『ああ、それは無理ですよ』

頭の中を読んだかのような声だった。

『同化してるから貴方の考えは何となくわかるんですよ。ところでお貴方は妃さん達のように魔法への体質が強いわけではありません。少しだけ体質があるだけです。でも、最低限の体質があるので魔道

具を使えばそれなりに使えますよ。たとえば、かつて鬼姫を封印いた刀とか』

言われて草治は押し入れの戸を引いた。そしてそこにはじつしりと居座る刀を手に取った。

しかしながら使い方が分からない。

『使い方は、簡単です。反射させればよいのです』

「そうだな」

自然と草治は呟いた。

いつか、彼の母も言った。反射させればよいのだと。

反射とは、光や音などの波がある面で跳ね返る反応のことである。そして、生物学では動物の生理作用のうち、特定の刺激に対する反応として意識されることなく起こるもの指す。

草治はじつと刀を見詰てから、赤い文字を操作した。彼の魔法の元はあたかも新しい手足のように自由に動かせる。彼は、刀に特定の刺激を打ち込む。

刀のツバの周りに赤い文字の羅列が大きな円を作った。その瞬間、刀から怪しい紋様を浮かしてた。

その紋様は鞘の先から、次第に刀に広がっていく。そして、その紋様は草治にまで広がっていく。

『その刀は、赤井神社第2位の魔法具です。能力は単純明快、魔法帰し、です』

## 鬼の目覚め

神というモノは果てしない力を有している。

だからこそ、恐怖を感じた神主もとい魔術師に神は封じられる。けれども、神に非があるわけではないのだ。そのため、神主もとい魔術師は神の手助けをする義務がある。

魔術師は時に神を制御する。

魔術師は時に神の手助けをする。

それが彼らの関係。

赤井神社の境内。

倒れた鬼姫を見て草治は胸に苛立ちを覚えた。だから挑発するように円治に言ったのだ、お前の魔法は原始的だと。実のところ、草治自身も魔法についてはよくしらなかつたのだが何となく感じたのだ。円治の使う魔法は、原則に則つていないと。

「魔法つてのは微生物と同じだ」

草治が告げる。

「そうだな、原始的な生物なんだ。意思を持たず、ただ外界に反射して反応するだけ。視覚的には完全に見えない世界を漂うアメーバ達に餌を与える。魔法使いはただ餌を与えればよいだけ」

草治は言つ。その正面で円治は冷めた表情をしていた。

だが、彼の周囲に魔法陣がいくつもいくつも浮かぶのを草治は覗くことができた。

「知ったようなことを

さげすむように彼はぼそりと呟き、魔法陣から炎の魔法が姿を現す。細長い炎の弾丸が5つ。

それを見て、草治は神社に伝わる名剣を引き抜く。

「帰れ」

そう叫び、炎の魔法に向かつて剣を上段から振り下ろす。

空気を斬る乾いた音がして、剣が通過した空間に真っ赤なヒビが入る。そのヒビは口を開けるようにぱかりと割れた。割れ目の中からは純度の高い黒い風景が顔をのぞかせる。

その黒い風景こそ魔法の世界だ。全ての色の魔法が混ざった黒色の、魔法が帰るべき世界。

草治に襲いかかるようと迫ってきた炎の魔法は真っ赤な割れ目に引き寄せられるように方向を変化させた。炎の魔法は草治の前に控える割れ目に吸い込まれ、魔法も赤い割れ目も瞬く間に消えた。

分解か

『違いますね、この剣は魔法をもとあつた世界にかえす力があるのです。でも、攻撃は出来ません』

そのことは草治も分かっていた。

「この戦が転じ」とか出来るのは、世界だけ。一時的に現の世界を

どうあれ、不思議なことは変わりない。

草治が剣を構えなおしたときだ。

彼の横に立っていた妃が眉をしかめた。奇しくも己の魔法で身体を高めた彼女は前を金色の文字が進むよう飛んでいくことに一番こ

気がついたのだ。それはかつて見た鬼姫の光。

『兼な予惑が ) ます 』

赤連の声を合図とするかのように、赤井神社一帯から黄金色の光が

突然の出来事に甲翁は驚異した。甲翁の視界が

られ困惑をみせた。

『弘が』

「私がご主人様を神主に認めたため、彼女の枷が外れました』  
「あああはははははははははは。やつと自由になれたあ

耳をつんざく咆哮。

黄金色の光の中心で、鬼姫が立ち上がった。凄惨な笑みを浮かべて。「これで、私も神になれる。いや、私こそが神。だから、異端を喰わない」と

そう言つて鬼姫は円治を見詰た。癖のある髪を逆立て、瞳は鈍く光る。

円治は後ずさりながら、手を突き出し魔法陣を作ろうとする。だが、魔法陣を作る前に鬼姫の光達が群がり彼の魔法を食らい、分解していく。

「バカな。何だ、この魔法」

円治が叫ぶのを鬼姫は愉快そうに眺める。

「人間ごときが理解できる魔法と私の魔法とは次元が違うよ」犬歯をむき出しにして鬼姫が笑う。それから燃やされた神社を一瞥した。

「そういえばお前、私の神社を焼いたね。天罰を与えなくてはな」鬼姫は瞳を細め、円治をにらむ。鬼姫の異様な圧力と神々しさに円治が顔を蒼白にした。

「だけどお前は、うまそりではないから」

鬼姫の口元がつりあがつた。

そして鬼姫が足元に力を溜め、大地を蹴つた。あまりの踏み込みに大地が震えた。

それからの鬼姫の動きは草治の眼ではとらえきれなかつた。

妃は鬼姫の尋常ではない速さを田で追い、鬼姫が円治を吹き飛ばすのを見た。円治の顔面に鬼姫の拳が突き刺さり、彼の首が不自然に曲がつた。死んだかもしれない。だが、彼女は何も感じない。

（これは、凄いわね）

金色の光の文字は、妃の体内に回る魔法が小さすぎるせいか、それとも外に出でないからか反応してこないため、身体能力は普通の人間よりは高いが、とてもではないが地面を震わせるような馬力は無

い。

円治を吹き飛ばし、鬼姫が妃のほうを視た。彼女の瞳が妖しく光る。

「お前も、うまそうではないな」

「どうしたこと」

鬼姫の言わんとすることをなんとなく理解し、妃は震えた。だが、妃は魔法で感情も抑制する。

「あんたも、異端なのよ。勝手に血の構造を造り変えて、虫睡が走るわ」

「だから？」

「消してあげる」

鬼は笑つて言つた。

先ほど、円治を吹き飛ばした鬼姫の動きを見る限り、妃に勝ち目はない。

(ここで、死ぬわね)

妃の心は冷めていた。

彼女の心はいつも冷めていた。

天竜寺の家では出来の良い兄弟たちに下僕のように従つた。

天竜寺家の外では、お嬢様を演じた。

演じるように言われたから。彼女は人形なのだ。言われたことを最低限やるだけの人生だった。

人生を楽しいと思ったことなど無い気がする。

だからだろうか、彼女は死ぬのが怖くない。

彼女の死を悲しむ人間もない。

だから、まあいいのだ。どうでも。

「待てよ」

声が響いた。

自然と、妃はその声の方を向く。

赤井草治が剣を構えて、妃と鬼姫の間に割つて入ってきた。よく分からぬ男の子だ、と妃は呆れた。

「何だ、草治」

鬼姫が楽しそうに言つた。

「私は今から、そこの娘を消してあげようと思つているところだ。そこをどけ」

「駄目だ。ふざけるのもいい加減にしろ」

草治が即答する。草治の答えを受け、鬼姫の顔が歪んだ。

「調子に乗るなよ。小僧。赤蓮の呪縛から解放された今、お前がどうなるうと私は一向に構わないのだぞ」

「調子に乗っているのはお前だ。人を殺すのは神様の所業ではない。鬼の所業だ」

叫び声をあげて草治が必死に鬼姫を説得しようとしていた。

でも、おそらく無理だ。妃は鬼姫を見て思つた。彼女も少しは神を称するモノに会つたことがある。彼らに弱い者の言葉は届かない。

「はつ。何が鬼だ。草治、私はこの土地の汚物を取り除こうとしているだけだ。遺伝子操作は土地の縁をこじらせるんだよ」

「でも」

草治が呻いた。

妃はそんな草治を見詰めた。

どうして、こんなに必死になるのだろうか。

妃が知る限り草治はいつも楽しそうにしていることはない。やる気が無い。学校でも、家でも。

だから、妃は草治と自分は似たもの同士だと思つていた。おそらく彼も、周りから言われたから学校に行き、従つざるを得ないから鬼姫に従つている。

彼も、きっと人生を楽しいと思えてないのだろう。

しかし、今の彼の行動が理解できない。

どうでもいいではないか。天竜寺妃が死のうと、死ないと。

鬼姫に睨まれながらも、言葉を探す草治の背中に妃は尋ねたかった。

「でも、天竜寺は俺の友達だ。友達を殺すことを俺は許さない」

草治が言った。

その言葉を聞き、妃が目を丸くした。

思わず、噴き出しそうにもなった。

こんな、こんな理由でこの鬼の前に立っていたのか。まるつきり違う。天竜寺妃と赤井草治は違う。少なくとも彼女はそんな理由で動かない。

「お前はやっぱ、バカだね」

鬼姫が呆れるように言った。いつしか、彼女から険しさも消えた。

「バカじやないわ。ご主人様は純粹なだけですよ」

元気のよい声が飛んできた。いつの間にか赤い着物を着こんだ幼い少女が草治の隣りに立っていた。鬼姫が鬱陶しげな顔を造る。

「何だ、赤蓮」

「言つておきますけど、私は一時的にご主人様を神主に認めただけ。だから貴方の力も一時的なものですよ。だからご主人様が死んだから貴方のチカラはずっと戻らなくなります」

あっけらからんと少女は言った。鬼姫は目を剥いた。

「姑息なことを」

「だつて、ご主人様は私だけのものですから。貴方には渡しません」「つたく」

舌打ちをし、鬼姫がそっぽを向く。草治がおずおずとした調子で口を開いた。

「それで、どうするんだ」

「私に聞くな。いずれにしろ天竜寺妃は敵だ。円治のこともあるしこいつがヤオヨロズに帰れば私の情報が漏れる。」

鬼姫がぶつきらぼうに言つ。

それを聞き、草治が頭を搔きなら妃を視た。草治自身、どうすれば良いか分からぬ。

赤蓮と呼ばれた少女はかわいらしく手を打ち、鈴の鳴るよつた声を出す。

「私、いいこと思いつきました。魔法を使いましょう

「魔法？」

妃と草治が首が傾げた。

「そうです。魔法です。魔法を使って悪い縁を変えるんです」

## 少年の日常

守巢湖と呼ばれるそこそこ大きな湖では毎年、花火大会が一日間行われている。

黒い夜空に、多様な花火が上がる様は見事であり、湖畔に近づき体内すらも震わせるような音を楽しむのも一興であるが、赤井草治はこの花火大会を湖から少し離れ、比較的高い場所にある赤井神社から見るのを楽しみにしていた。

長い石段の一一番上にある鳥居の下に座り、草治はぼんやりと花火を見とれた。その隣りには赤蓮が座っていた。神社でのいざいざの後、彼女は頻繁に草治の前に現れるようになつた。

赤蓮が石段の下を指差した。

「お客さんですよ」

花火から田をそらし、彼は少しだけ驚いた表情を見せた。

人影が神社に上がってきた。

草治と赤蓮は立ち上がることにした。

「赤井神社に何か用ですか」「近づく少女に草治が尋ねた。

「用なんて無いわよ。ただなんとなく来ただけよ」

天竜寺妃がきつぱりと言つた。

「あんた、どつかで視たことがあるわね。もしかして聖葉学園の生徒?」

「そうだよ。俺は赤井草治だよ。天竜寺さん。はじめまして」

「ああ、そうだったわ。2組の根暗でしょ」

妃が高飛車に言い、草治は苦笑した。

「その子は？妹？」

赤蓮を指し、妃が尋ねた。草治が答えるよりも先に、赤蓮が一步前に出る。

「そうですよー。私は妹なのですよー」

能天気な声を赤蓮が出す。

「質問を繰り返すけど、どうしてこの神社に来たの？」

草治が妃に聞いた。妃は鼻を鳴らし、草治から顔を背けて湖に視線を移した。

遠くから花火の音と、光が届いてくる。

「ここから見る花火が綺麗だと思つたのよ」

「なんだ」

「でも、私は近くで見るほうが好きだわ。ここからの花火は何か迫力が足りないもの」

「そうかな。俺は情緒があつていいと思うけど」

草治と妃は黙りこむ。

「そういえば、天竜寺さんは兄弟とは仲が良いの？」

「なんで、そんなこと聞くの？」

「いや、学園でうわさを聞いたから。天竜寺さんには円治って名前のホストをしている御兄さんがいるって。」

「円治兄さんはそんなに仲良くないわ。まあ昔ほどでもないけど」

妃が呟くように言った。

花火が終わり、妃が言った。

「帰るわね」

「そうだね。それがいい」

そう言って草治は立ち上がった。

妃が神社の石段を下りて行くのを見ながら赤蓮が草治の腕を引っ張

つた。

「妃さんの記憶、きちんと変更されているみたいですね」

「みたいだね。凄いな鬼姫のチカラは。円治についても傷を治して  
いたみたいだし、焼けた神社も直したし」

「そりゃあ、鬼姫も曲がりなりにも神様ですか。制限が無ければ、  
この地域の中ではなんでも出来るんですよ」

得意そうに赤蓮が答えた。

昨日、赤蓮が提案した申し出は妃と円治の記憶を操作することだつ  
た。

記憶を操作すれば、一応は鬼姫を狩ろうとは思わないだろうとのこ  
とだ。

草治としては記憶を変えられるなんて、と気味悪く思つたが、妃は  
それに同意した。

「私は、どうでもいいわ。本当は、死んでもよかつたんだけど」  
彼女はそう言つていた。

人形のように虚ろな目で。  
その姿はいつも学園で見かける潑刺として天童寺妃と似ても似つか  
なかつた。

記憶を変えられる直前、彼女は草治に聞いた。

「貴方の人生は、楽しいの？」

「楽しいとは思わないけど、樂しくないとは思わないかな」

草治がそう言つと、妃は不思議そうに首をかしげたのだった。

神社を降りていく妃は今どう思つているのだろうか。  
人生を楽しいと思っているのだろうか。

「楽しかつた？」

思わず、草治は妃に声をかけた。

妃は目を瞬かせて振り向いてきた。

「何が？」

「いや、その、花火」

「そうね。最初は寂れすぎて、どうかと思ったけど以外と綺麗だつたし、ええ、きっと楽しかったのね」

人ごとのように妃が呟いた。その表情は昨日見せた人形のよつな顔だった。

それから人形のよつな顔で、軽く微笑んだ。

「何か、赤井神社つて変なうわさばかり聞くけど、以外と風情があつて良い場所ね。また、この神社に来ていいかしら」

「ああ、もちろん」

それを最後に天竜寺妃は神社を離れて行つた。

「妃さんは、一応ヤオヨロズの一員ですから、この神社に頻繁に来られる」と鬼姫が怒りますよ」

赤蓮がたしなめるよつに言つた。草治は肩をすくめてから神社の中に戻ることにした。

新しく造られた神社では鬼姫と草治の祖父が酒を飲んでいる。

草治はため息をついて一人から酒をむしり取る。

「いい加減にしてくれ、二人とも。というか家は財政難だから酒なんて買うな

「飲まないとやつてられないわよ」

「そうだ、そうだ」

鬼姫は昨日から機嫌が悪く、祖父はそれを楽しんでいる。鬼姫はどんよりとして目つきを草治に向けてきた。

「ああ、もうくそ。イラつく、気持ち悪い。全部草治のせいだ」「気持ち悪いのは酒のせいだ」

草治が言つと、鬼姫は草治をにらむことを止めてくれない。

「分かつた。水を持ってきてやるよ」

そう言つて草治が振り向いた時だった。

「『めんなさい』

小さな声が鬼姫から聞こえてきた。啞然とした顔で草治が振り向くと鬼姫は酒とはまた別の赤みが顔にさしていった。

俯いたまま、鬼姫が口を開く。

「その、昨日はちょっとと言い過ぎた。少し調子に乗つてた」

昨日、というと喰うとか殺す発言だらうか。

草治は苦笑してから、鬼姫のあまたに手を伸ばした。

「分かつてくれればそれでいいよ」

「つて、角を引っ張るな。変態」

鬼姫が叫び、びんたをする音が神社に響いた。

二人の様子を見て源蔵は上機嫌だ。

「何ていうか、仲が良いというか。悪いというか。麻美は今の草治を見てどう思うかねえ」

「そうですね。喜ぶと思いますよ。麻美さんは、鬼姫を助けて赤井神社を再興したいと昔言つてましたからね」

赤蓮がしみじみと答えて、言い争つ草治と鬼姫を見詰た。

## 少年の友達

一応、学園に草治の友達はいる。

とても変わった男だが。

彼は入学した後、宣言した。

「俺は有馬辰巳と言います。趣味は目立たないことです。絶対に目立たない、それが俺の高校生活での目標です。ですからみなさんは俺に話かけないでください」

そんなことを言った。

そんな目立つことを言えば、逆に目立ててしまつ。  
おまけに、有馬辰巳は顔もよく、勉強もよくできた。  
だから彼はなるべく人を避けるように行動することにした。なるべく人通りの少ない道を通る。なるべく人とも話さない。  
ただ、有馬は草治とはしばしば話をすることがあった。

彼は言った。

「俺は、欠陥品なんだよ。たくさんの人見られていると思つと頭が真つ白になつて気持ち悪くなるんだ。病気や障害レベルでな」  
お互いに目立たないようにしていったところに同族意識を持たれたから有馬はそのことを草治に言つたのかもしれない。だが、実際のところ草治には有馬が何を考えているか分からぬ。昔も。そして彼が家に引き籠るようになつた今も。

ある日、けたたましい呼び鈴が草治の家で何度も鳴り響いた。  
草治は苦虫を噛むような顔を見せながらも玄関に歩を進めていた。

早朝に迷惑を考えずに呼び鈴を連打する奴に一言浴びせてやろうと

いう構えで扉を開けた草治は迷惑な客を見きよとんとした表情を見せた。

草治の前には彼よりも少しだけ背の高い少年が顔を蒼白にして立っていた。

「有馬？」

声を上げる草治に構わず、有馬辰巳は彼の肩をがしりとつかみ詰め寄ってきた。

「おい、どうした」

「草治、助けてくれ」

有馬の切羽詰まった表情に草治はため息を吐いた。

彼のことは本当によく分からぬ。

有馬を居間にあげると鬼姫と赤蓮が物珍し顔でやつてきた。鬼姫は頭に帽子をかぶつて角を隠している。草治は有馬に「一人は従弟だと簡単な説明をしてから言つた。

「久しぶり。どうかしたのか」

「ああ、大変なことになった。最近の俺は目立つてゐる気がするんだ」

「ああ、またそれか」

呆れたように草治が言つ。

しかし有馬はその声が聞こえないのか頭を抱え出した。

「絶対、おかしい。俺は目立たないようにしているはずなのに、最近視線を感じるんだ。どうすればいいんだ」

それを冷めた瞳で鬼姫が見下ろしている。

「何だ、こいつ。もしかして変な薬でもやっているのか」

「違うよ」

草治はげんなりとため息を吐いた。

「有馬も親から遺伝子教育を受けているんだ。まあ簡単なものらしいけど。だから頭もいいんだけど、遺伝子操作に失敗があつたらしく、先天的に少しだけ情緒が不安定なんだよ。特に、他者の視線

を感じるとパニックに陥るらしい。だから、ともかくよく分からぬことを言つ

「ふん、下手な欲を見るからだ」

「有馬には非は無いよ。とにかく、ここにつまづくのも変なことに怯えててね。今度は、何があつた」

草治が尋ねると、有馬が飛び起きた。目を剥いて、吠えるように言う。

「ストーカーだ。俺はストーカーに後をつけられているんだ」

「へえ」

「何だ、そのかわいそうなものを見る目は。確かに俺は少し精神的に変なことはあるが、妄想の類は一切ないことは草治も知っているだろ」

「やうだけど、証拠が」

肩をすくめて草治が言つ。しかし有馬は諦めない。

「証拠ならある」

有馬は強い口調で言つて懐から桃色の封筒を取り出した。花柄模様の中には有馬辰巳様と書かれていた。

「これは、いわゆる恋文か」

「おそらく違う。とにかく中身を見てくれ」

言われ、草治は封筒を受け取った。

何やら甘い香りがした。

丁寧に草治が封筒を開くと一枚の紙が出てきた。そしてその紙に一言。

好きです。白井美香

「恋文だろ」

「だが、俺は白井なんて女知らない。せつどこれは罷だ。絶対罷だ。俺みたいなバカな男から金をもぎ取らうとしているんだ」

「お前は考えすぎだよ。こつも」

「いや、この手紙が昨日送られてきた。それに、数日ほど視線を感じていたんだ。きっとこの女だ。俺はどうすればいい」

「どうすればいいと言われても、お前の言つことも信じがたいし」

「そう言つて草治が困ったように頭を搔く。

とはいって、草治は知っていた。有馬辰巳は思慮深い。人の視線を感じてパニックに陥るのも、ただ彼は人見知りが過ぎるだけと判断することもできる。おそらく、草治のここに来たのも草治が有馬を理解していることを彼が知っているからだ。つまりこの、草治なら有馬を妄想男だと判断せず、協力してくれる。

しかし、ストーカーなどに草治は対応できるわけがない。それにその女がどこにいるかもわからない。

「名案があります」

赤蓮が両手を元気に鳴らし声を張つた。

「どうにもこうにも、有馬さんに付きまとつてているという女性の存在が明らかにならなければなりません」

「しかし、どうやってそのストーカーを探す」

「簡単です。探すのではなく、出てきてもううのです」

「それは簡単ではないぞ」

「いいえ、そうでもありません。見たところストーカーさんは有馬さんに首つだけです。そんな有馬さんに別の彼女がいたらストーカーさんはどう思うでしょうか」

それを聞き草治は一理あると思った。しかし

「その彼女役はどうする」

草治に女性の友達はいない。おそらく有馬も。

ところが、赤蓮は楽しそうに人差し指を向けながら言つてきた。

「ここに彼女役に適任な人がいるではないですか」

金色の長い髪の少女と、茶髪の垢ぬけた少年。二人はとても絵になつていた。

少女は無愛想な顔で少年を引っ張つていた。

「有馬、あまり俺の手を煩わせるな」

「そりとして声で少女の格好をして草治が後ろの少年に言った。

「いや、でも、恥ずかしい。これだと、何か俺、目立つんじゃないかな。そんなこと考えてたら気持ち悪くなつてきた」

「俺の方が恥ずかしい」

結局草治は赤蓮に言いくるめられ、女装をさせられた。

もともと小柄で容姿の整つている彼なのだが、化粧をして文物の格好をしていると本当に女にしか見えなかつた。

「とにかく、お前の家まで行つてみよう」

ストーカーさんとやらが本当にいるのなら有馬の家の周辺に行けばきっと草治と有馬の姿を見ることになる。少し危険な気もするが。

しかし、一人は何事もなく有馬の借りているアパートに着くことになつた。

有馬辰巳は一人暮らしだ。精神的に未熟なところがある彼を両親は鍛えたかったらしいのだが。

部屋を開けると、いつかも来たことがある、殺風景な部屋。  
勉強机と、本棚に詰められた大量の本とベット。綺麗に整えられた  
部屋。

「あ」

突然有馬が声を漏らして机に駆け寄つた。

そこには一枚の桃色の封筒。

「行く前は、なかつたのに」

上ずつた声を出しながらも有馬は封筒に手を伸ばす。

その横に草治も近づき、有馬が封筒を開いていくのを覗いた。

そして恋文と同じように一枚の紙が有馬の手を滑つて落ちた。

死ね 白井美香

その紙にはそう一言だけ書いてあつた。

有馬辰巳と女装の格好をした草治はアパートに誰かが侵入した後がないかどうかをくまなく調べた。

ところが窓も開いていないし、ドアもカギがかかっていた。

「この白井って子は合鍵とか使ったのかな」

冷静に言った草治の前で有馬は顔をこわばらせる。

「どうしよう。俺はどうすればいい? ねえどうすればいい? ねえ俺はどうすればいい?」

死ねと書かれた紙を握りながら有馬は草治に尋ねてきた。彼は想定外の出来ごとに非常に弱い。慌てふためく有馬を横田に草治は手紙を取り上げてそれをじっくりと見つめた。

有馬の字ではない。丸みを帯びていついわゆる女の字であるように草治にも思えた。

「有馬の自作自演という線は、低いのかな」

「あ、当たり前だろ。俺が自分宛に死ねって手紙書いてお前に見せて得なことはない」

呴いた草治に向けて有馬が怒鳴るよう言つてきた。かなり怒つているようだ。

しかし草治自身も有馬を疑つてゐるわけではない。彼は少し神経質なだけで基本的に人畜無害な良い奴だ。

ただ、彼の精神構造上、他人よりもストレスを抱えやすくなっているため無意識にこのような自分宛の手紙を書いてしまうという可能性もありえた。多重人格というやつだ。

「それでも、文字の雰囲気まで変わる可能性はあるのだろうか」

「何か言つたか」

「いや」「

有馬が怪訝な顔をしているのに気が付いた草治は思考を中断した。

「いずれにしろ、今考へても答えは出ない。彼の頭の回転はさほどの気がくないのだ。それよりは情報を集めるのが重要だらう。」

「そう言えば、この白井さんからはいつから手紙が来ているんだ」

「そうだね、ここ3日くらい前から、いつも何故か密室状態の部屋の机の中に置いてある。手紙は机の引き出しにある」少しばかりは氣の動転が治まつたのか、落ち着きのある挙動で桃色の手紙を机から出してきた。

草治もそれを眺めてから口を開く。

「それで、3日よりも前でそれっぽい女の子にあつたりしかったか」「ここ一ヶ月ほど女と話をしたことはない」

有馬は胸を張つて断言する。

一方で草治は有馬の言葉に呆れるでも同情するでもなく、手紙をめくつていた。全て同じ文面で、好きだという言葉と名前だけしか書いていない。会いたいとも書いていない。それに有馬はこの少女の名前に覚えが無いと言つていた。この少女が何をしたいのか見当がつかない。

草治は先ほど机の上に置いてあつた手紙を確認する。愛の言葉が無い紙。

「いずれにしろ、死ねと送つてきたわけだ。手紙の中身が変わったのは女装した俺と有馬の姿を見てカッフルだと思って嫉妬したのかな」

「やつぱりそなのか。つていうか俺は大丈夫なのか。たまに聞くぞ、好きな女に刺されるって記事」

有馬が肩を震わせた。確かに言い知れぬ恐怖を草治も感じていた。

「それは怖いな。頑張れ有馬。俺はそろそろ帰るわ」

「ちょっと待てよ！俺を一人にしないで。ストーカーは俺のこと死ねつて宣言したんだよ。それに部屋に侵入できる技術もある。だからじばらくお前の神社で暮らさせてくれよ」

「えー。家財政ピンチだから」

「もちろん金は払うから、頼む」

「仕方ない」

あまりに真剣な有馬の様子に草治が折れた。

現実問題、草治にとつて問題なのは金銭問題のみ。ストーカーなど彼の神社にいる鬼と比べれば何て事は無いのだ。

「それなら、まずはここを出て神社に戻るぞ。あそこはたぶん安全だ」

他者に出入りされた痕跡のある部屋にいるのは草治も不気味だった。それに一刻も早く部屋を出たいが、再び女装で外を歩くのも嫌なので人が少ない朝が良い。

だが、有馬は困ったように頭を搔いて口を開けていた。草治は訝しげな視線を送った。

「おーい、早くしてくれ」

「あー、その。実は今から病院に行かなくちゃいけないんだ」

「病院？ああ、あれか前も言つていたな。精神安定剤だっけか。でもまだ6時だぞ」

以前、草治は有馬から彼が遺伝子による不出来を薬で補つていることを聞いたことがあった。

草治は部屋の壁に飾つてある黒と白の簡素な時計に目を向けた。普通の病院が営業するまでまだ時間がかかる。

目を点にするような草治に有馬は苦笑を浮かべた。

「俺は他人と話したり見られたりするのが苦痛なのを話したら、その病院の先生が6時くらいに来てくれれば薬を渡すって言ってくれたんだ」

「それなら俺は先に帰らせてもらつ。お前は病院によつてから神社に来いよ」

草治が告げると有馬の眼が大きく見開かれた。まるで絶望するようなその迫力に草治も後ずさる。

「俺はストーカーに追われるかもしないんだよ。頼むから病院

まで来てくれよ」

「いや、この格好だと恥ずかしい」

「だったら俺の服貸すから」

「それだと俺の命にかかるる」

神社を出る前に赤蓮は微笑みながら言っていた。神社に戻るまで女装すれば下手に呪うのを軽減してくれる。逆にそれが出来なければ呪いを重くするとも。

頑なに神社に戻ることを主張する草治には有馬はため息を吐いた。

「分かった。病院まで付いてくれれば何でも言つこと聞くから」

「なんでも?」

「ああ、そうだ」

その言葉を聞いて草治は少し考えてからうなずいた。

「分かった。いいよ」

心なしか草治の声は明るいものだった。

とりあえず今夜の食費は有馬に持つてもらひて焼き肉でも食べに行こうかななどと考える。

有馬に連れてかれたのはそこそこ大きな総合病院だった。

清潔感のある白く新しい西洋風の建物。草治と有馬は病院の裏手に回り、裏口から入ることになった。

病院の裏手は閑散としていた。無造作に樹や雑草が生い茂っているが、赤井神社のように荒れたという印象を草治は感じなかつた。むしろ厳かな雰囲気。

「そういえば、病院の裏手の土地にはもとは何かの祠があつたらしいよ。でも病院を作るために祠を削つたって聞いた」

突然有馬がそんなことを呴いた。どうやら草治が病院の正面と裏で違和感を持ったのを察したようだつた。それを聞いて草治もつまらなそうに呴くことにした。

「それは、罰あたりな話だ」

「そうかな。罰なんて非科学的な話を気にするよりも、いつして病院を建てるほうがみんなのためになるとと思うけどね」

有馬が気楽に答えた。

草治は無言で有馬の顔を一瞥した。

しばらくして、一人は早朝も出入りが可能といつ裏口に着いた。有馬がドアノブに手を伸ばす。

ところが、彼の手が届く前にドアが開かれた。

有馬がビクリと驚く。彼らしい反応だと草治は思った。ストーカー騒ぎなんかもありいつも以上に神経質になっているのかもしない。ところがドアからは小柄な少年が出てきた。

帽子をかぶっているため、顔はよく見えない。

その少年を見て有馬からこわばつたものが落ちたように草治は思えた。

「やあ、また会ったね」

有馬が柔らかい口調で少年に声をかけた。人見知りの有馬にしては親しげな様子に草治はわずかに感心した。

だが少年は帽子の間からわずかに有馬をにらむように見てからドアから出て、何も言わずに駆けて行つた。

とてもじゃないが仲が良い風には見えない。

「あの子はどういう関係だ」

「ああ、ずいぶん前にここで会つてね。迷つていたから病院の案内をしたことがあつたんだ。それからもちらちら彼を見かける程度であまり話はしないけど、多分俺と同じような症状があると思うんだよね」

有馬は少年の後ろ姿を眺めていた。

早朝に病院出入りをしているのならば、それなりの理由があるのだろう。

つまりは、有馬は同族意識を感じているのかもしれない、草治はそ

んなことを思った。

ふつと、草治は昔、有馬との話を思い出した。

彼は言っていた。

「人間はさ、遺伝子で全部決まるのが今のご時世の常識だろ。能力も性格もだいたいなら測ることができるほど遺伝子についての研究は高まっている。だから、優秀な遺伝子とそうでない遺伝子で試験をするつて学校や遺伝子調査で適正を判断する会社もあるわけだ。そうなると、俺みたいな不出来な遺伝子を持つ奴は、どうすればいいんだろうな。できることならさ、今からでも遺伝子を変える技術を施してもらいたいよ」

悲しそうに彼はそう言っていた。

## 病院に巣食う神

有馬が薬を貰うのを待合室で草治は待つことにした。営業前といふこともあり、病院の中はとても静かだ。深淵な海そこにいるのかのような光景。

草治は一人、待合室で何度も何度も時計を確認していた。有馬の帰りが遅い。かれこれ30分以上も待っているのだ。10分くらい待っていてと有馬は言っていた。何かあつたのかもしれないと思い至った頃だ。

ポン、と軽く草治の肩が叩かれた。

「似合つてますよその格好」

いつの間にか赤蓮が笑顔で草治の後ろに控えていた。ため息をつき草治が赤蓮から視線をそらす。

「何か、用か？」

「ええ。一応、忠告をしにきました。ここは危険です」

「危険？」

赤蓮のいつになく真剣な様子に草治は眉をあげた。帰りが遅い有馬のことと関係があるのでどうか。

赤蓮は天真爛漫な笑顔を深めていく。

「そうです。危険です。ここにも神様が棲んでいます。ここにあつた祠から出た神様が」

「神様つて鬼姫みたいな？」

「まあ、そんなようなもんかもしけません」

草治の問いに赤蓮は曖昧に答えた。

まだ草治には神様と言われてもピンとこない。

だが、赤蓮の楽しそうな顔を見ると草治は胸を締め付けるような不安を感じた。

「その神様は、どんな性格をしているんだ」

「えーっと、私もよくは知りませんけど、多分そこそこ頭が良い神

様だと思います。だつて、病院を隠れ蓑にして信者を増やしていますから。まあ人間を洗脳して神様のいいなりにするのはよくあることです

いつも調子で赤蓮が言うのを聞き草治は絶句した。

普段表情が変わらない草治の狼狽を見て赤蓮がくすくすと笑いだす。「この病院は、言わば一つの宗教の総本山なのですよ。ここに通う患者の何割かはここに神様にだまされた信徒ですよ」

草治の身体に電撃が走ったかのような不安に立ち上がった。

有馬はどこにいる？

有馬を探そうと走り出しあと足を踏み出す。彼がどこに薬を貰いに行つたかは知っている。

おそらく埃一つ無い、真新しい廊下。だが、何故か息苦しさを草治は感じた。

ドアを吹き飛ばすように開け、有馬がいるはずの部屋に草治は入つた。

だが、その部屋には有馬の姿は無く、変わりに髪の白い男が一人。

「待つてたよ。赤井の神社の魔術師」

白い男が草治を見て言った。

魔術師といった。つまり、彼も普通の人間ではない。草治は警戒を混ぜた声を出す。

「アンタがこここの神様か？」

「そう、名はアララギ。他に質問があるかね」

アララギと名乗った神は不羨な視線を草治に向けてきた。その瞳はランランと輝いて草治を射抜く。

妙な圧力にしり込みしないように草治は拳を握りしめた。

「有馬辰巳を知っているか」

「知っている。彼は面白い子だ」

「有馬とアンタの関係は？」

「医者と患者の関係だ」

アララギの即答に草治は拍子抜けした表情になつた。  
赤蓮は「」の患者はアララギにだまされていのかもしないと言つていた。

油断してはいけない。

「アンタは有馬に薬を渡しているらしいな」

草治が詰め寄るように言つ。するとアララギの泰然とした様子から一転、子供のように皿慢げな笑みを浮かべた。

「あはは。君は鋭いね。実は普通の薬ではないんだ」

その言葉を聞き、草治の顔がみるみる青くなる。

（もしかして有馬は麻薬の類の薬を使わされたのか）

薬の副作用のせいでストーカーなどの幻覚を感じていたのかかもしれない。

草治は田の前の男をきつくにらむ。

「有馬にどんな薬を渡した。まさかヤバイものじゃないだろうな」「ああ、ただのビタミン剤だよ。」

アララギはからかうような口調で言つた。

草治はアララギの真意を見破ろうとするようにスッと田を細める。

「本当に、ビタミン剤だよ。俺の魔法を練りこんだビタミン剤だけ。その魔法もただ神経質を軽くするものだから、本当に心配無いよ」

アララギがそんなことを言つてきたが、草治には信用できなかつた。現に、有馬の行方が分からぬ。

「彼が言つてることは本当ですよ」

草治が文句を言つ前に、赤蓮の声が後ろから聞こえてきた。

彼女は先ほどのように笑顔を浮かべていたが、その右手には赤井に伝わる剣を握つている。

「アララギさんは、悪い神様ではありません」

「それなら、有馬はどこにいる」

草治が怒鳴るような声を出した。

しかし赤蓮が焦らすように口元に手を当てるだけ。

「有馬君は、私の魔術師と一緒にいる」

今度はアララギが苦笑交じりに言つた。草治は神様のもとには魔術師が集まるということを以前鬼姫から聞いていた。時に魔術師は神の手伝いをし、時に神を制御する。そして鬼姫という神には赤井の魔術師がついている。

「アンタの魔術師が有馬に何の用だ」

「それは、本人に聞いてくれ。ちょうどこちらに来たみたいだからアララギが不敵な笑みを見せ、天井を指差した。

彼の指先の虚空から突如、数枚の紙が現れた。大きさは折り紙程度。どの折り紙にも少しだけ文字が書いてある。

色とりどりの折り紙に草治が啞然と立ち尽くす。その後ろから赤蓮は草治の右手を引いて叫んだ。

「斬つてください」

赤蓮の姿が溶けるように消えていく。草治の中に溶け込むように消えていく。

同時に、草治の視界が変化した。

彼の瞳が紫へと変わり、周囲の魔法陣が視界に入る。

折り紙に刻まれた小さな魔法陣。その中に文字が入つていた。火と書かれた赤い折り紙は火花を散らして炎を生んだ。他にも水、雷と書かれた文字達が発動を開始しようとしていた。

草治はすぐさま剣を抜いた。

それはあらゆる魔法を別の世界に帰す剣。

「帰れ」

一言叫び、草治は目の前の空間を一刀両断した。

剣は虚空を斬り赤いヒビが入るのを草治は見た。血の色にも似た赤いヒビは飢えた野犬が口を開くように大きく割れ、周囲の魔法を全て呑み込んだ。

アララギはほうつと感心したような声をあげた。

「アンタは有馬の何なの」

少女のような高い声が響いた。

草治が振り返った先には帽子をかぶった少年が近づいていた。

先ほど裏口で会った少年だ。

少年は厳しい目つきで草治をにらんでいた。その瞳は殺氣を宿していて彼がアララギの魔術師であろうことは明白だった。

「ねえ、アンタは有馬の彼女なの？」

少年が突然そんなことを聞いてきた。

それを聞いて草治は心底嫌そうな顔を見せた。そして今の自分は女の格好をしていることを思い出した。

とりあえず、少年の質問を否定しようと声を出そうとして気がついた。口が上手く動かない。

その替わり、彼の中から妙な声が出た。

「そうですよ。私は有馬さんの彼女ですよ」

赤蓮の声だ。

突然の発言に草治は違うと叫ぼうとしたが、声が出ない。

(赤蓮に声を封じられた)

げんなりとした気分を草治が味わっている、その正面で少年は一層剣呑な表情を作つて口を開いた。

「そう。アンタが有馬の彼女ね」

呴いてから、少年は帽子を取つた。肩まで伸びる茶髪があらわになる。

それを見て草治は目を丸くした。

(女だ)

「ボクは白井美香。アララギの魔術師だよ。許可なくボク達の領域に来るなんてどういうつもりかな、魔術師のお嬢さん」

白井美香、有馬のストーカーをしていた少女の名だ。

## 魔術師の戦い

神と認められたモノたちにはいくつもの決まりがある。どれも明確な決まりではない。暗黙の決まりだ。

その一つ、それぞれの神が棲む領域に他の神は入ってはいけない、といつものがある。

そのことを草治は鬼姫から聞いていた。だから、一応は魔術師の草治がアララギの土地に入るのには問題は無い。

だが、アララギの棲む場所に入った草治はその神の相方である白井美香にきつく睨まれていた。

「さて、君は何の用かな？それと、さつきの小さな神はどうここに行つたの？」

白井が厳しい口調で問う。小さな神とは赤蓮のことだ。彼女は今、草治の中に入つてゐる。いや、とり憑いている。

赤蓮は事実上、鬼姫の半身。神という括りに入るらしい。なにはともあれ、草治達には敵対心は無い。それを伝えようと声を出そうとするが、その声が全く出ない。赤蓮が草治の喉を乗つ取つているのだ。

そして草治の中から赤蓮が己の声を出す。

「私達は赤井神社の魔術師なのです。ここには特に用は無いんですね。ただ、有馬さんとデートしていただけで。それで有馬さんはどこに行つたのですか？」

「デート？」

赤蓮の言葉に白井は不快そうに呟いた。ちなみに今の草治は長い金髪のカツラを被り、誰がどのように見ても女の格好をしている。とにかくにも白井美香は有馬辰巳の家に恋文を送つていていたようだから今の赤蓮の、というか目の前の金髪女の言葉は許せるものではなかつたのだろう。

（どういうつもりだ。赤蓮）

『まあまあ、この主人様の声は低いですから男であることがばれてしまいますが。ここは私に任せてください』

唐突に草治の頭に赤蓮の声が響いた。別に、男だとばれて問題が無いのだが。

下手に白井を刺激してはいけないと草治は思ったが彼の中から赤蓮が無神経な聲音を出してくる。

「白井さんは有馬さんのことが好きなんですか」

「好きじゃないわ」

白井は上ずつた声で叫び声をあげた。白井の返答に草治は目を瞬かせる。

彼女は有馬辰巳のことが好きなのではないのか。

草治の疑問を彼の替わりに赤蓮が声を出す。

「好きじゃないなら、どうして好きです、なんて手紙送っていたのですか」

「は？ ボクはそんな手紙、送ったことないよ」

白井がきつぱりと答えた。それを聞いて草治は頭の中で疑問符を浮かべる。

その後ろでアララギがため息を吐くのを草治は聞いた。

「まあ、みんな落ち着こう」

アララギが立ち上がり落ち着いた声を出す。

草治も視線だけアララギを移す。アララギは草治と赤蓮が勝手に彼の土地に入ってきたことに怒っている様子は無い。草治と赤蓮を敵意しているのは白井だけだ。嫉妬なのだろうか。

「美香、有馬君をどこにやつたんだ？」

「結界に閉じ込めたよ。有馬はきっとこのいつのスペイだつたんだよ」

白井は人さし指を草治に向けかみ殺さんとするような目つきを向けてくる。

草治は彼女の話の方向に絶句する。もともと声は出せないのだが。どうやら白井は有馬を赤井神社の者と勘違いしているようだった。とにかくそれを否定しないと有馬が危ない。今も彼はよく分からん

結界に閉じ込められている。

「そうですよ。有馬さんにはアララギさんのスパイを頼んでいました」

またもや赤蓮が楽しそうに偽りを口にした。草治には赤蓮の口を防ぐすべはない。

「やっぱり、やっぱり、有馬は敵だつたんだね。おかしいと思つたんだ。ボクみたいのに必要に近づいてくるし、いっぱい話かけてくれたし」

そう言つて白井は歯を食いしばる。その様子はまるで友達に裏切られた子供のようだ。

悔しがる白井の田元にはうつすらと涙も浮かんでいる。と、白井は右手を真上に振りかざした。

「死ねよ」

逆切れした子供のように怒鳴り声をあげるとともに、周囲に魔法陣が書き込まれた折り紙がいくつも、会いあがつた。

山のようなプリントをバラまけばこんな光景が見れるのかもしねい、そんなことを頭の隅で考えながら草治は魔法を帰す剣を振り切つた。剣は虚空に真っ赤な亀裂を残し、亀裂が大きく広がっていく。そして全ての魔法を紅の亀裂が吸い込んでいく。

それは全ての埃を吸いつくす力強い掃除機のようだ。

「私に魔法は効きません。そして私たちは貴方達に害を与えるつむりはありません。有馬さんを返してください。さもないと、斬りますよ」

赤蓮が楽しそうにまるで遊びに行こうと誘うように物騒なことを言った。

(ちなみに、魔法を消したのは赤蓮ではなく俺だけど)

自ずと鈍い光を放つ、魔法を無効化する得体のしれない剣に白井の視線が移る。

彼女の表情に現れたのは、明らかな怯え。

白井美香からは『ヤオヨロズ』のメンバーであつた天竜寺兄妹のよ

うな威圧感が無い。つまりは戦闘慣れしていないことも明白だった。

だが、少女の意思は草治の想像の上を超えていた。

突如、白井は踵を返し、逃げるよう部屋を飛び出した。

少し遅れて草治も部屋を出て廊下に出た。

「あれえー、誰もいませんね」

赤蓮が能天気な声で言った。

草治も周囲を確認するが、彼の視界に入るのはビルまでも続くような真新しい廊下だけ。

「ああ、そんなに驚くことではないよ。ここは美香が貼った結界の中だから」

草治の後ろからアララギが彼の肩を叩いてきた。驚いて草治が振り返ると少しげんなりとした顔でアララギは頬を搔いている。

「私みたいな神様が人間世界で営業するには、現から離れたところがいいのさ」

「病院の裏手に結界で簡易な異界を造つたわけですか。まあそのほうが神としては営業しやすいですよね。異界、というか結界の中なら何をやっても『ヤオヨロズ』どころか他の神にも分かりませんから」

何故か赤蓮が草治の替わりに答える。

「それで、貴方の魔術師はどこに行つたのですか」

「うーん、有馬君のことだと思うよ。美香は有馬君のことが好きだつたみたいだからね。本人は気がついてないのか、否定しているのか分からぬけど、毎日無意識だけど魔法で「好き」と書かれた折り紙を送つていたようだからね。有馬君にだまされたと知つて悔しかつたんだね。下手したら有馬君を殺してしまつかもしないね」

さもありなんとアララギがとんでもないことを言った。

アララギの話を聞いて有馬のストーカー騒ぎの原因が分かつたが、今の有馬の状態はかなり悪くなっているように草治には思えた。（赤蓮、どうするんだよ。お前のせいだぞ。どうにかしろ。そうじやないと今回ばかりは怒るよ）

『大丈夫ですよ。私は』主人様が苦しむ姿にしか興味はありませんから』

(何が大丈夫だよ。お前のせいでお馬が誤解されて大変なことになつているっぽいんだぞ)

『大丈夫ですってば。むしろこいつしたほうが、有馬さんと白井さんはお互いのことを理解できると思いますよ。だって』

「だって、魔法を使える者は己の魔法でしか自己を表現できませんから。私たちにとっては言葉で語るよりも魔法で語るほうが楽なのです」

赤蓮が草治の頭の中ではなく外にも聞こえるような声を出していた。その横でアララギは赤蓮が興味深いといわんばかりの視線をよこしてきた。

「なるほど、一理あるな。魔法の方が言葉などよりも伝えられるものが多い。しかし」

アララギは一度言葉を区切った。それから、誰もいない廊下の先を指差した。白井が現れる直前と同じように、彼の示した方向から何枚もの折り紙が蝶のようにひらひら寄ってきていた。それらの紙は廊下を埋め尽くす勢いで増えてきている。

「どうやら、美香はかなり動搖しているようだ。このままだと、この結界が爆発するよ」

アララギの冷静な声が響いた。

## 白い魔法の一族

どこを歩いても見慣れた廊下が続いていた。

いつまで歩いても草治が待つ場所に辿りつけず有馬辰巳は不気味なものを感じていた。

迷ったというわけでは無いはずなのだ。なぜなら廊下は一直線なのだから。

焦りすら辰巳が感じた時だった。彼の前に人影が現れた。

ショートヘアでボーアイッシュな少女だ。

「よくも騙したな」

少女の剣呑な声に辰巳は訝しげな表情を作った。目の前の少女にとんと覚えが無いのだ。

「許さない。殺してやる」

突如少女は手を振り、瞬く間に大量の紙が蝶のように溢れるのを辰巳は見た。

辰巳は息をのみ、後ずさりするしかできなかつた。

状況は理解できないが、確実に危険だということだけは彼には分かつた。

大量の紙達はみるみるうちに増え続け、ほんのわずかな間に辰巳のもとにたどり着いてしまつた。

紙のいくつかからは静電気が弾けいるもの、煙が上がつたりしているものがあるが、一番に辰巳の眼を引いたのは火花が飛び散り、病院の廊下に引火しているところだった。今はまだ大事に至っていないが、間もなく火は燃え上がるだろう。だが、出口が分からない。

「そこの君、ここは危ないから逃げよう

辰巳が声を張り上げるが少女は彼をにらむだけだった。少女の周りでは引火した炎が膨れ上がりつづいていた。

仕方なく辰巳は少女めがけて走つた。どこからともなく現れた何枚もの紙を踏みつけて。

5歩目くらいだろうか。

走り出した辰巳の頭に衝撃が走った。バットで脳の中を直接殴られたのような重たい一撃だつたが、衝撃と一緒に大量の声が辰巳の中で反響した。

『君と僕は友達だから』

優しい声音が辰巳の中で何度も流れる。

遅れて、彼の脳に見知らぬ光景が映り、様々な情報が駆け巡った。

幼いころから、少女は魔法を知っていた。

魔法はいつでも人間のすぐそばで眠っている。人間の世界と少しだけ離れた世界で魔法は寝ているのだ。別の世界にある魔法を自分の中持つてこれる人間が魔術師なのだ。

魔法と近しい人間は、普通の生活を送ることは出来ない。何故なら魔法は簡単に目を覚ましてしまうから。

彼らはすぐに感じてしまうのだ。どこをどう触れて、呼びかければ魔法が起きてしまうのか。

だから、いつも魔法が一般人の前で起きてしまわないように気をつけていないといけないのだ。

少女は学校でも、油断なく過ごした。

その所為だろうか、彼女に親しい人間は出来ない。誰もが少女と距離を取っていた。

時には無口の少女に対して悪口も聞こえてきた。

それを聞いて胸が締め付けられたけど彼女は聞こえないふりをすることにした。

その替わり彼女は白い魔法の使い手が祀るアララギ様を祀る役目にならなかった。

没頭した。

アララギ様は頭の良い神様だった。信者を造るために病院を隠れ蓑にすることにしたのだから。

神様は信者が多ければ多いほど力を増していく。

だから様々な神様が信者を増やそうと躍起になつているのだ。  
しかし、アカラサマに魔法を使って奇跡を人間に見せびらかして信者を作るのは暗黙の禁止事項だ。

そんなことをすれば、他の神様達からハブにされてしまう。  
だからどの神様もコツコツそりと奇跡を人間たちに見せて信者を作るのが常なのだ。

そしてアララギ様と少女も同じだ。病院で患者のために良く効く薬をコツコツと魔法で作って信頼を高めていくことを繰り返すのだ。

ある日、少女はアララギ様を訪れた少年に会った。

裏口で結界の準備をしていた少女が明らかに拳動不審だったようでは少年が遠慮がちに声をかけてきたのだ。

とても優しい声だと少女は思った。

少女はあわてて「迷った」と嘘を吐くと入のよさそうな少年はわざわざ病院を案内してくれた。

それが二人の出会いだ。

それからも、少年は少女に会う度声をかけてくれた。

少女は少年を邪険に扱つたがそれでも少年はいつも話かけてくれた。

『何で付きまとうんだよ』

少女が尋ねたことがあった。

『君と僕は友達だから』

少年はおずおずと答えた。

それからだ。少女が少年のことしか考えられなくなつたのは。

でも今日の朝、彼女は知つてしまつた。その少年がどこのだれかも知らない金髪の女と仲良く歩いているのを。

それを見て少女の胸がグチャグチャに掻きまわされた。少女にこの感情は理解できなかつた。

だから白井美香は、決意した。あの少年を見つけたら。

様々な情報が過ぎ去つた後、辰巳は自分の身体が倒れていることに気がついた。

すぐさま起き上がると、周囲の炎が一層ひどくなり黒い煙が立ち込めている。

口元に手を当て目を凝らすと先ほどの情報の中の少女、白井美香が頭を抱えてうずくまつていてるのに気がついた。  
辰巳が駆け寄ると美香は震えていた。

「魔法が止まんない。どうしてどうしてどうしてどうして」

美香は苦しげに呻いている。

どうやら感情のままに魔法を発動させすぎたらしい。

「聞こえる？ 美香」

辰巳がそつと美香の肩に手をかけると美香の震えが止まった。ゆっくりと美香の体重が辰巳に預けられていく。

「辰巳？ どうして」

うるんだ瞳で美香は辰巳の瞳を真直ぐに見詰た。

一人の周りでは黒煙と炎が膨れ上がつていて。

辰巳は弱々しいけれども、穏やかな笑みを返した。

「俺はね。俺みたいな人間の力になりたいんだ。先天的な問題で普通の生活が出来ない人の助けになりたいんだ」

それから少し頬を搔いた。

「いや、そんな理由じゃないかもしれない。単に、俺は君のことが好きなのかもしれない」

恥ずかしそうに言つて辰巳は美香を抱えようとした。

しかし美香は悲しそうに首を振り、辰巳の胸板を軽く押して距離を取りつた。

「有難う。でも、ボクの魔法はもう止まらない。だから逃げて」  
美香の言葉が言い終わると同時に、彼女の周りから再びいくつもの紙の束が噴水のように舞いあがつた。

しかも、その全てが爆発の魔法。紙から火花が飛び散り、魔法が展開しようとする刹那、美香の叫びが響き渡つた。

「速く、逃げてええええええええ」

だが、辰巳は足を踏み出した。美香に向けて。そして辰巳は美香を爆発から守るように抱きしめる。

爆炎が辰巳を焼く前に、一筋の閃光が辰巳の胴を貫いた。

眩しくて目を閉じたくなるほど光でありながら血の色にも似た鈍い閃光だ。

その閃光は音も無く、痛みもなく、ただ辰巳の身体を通過して一直線の軌跡を廊下に残していた。

空間そのものに赤いボールペンを引いたようなその光は、ゆっくりとその幅を広げていた。

まるで生き物が口を開くよつこ。

その口の中は真っ黒だった。今まで見たことが無い暗黒の色は閃光が通過した有馬辰巳の中にも横たわっている。身体に痛みは無いが辰巳の視線は暗黒に引き込まれる。それは、先ほど彼が知った魔法の世界だ。全ての色の魔法が混ざり、真っ黒になつた魔法の世界の光景。

彼の視線と同じく、周囲で「じめく紙も、燃え盛る炎と黒煙、更には病院の廊下も天井も風景全てがものすごい速さで暗黒に引き込まれていつた。

数秒で全てを暗黒は吸い込み、暗黒の空間はゆっくりと閉じて行つた。

まるで何も無かつたかのように。

そして辰巳は自分がいるのは建物の中ではなく外であることに気がついた。

「疲れた」

辰巳の後ろから聞きなれたため息交じりの声が聞こえてきた。

すぐさま振り向くと彼の友達の赤井草治が陰気な顔をして立っていた。未だ女装の姿をしているが。

彼の横には辰巳の主治医のアララギと、草治の親戚だと紹介された赤蓮が立っていた。

草治と対照的な元気な顔の赤蓮が草治が持っている剣をペチペチ叩いている。

「赤井の剣の効果範囲は刃の届く範囲のみなのです。だけど、病院にかかるといった結界という連続したモノになら例外的に魔法を帰す亀裂を入れることができます」

「ああ、そう」

赤蓮が何か説明しているが、草治は氣のない返事をよこすだけだった。

それから彼は辰巳に視線を投げかけた。

「悪かつたな。変なことに巻き込んで」

謝罪するような口調で草治が言った。

それだけで辰巳には分かった。草治も魔法に関わる人間なのだと。

「いや、巻き込んだのは俺だ。それに、いろいろなことが分かつた」  
そう言って辰巳は彼にしな垂れかかるように眠りこむ美香の頭を撫でた。

アララギは微笑を浮かべて辰巳の前にやってきた。

「いやはや、辰巳君。君は恋の魔法にかかつたようだね」

爽やかな笑顔を振りまいてアララギが言った。彼の隣りで草治はひきつった表情でアララギを見詰している。その視線に気付きアララギは苦笑を見せた。

「あはは。これは比喩では無いよ。美香の使う白い魔法はどんな魔

法も使えるところが利点なんだ。火の魔法も風の魔法も千里眼の魔法も、そして人の心に影響させる魔法もね」

そう言ってアララギはワインクまでしてきた。

辰巳は苦笑いをしながら口を開く。

「それって、俺の家に届いていた「好きです」って手紙のことですか

「どうだろうね。それは微妙かな。美香は辰巳君を無意識のうちに千里眼で捉えてからさらには魔法を送っていたみたいだけど、物理的に距離が遠いほど効果は薄いから。それよりも、さつきの騒ぎで変な紙を踏んだりしなかつたかい?」

アララギが尋てきた。

しかし辰巳には踏みつけた紙を確認している暇は無かつた。  
必死に先ほどの状況を思い出そうとする辰巳にアララギはもう一つ質問した。

「それでは、頭にガツンとした衝撃はなかつたかい?」

「あー、そういうえばあつたかも」

辰巳は美香に近づく時、突如美香の情報が頭に流れてきたのを思い出した。

「きっとその時に変な魔法にかけられたんだよ。白い魔法使いは大人になるまで魔法を暴走させることが多いから。そこで提案なんだが、その魔法を私が取つてあげよう」

「あーいいです」

アララギの申し出を辰巳は断つた。アララギだけでなく草治も驚きの表情を見せるなかで辰巳は頭を搔いた。

「下手に心を動かされるのはちょっと怖いから」

辰巳があははと笑いながら答えるのを草治は無言で見詰めていた。

有馬辰巳の「」たゞから早くも一週間が経過した頃、久しぶりに辰巳は学園に登校してきた。

たいてい学園で一人で休み時間も毎も過ごしている草治としては数少ない友達の辰巳がいれば学園で孤立できると喜んだりもした。教室で落ちあつた辰巳に草治は茶化すように言った。

「一か月ぶりの登校はどうだ？」

「ヤバイ。何か、注目されている気がする。もう帰りたい」

青い顔で答える有馬を見て草治は苦笑した。

「前も言つたけど、お前はもっと堂々としていて良いと思うぞ。顔も悪くないし勉強出来るんだから」

「いや、駄目だ。たとえば、今日の授業で当たられた場合、頭が真っ白になつてきちんと発言できるきがしない。そしてテンパル俺をクラスのみんなは笑い者にするに相違ない」

極端なネガティブな言葉だが、草治にもその心理的動きが分かるので神妙に頷く。

「ちょっと、ちょっと、辛氣臭いよそこ」

草治と辰巳が黙りこんでいると、彼らの間に少女の声が割り込んできた。

その声に辰巳が顔をあげた。

「あれ？ 美香」

ぽかんと辰巳が口を開いているのを白井が笑顔で見下ろしていた。それを横目に草治は肩を竦めた。

「こいつ、お前を追つて転向してきたみたいだぞ」

「べ、べつに追つてきたわけじゃないよ」

白井があわてて手を振つて否定している。

相変わらず、素直じやない。草治がため息を吐く。

白井は辰巳に彼女がないと知つてから、ここにことした表情で辰巳に近づくようになった。

「ボクは、友達の辰巳が学校をさぼらなによつて確認しにきたんだ」

胸を張つて白井が宣言した。

それを聞いて有馬が勢いよく立ちあがる。

「嫌だよ。毎日学校なんて来たら、精神的に死んじゃう」

「つるさいなあ。そんな後ろ向きでどうするんだよ」

有馬と白井が、さやあさやあ言い合つてゐる。

白井美香は今もアララギと病院で働いてゐる。そして有馬の白井に対する気持ちは、草治にはよく分からない。アララギの言ったように本当に恋愛感情なのかもしないし、そうでは無いのかもしない。いずれにしても有馬はよく喋るようになつた。

草治は一人をいつものように陰気な瞳で眺める。

と、思わず息が漏れた。

それはいつものようなため息にも似ているが、見よぎによつて赤井草治が笑つたようでもあつた。

## 竜の娘

赤井神社の参拝者は今日もゼロ。

赤蓮は祖父と買い物に行き、赤井草治と鬼姫は二人だけ。

鬼姫は面白い番組が無いのかテレビのチャンネルを頻繁に変えていく。

る。

そんな時だった。

チャイムの音が家中に鳴り響いた。

そこにいたのはスミレ色の髪を持つ中学生くらいの少女だった。眠たげな瞳もスミレ色だ。

少女はペコリと頭を下げてから、両手でぶら下げる紙袋を草治にのばしてきた。

「どうぞ。お土産です」

その声は聞き逃してしまいそうなほどにか細い。草治も一応お辞儀を返す。

「ああ、どうも。それで君は？」

「初めてまして、ツヅリと申します」

「俺は赤井草治。よろしくねツヅリ」

草治も自己紹介するとツヅリと名乗った少女はじっとした視線を草治に向けてきた。それから黙りこみ草治を観察するように視るだけだった。

粘っこい視線に戸惑っているとツヅリがため息を吐いた。

「貴方のような陰気な男、ツヅリは嫌いです」

ツヅリの失礼極まりない発言でしたが草治の顔色は変わらない。このような暴言、彼はもう慣れっこだ。それでも年下に駄目だしされるのは傷つくが。

憮然とした表情の草治から視線を外しツヅリは靴を脱いだ。

「お邪魔しますね」

眠そうな顔にも関わらずきつちりと靴を揃えてツヅリは草治の家に上がりこんだ。

説明の無いツヅリの行動に草治も眉を顰める。

「おい、どういう用件だ」

「大したことはありません」

そう言つてツヅリはトコトコと家のの中に入つていった。

テレビに釘付けになつてゐる鬼姫の横にツヅリは座り、彼女は頭を下げた。

「初めてまして。鬼姫様。ツヅリはつい最近生まれた天竜の娘です」ツヅリが名乗りを上げるが鬼姫は興味が無いのか、簡単に相槌を打つだけ。

ツヅリはツヅリで鬼姫の態度が気にならないのか、自己紹介を続けようと小さなお口を開いていく。

「先日、父上と大喧嘩をしてしまい、ツヅリは屋敷を出てきましたのです。それで行くあてが無くて困つているのです」

顔の筋肉を全く動かさずツヅリが言つ。全く困つているように見えない。

とはいへ鬼姫はテレビに夢中なのかツヅリに一瞥すらよこさない。草治も見るに見かねて、テレビの電源を消すこととした。というか、コンセントごと抜いてやつた。

すると鬼姫から怒声が上がつた。

「おい、草治。何をする」

「お前のお仲間が助けを求めてるんだ。話くらい聞いてやれ」

「いや」

鬼姫はブイッと横を向く。子供のような態度に草治がため息を吐いた。

「話くらい聞いてやれ」

「嫌。第一、神様同士のなれ合いは暗黙の了解で禁止されているの」「また、神様の決まりか」

草治はげんなりとした調子で呴いてからツヅリを見た。

ツヅリは今にも寝てしまいそうな眼差しを草治に向いている。

「そういえば、ツヅリはどうしてここに赤井神社に来たんだ?」

「この神社には『ヤオヨロズ』にもケンカを売る力の強い魔術師がいました。それは誰ですか」

『ヤオヨロズ』にケンカを売ったというのは天竜寺兄妹のことだろ。強い魔術師というのはピンとこないがその噂はおそらく草治のことだ。

おずおずと草治は手を擧げた。

すると顔の形を変えないままツヅリはため息を吐いた。

「まさか、貴方のような残念な男が期待していた赤い魔法の使い手とは」

やれやれとツヅリは首を振る。

「残念な男で悪かったな。それで、要するにはお前は家出して帰る家が無いということか?」

「まあそうです」

「それなら、ここにとまればいい」

草治が言うとツヅリの顔の筋肉がはじめて動いた。目を丸くして、きょとんと草治を見上げる。

「良いのですか?」

「はあ?何言い出すんだよ。草治」「

露骨に嫌そうな声を出したのは鬼姫だ。鬼姫は目を見開いて草治に喰つてかかる。

「草治、アンタ分かつてないな。そんな簡単に他の神を、ましてや竜をすまわせるものじゃないんだよ」

「そう言つた。誰しも困った時はお互い様だ」

草治は諭すように言ってから鬼姫の角をぐいぐいと引っ張った。鬼姫はこの行為に弱い。

「分かつた、分かつたから角は引っ張るな」

鬼姫が顔を真っ赤にして草治を引き離そうとしてくる。

「うん、そういうことでしばらくここにいるといいよ。ツヅリ」

草治が相変わらず疲れた聲音でそう言つた。

こつして赤井神社は天竜の娘を預かることを簡単に決めたのだった。

## 少年と竜

そこは海の底。

この星を照らす太陽の光が一切届くことのない暗黒の世界。漆黒の風景に一人の男が浮かんでいる。

彼が魔法を知らぬタダビトであったのならば、この闇に畏れを抱くだろう。

だが、彼は違う。むしろ彼はその場所が心地いといつも思っていた。なぜなら、ここは魔法の源流と色が似ているから。

広い意味で考えれば彼自身も魔法の源流から生誕していると考えることも出来る。全ての竜族の母は魔法の源流だから。

魔法の源流。それは彼が現在存在する世界よりも上の次元に存在する魔法の母体。そして魔法の源流は純度の高い黒色をしている。

魔法の源流の在り方はある意味、彼が浮かぶ深海や宇宙の色と良く似ている。だから竜族は深海と宇宙に棲むのを好むのかもしれない。

しかし、今の彼は不快そうに眉を顰めていた。彼の瞳にはカマクラのような小さな祠と、その中で横たわる噛み切られた鎖が映っている。

「天竜の娘が逃げあつた」

吐き捨てるように呟いた。

彼はこここの防人だ。

「ああ大変だ。海竜王様にこのことが知られたら大変だ。何としてもアレを連れ戻さないと」

防人は空を仰ぐように顔をあげた。

しかしそこには一切の光は無い。

鬱陶しいほどに照りつける太陽の光さんさんと降り注ぐ光景を赤井

草治は聖葉学園の校舎からぼんやりと眺めていた。

もちろん今は授業中なのだが、彼はほとんど教壇に立つ教師を見る  
ことは無い。

授業に出てもきちんと授業を聞かないから成績が悪いことを草治は  
理解している。

だが、彼にはそれらに対してもほとんど興味を持てなかつた。  
彼の一番の問題として、興味関心の枯渇が著しいことがあげられる。  
好奇心などの心の動きは人間が向上してくために必要不可欠なもの  
だが、彼の心の動きは乏しい。

一般的にみれば、この状態を「つ病」というのかもしれないと思つた。草治は  
ぼんやりと思つた。

やる気の出ない草治の視線は自然と窓の外の風景を彷徨い、ほとんど  
頭を思考させることなく授業が終わるのが彼の日課だ。

ところが、草治の視線は一つの場所に固定されていた。

学園の中庭の隅のところごとに散らばるベンチの上、学園の中等  
部の制服を着たツヅリといふ名の少女が座っていた。彼女は何の表情  
もうつさずにただ眩しそうに空をずっと仰いでいた。

そして授業の終わりを告げるチャイムが学園に響き、ツヅリは空を  
仰ぐのを止めた。

ツヅリが赤井神社に居候し始めて5日が立つた。彼女は草治以上に  
感情を表に現さず口数も少ないが、数日前から草治の通う学園に見  
学に来ているようだつた。一応、昼飯も作つてある。

「ねえ、草治。辰巳知らない？」

考え方をしていた草治の横から白井美香が声をかけてきた。  
つい最近転校してきた白井はクールでかつこいいとクラスでも人気  
者だった。

白井の鋭い目つきに草治は肩を竦めた。

「有馬なら、授業が終わつた直前早退したよ」

「はあ？ あいつ何を考えてるんだよ。まだ昼だよ」

更に田を剣呑に光らせて白井は草治そ睨みつけてきた。だが別に草治が悪いわけではないのだ。草治はげんなりとため息をはく。

「俺が知るわけないだろ」

「ふん。いいよ。今から連れ戻してくるから」

そう言つて彼女はものすごい勢いで教室から出て行つた。

その後ろ姿を草治はあきれ顔で眺める。

(あまり刺激するとまた、引きこもつてしまつんじゃないか)

有馬辰巳はつい最近まで登校拒否をしていた。

だが最近は毎日授業に出ている。もちろん今日のようになつてしまつことがほとんどだが、これは大きな進歩だと草治は思つている。

ツヅリは微動だにせずにベンチに座つていた。

その横に草治も腰を下ろす。

「楽しいか？」

「はい、とても」

淡々とした調子でツヅリが言つた。

この少女は表情は読めないが嘘を吐くことは無い。だから本当に楽しいのだろう。

草治はツヅリにお弁当を渡すと彼女はペコリと頭を下げて受け取つた。弁当を広げながらツヅリがしみじみと呟く。

「人間の世界というのは凄いですね。とても綺麗で、楽しいことがいっぱいあつて」

「そんなに楽しいことばかりじゃないよ」

草治も苦笑交じりに答えた。するとツヅリがわずかに田を大きくして草治を見詰てきた。

「草治様はこの世界が楽しくないのですか？」

「それでもないけど、出来れば学校とか行かないでずっと寝てたい

かな

草治が何気なく軽く首を動かして再び空を見上げた。

「ずっと何も無くて寝てるだけのもつまらないですよ」

「まあ、そうだね」

ツヅリつけられて草治も鬱陶しいほどに眩しこ空を仰べりとした。ここは光で溢れすぎている。

## 海の底の竜

部屋のカーテンの隙間から白い光が入り込む。草治は目を覚ました。

頭がすしりと枕の中にめり込んでいる、そんなことを思いながら布団からむくりと起き上がる。濁った瞳で恨めしそうに部屋に侵入してきた光をねめつけてから立ち上がる。カーテンを開くとムカつくの快晴が待っていた。嫌な一日の始まりだ。

ふらふらと草治は台所に向かう。鬼姫達に朝食を作つてやるために特別料理が得意というわけではないが、鬼姫も赤蓮に言つても手伝ってくれない。そのため彼女たちには料理を作つてやるうとは思わないが、家の大黒柱である祖父の負担を減らすにはせめて家事くらいやらないといけないという草治なりの義務感だ。だが、何もしない赤蓮と鬼姫を見ているといらだたしいことこの上ない。どうしようもない不満をつらつらと考えて台所に入る。

「おはようございます」

草治が入るとエプロンを着たツヅリが台所でペ「リとあこさつをしてきた。育ちの良さを感じさせるあいさつだった。少し呆気にとられていた草治にツヅリは事務的な口調で聞く。

「今日は料理というものを体験してみたいと思つたのですがよろしいでしょうか？」

「ああいよいよ。むしろ嬉しくらいだ」

心持ち穏やかな声音を作つて了承した。

ツヅリは黙礼した。

何の感情も無いような少女だが、意外とこの少女は好奇心が旺盛だった。学園にも見学に来るし、それだけでなく掃除や洗濯などの家事まで手伝ってくれる。更には家事を行つている時、彼女は「楽しいですね」と言って鼻歌を歌うこともある。

はじめは無表情のツヅリを天竜寺妃と同じような性格だと思つてい

たが中身はとても異なつてゐるようだに感じた。

「どうかしましたか？」

考え方をしていた草治にツヅリがガラス玉のような瞳を向けてきた。

こうして見ると、本性を出した妃とよく似ているのだが。

「どうもしない。それよりも、ツヅリは味噌汁を作ってくれ」

苦笑交じりに草治が言つと、ツヅリはパタパタと鍋を持つてくる。このようにツヅリが手伝ってくれるため彼の日常はさわやかな変化をもたらした。

ツヅリは包丁の使い方もままならない素人だつたが一人で料理をするよりも一人のほうが効率が良くて楽しい。ツヅリには危険が少ない味噌汁の管理を頼んでいた。草治が言つたように野菜や味噌を入れるという単調な作業だつたがツヅリは鼻歌交じりに味噌汁をかき混ぜては香りを楽しんでいた。どうやら退屈ではなさそうだつた。

妹がいたらこんな感じかもしさないと草治は思つた。

「そろそら味見してみな」

そう言つて味見用の皿をツヅリに渡す。

ツヅリは頷いてから皿を受け取り味噌汁を掬い少し呑み込んだ。料理への反応は無いが、草治に視線を移してきた。

「草治様はどう思いますか」

抑揚のない声でそう言つて皿を草治にかえしてきた。香りも悪くない。草治もツヅリの作った汁を一口。

「ああ、なかなか美味しいよ。ツヅリは料理が上手だね」

そう言つてツヅリの頭を草治は撫でた。するとツヅリは胡乱な瞳で草治を見返した。

「本当ですか？」

「ああ、本当だ」

疑わしそうなツヅリを見返して草治も頷く。彼としては力の入った声を出したつもりだつたが何分声が低すぎて「美味しかったよ」と

「うー、コアンスが伝わらなかつたのかもしない。」

ツヅリは撫然とした表情のままだが、彼女の頭の上に乗つてゐる草治の手を振り払おうとはしなかつた。

「この朝つぱらから何をやつてゐるんだよ」

草治達の後ろから、冷たい声が飛んできた。背中に悪寒を感じて首を動かす。

そこには鬼姫が眉間にしわを寄せ立つていた。

何故かいつも増して機嫌が悪い。鬼姫は口をとがらせて言ひ。

「草治のバーカ。変態」

それだけ言つて鬼姫は踵を返した。わけが分からず草治は首を傾げる。その横でいつの間にかツヅリが黙々と白米を盛つていた。

鬼姫と赤蓮とツヅリと祖父と草治、家族全員がそろつた朝食。おかげは昨日の残り物であるが、どの料理も美味しい。湯気を出している。家族団欒の時間。

だが、その空氣は張り詰めたもので満ちているよう。草治には感じた。

先ほどから鬼姫は草治とは田も合わせようとせずそっぽを向いている。

ツヅリは無表情。

そして赤蓮はツヅリを赤井神社に上げてから口を聞いてくれない。勝手に他の神を領地に入れたからなのか草治が話しかけようとしても冷めた笑顔を向けてくるだけだ。

それから鈍感な祖父はそんな空氣に気がつかないのか上手そうに味噌汁を啜つてゐる。

「おお、うまい」

「そうか。今日はツヅリが味噌汁を作ってくれたんだ」

祖父の声に草治が頷き、ツヅリに視線を移す。彼女の表情は変わら

ない。ここに少しでも照れ笑いでもしてくれたらこの空気が良くなれるのだが。

それから何故かツヅリの横に座っていた鬼姫は獸のような形相で草治を睨みつけていた。その横では鬼姫と対照的な乾いた笑顔が赤蓮の顔に張り付いていた。

二人の様子がおかしくなったのは丁度、ツヅリが来てからだが、二人はツヅリに対し出てけとは言わない。むしろ一定の敬意すら払っているようにも草治には見えた。

「ところで草ちゃん」

「何だ。じいちゃん」

祖父の声に草治はツヅリ達から視線を外した。

草治とは違う生氣に満ちた目をした祖父が珍しく言いにくそうに口ごもっていた。

「あーその、来週に何があるか覚えているか

「覚えているよ。母さんの命日だる」

「覚えているならいいが

バツが悪そうに祖父が頭を搔く。

草治の母、祖父の娘の麻美が死んだのは随分も前だ。草治は良く知らないが飛行機での事故が原因だつたらしい。

「いずれにしろ、麻美の部屋は片付けたほうがいいぞ。あいつなら、化けて出てきてもおかしくない」

珍しく祖父がため息混じりにそんなことを言った。とてもではないが娘に対する評価では無い。

だが、赤蓮も祖父の言葉に何度も首を縦に振っている。

「それほどに、母親とはおつかないものなのですか？」

しみじみとした空氣の中、意外にもツヅリがそんなことを聞いてきた。真摯な瞳を草治に向けてきた。

あまり母親の記憶は草治には無いが、化けて出てくるようなおつかない人ではなかつたように感じる。

「あまり、覚えてないよ

「そうですか」

草治が肩をすくめて言つと、ツヅリは若干肩を落としたように見えた。気のせいかもしれない。

ツヅリから祖父に顔を戻して草治は尋ねた。

「じいちゃん、今日は夕飯はいるの？」

「ああ、今日はいらない」

祖父はたいてい大学での考古学でのフィールドワークとかで家にはいない。時には海外にまで足を伸ばし遺跡などを歩きまわっているようだ。本当に体力がある。

草治が呆れたような眼差しで祖父を眺めていると、赤井神社の呼び鈴が家に響いた。

「お客さん」

鬼姫と赤蓮が同時に呟いた。二人の反応に草治は嫌な予感がした。

家のドアを開く。草治は目の前の男を見て顔をひきつらせた。

「相変わらず何のひねりもなく芸術性が皆無の神社だ」

白髪の男、アララギが堂々と立っていた。アララギは遠慮が無い視線で草治をじろじろと眺める。

「相変わらず貴様からは邪氣を感じるな」

「邪な気、と言われたのは初めてだ。それで? 何の用だアララギ様。確かに、許可なく神が他神の土地に出入りしちゃいけないんだろ。ひとつと出てかないと払うよ」

草治は草治で乱暴な言葉使いで土地神にケンカを売る。  
不俱戴天な人間の言葉にアララギは目を細め草治の後ろへと視線を動かした。

「貴様の魔術師は教育がなつていないな。言葉も悪いし、勉学の成績も悪く、社交性も低いそうではないか。鬼姫」

「それは、私の魔術師ではない。一時的な魔術師代理だ。草治の子供ができるまでのな」

草治の後ろから渋い顔で鬼姫が歩いてきた。

鬼姫は草治とは目を合わせずアララギに近づいていく。

「今日はよく来てくれた、アララギの神よ。まずは上がりてくれ」

「ああ、御邪魔する」

「ちょっと待て！」

さくさくと話が進んでいく2つの神に草治が割り込んだ。

じとつとした瞳で草治はアララギと鬼姫を睨む。

「なんでアララギ様を簡単に家に入れるんだよ。勝手に他の神をここに入れてはいけないってツヅリの時にあれだけ反対していただる」

「そうだけど、アララギは別にいいのよ。どうでも」

「そうだぞ、草治君。私は昨日、鬼姫に呼ばれたのだよ。電話で」

「電話？」

神様が電話をつかっていたことに驚き、草治が大げさなリアクションをしてしまった。

だが、よく考えてみれば鬼姫は力が弱っているらしいので人間の機器に頼つてしまふのも仕方がないかもしれない。

「ホン、と咳払いをして草治は尋ねた。

「それで、どうしてアララギ様は呼ばれたの？」

「この娘のことですよ」

奥から、赤蓮がツヅリを連れて顔を出してきた。その顔はとても楽しそうだ。二人に続き、祖父も何事かとやつてきた。

赤蓮はツヅリの手を引っ張り鬼姫の横に並ぶ。

「この娘は、とても嫌な縁を持つています」

また鬼姫と赤蓮が言葉を重ねた。

赤蓮は心底嬉しそうに。鬼姫は心底腹立たしそうに。こうして見ると二人は姉妹にも見えた。

唖然とする草治を一瞥してからアララギはツヅリに不躾な視線をつけた。ツヅリは口を閉じて何も言わない。ただ眠そうで誰とも目を合わせようとしない。

「ああ、これは初めてみる魔法の色の竜だ」

アララギが感心するような声を出した。

草治はアララギの言葉に目を瞬かせる。

魔法の色、それは真っ黒の色をした魔法の源流から人間の世界へと取り出した時に成す種類のことだ。

ちなみに赤井家の神主の使う魔法の種類は赤。俗に赤い魔法と呼ばれるものだ。これは視覚的に赤色の魔法を使うというわけではない。とはいえ、このことは草治もよく知らない。魔法の色がいくつあるのか、赤い魔法とはどんなものなのか。また、アララギが言うツヅリの魔法の色のこと。

しかし、アララギは魔法の色のことは説明しようとはしなかった。ただ、笑みを深めていく。

「これは凄い、凄いよ。これはどに邪な竜を初めてみた」目を見開きアララギは狂人のようにツヅリを観察していく。人格が変わったかのような土地神の様子に草治は君の悪さを感じた。草治の祖父も若干引いている。

鬼姫と赤蓮だけが呆れたような視線を投げかけている。

「それで、その娘は何だ？」

今度は鬼姫だけがアララギに向けて口を開いた。

アララギはツヅリから目を離さない。

「私もよくは知らない。だが風のうわさで聞いたことがある。少し前、天竜王が海竜王に娘の竜を人質に送つたと。そしてその天竜王の娘は酷く面白い魔法の色を備えているとか」

「その通りです」

ここでツヅリが眠そうな顔を上げて言った。次にツヅリは草治を真直ぐに見つめる。

「その通りです。ツヅリは家出をしてきたのではありません。逃げてきたのです。海の竜達から」

ツヅリが淡々と告げた。彼女の眠そだつた瞳が細められた。

「ツヅリは人質として海の底に幽閉されていました。あそこは何も

することができませんでした。だから夢を見ることが唯一の楽しみでした。その中で一番楽しかった夢は父上と母上に抱きあげてもらう夢です。幸せな夢でした。ツヅリは幼いころから人質と育つたのでよく父上と母上のこととは覚えていません。だから一度でいいから父上と母上に会いたいと思うようになりました」

ツヅリは言葉を切った。一息の間、沈黙が訪れた。

「草治様、どうかツヅリを父上と母上のもとまで連れて行ってはくれませんか」

「ああ、いいよ」

「絶対に駄目です」「

嘆願するようなツヅリの声の後、草治が了承する言葉と鬼姫と赤蓮の拒否を示す言葉が交錯した。

「草治！お前は竜のことを何も知らない癖に安請け合いをするな。今までの相手は全て人間だつたからよかつたのよ。でも今度はヤバイ。下手をしたら海竜王と天竜王を同時に敵にまわすことになる！」悲鳴に近い声で鬼姫が叫んだ。必死な鬼姫の態度に草治も言葉も詰まる。

鬼姫は突き刺さるように草治を睨んでいた。

「まあ、そのくらいにしてはくれませんかね。鬼姫様」

呑気な声で祖父である源蔵が鬼姫に歩み寄っていく。

「貴方も分かつていいでしょう？草治は麻美の息子なのです。あの子に似てオツムが弱いのです。だから何を言つても無駄ですよ」

「知っている！赤井の一族はどいつもこいつも無知な癖に危ないことに手を出そうとする。私はいつもそのしりぬぐいをさせられてきた。だが今回は危なすぎる」

「そう言わないでください。赤井神社のもつとうは困ったモノが来たら全力で手を伸ばすことなのではないですか」

「しかし、明らかに無理なことをするのは馬鹿げてる」

「ええ、ですから天竜王がどうのこうどらは置いておいて、とりあ

えずもう少し様子を見てみましょう」

源蔵は慣れた調子で鬼姫に語りかけた。

鬼姫は不承不承といったぐあいで頷いた。

鬼姫の横で赤蓮が笑顔を源蔵に向ける。

「さすがは、赤井神社の神主を4代に渡つて過ごしただけはありますね」

赤井神社の神主の4代、草治とその母である麻美と源蔵の妻とその親のことだ。

赤井の血を継いではいないが赤井神社について最も詳しい人間は源蔵だ。

「君たちもそれで良いかな?」

源蔵は草治とアララギとツヅリに聞いてきた。

ツヅリはうなずいた。

「要するに海龍王の追つてがここに来るのが早いが、もしくは天竜王の迎えがここに来るのが早いかということですね」  
賭けごとをしているようで面白いです、ツヅリは最後に呟いた。

## 青き竜の訪問

最初は、まだ夜なんだと思つた。

それほどに眼の前は真っ暗だつた。

いつもならカーテンの隙間から少しくらいなら光が入つてくるのに。ただ、ただ黒い景色しかない。彼はこの色を知つていた。

「魔法の源流の色と似ているな」

呟いた途端、背筋にぞつと冷たいものを感じた。それほどに眼の前の光景は恐怖を彼に感じさせた。

死を表現した景色。無を表現したかのような景色。いくらでも言い方は在るが、とにかく分かるところは彼はここに居て良い存在では無い。

「そうですね。ここは魔法の本体に近い場所ですから」

声がした。ビクリと身体を震わせて声の主を探す。彼の横にツヅリが寝転んでいた。ツヅリは仰向けのまま彼を一瞥した。

「ようこそ、ツヅリの家に。旅のお方。何もおもてなし出来ませんが」

ツヅリは右手を掴み草治の腕を引っ張つた。

良く見ると彼女の首には物々しい首輪がはめられていた。鎖から伸びた長い長い灰色の鎖は地面へと繋がっていた。寝むそうな瞳を細めてツヅリは草治を見つめてきた。

ツヅリは、監禁されていた。これが彼女がいつか言つていた海の底なのだろうか。

「お前は、どうしてここで鎖を繋がれているんだ?」

「それは、父上と母上のためです。天竜族と海竜族が友好に暮らしていくために、ツヅリは海竜王の人質としてここにいるのです」珍しく、ツヅリは自慢するような口調で言った。

天竜だの、海竜の関係は云々は草治はよく知らない。だが、今のツ

ヅリの監禁状態を見ると一つの龍族は仲が良くないことだけは分かつた。おそらく、天竜王とやらが天竜達に何かをしようとした場合、ツヅリに危害を加えるのだろう。

「一人で寂しくは無いのか？」

「ええ、寂しくはありません。だつてツヅリが『いつある』ことで天竜族の皆が幸せになるのだから」

きつぱりとした口調でツヅリは言った。その健気な様子に草治は胸に迫るものを感じた。

何としてもこの少女を父親と母親のところまで連れて行つてあげよう。草治の口が自然と動く。

「君はとても、」

「君はとても立派だな」

そう言つた時、眼の前は真つ暗ではなかつた。

いつの間にか見慣れた、草治の部屋の夜の光景だつた。天井から視線をずらしていきカーテンから電灯の光がわずかだが差し込むのを眺める。

「父上、母上」

突然、草治の腕がぐいっと引っ張られた。驚いて腕を引っ張つくる主を見る。ツヅリが布団の中で穏やかな顔で目を閉じて草治の腕を掴んでいる。ツヅリは草治の部屋の隣を宛がつてあるのだが、いつの間にか彼女は時々草治の横に来ては寝ているときが多い。

その所為で鬼姫からは口リコンと蔑まれているのだが。

「ツヅリは、一人でも寂しくありませんよ。だから安心して下さい、父上、母上」

寝言だろうか、ツヅリの口から言葉が漏れた。

草治はツヅリの頭を軽く撫でた。

「お前も安心するといい。俺達がお前を両親に会わせてやるから」

先日からツヅリを庇うるかについては赤井神社では頻繁に議論さ

れている。

ツヅリが言うには、彼女は天竜王に人質として過ごしていたところ、突然その拘束が解けた。理由は分からなかつたらしい。本当は天竜達に告げなければいけないとこらだが、父親と母親に会える機会はこれからずつと先も今しかない。だから、彼女は逃げたと話した。ひとまず、アララギが天竜王にツヅリと会うために動いてもらつている。その間、ツヅリは目立つ行動は控えようという方針だ。

「仲がよろしいですねえ」

フワリと、赤蓮が草治の前に姿を現した。この少女は実体があるのに幽靈を名乗つている不思議な少女だった。

赤蓮が少しむつとした顔で草治を見下ろしている。だが、不機嫌そうな顔もすぐに一転し笑顔へと変わる。ツヅリと違った表情豊かな少女だ。

「お客さんですよ、ご主人様。赤井神社の神主様、いえ赤井神社の魔術師としてお出迎えしなければいけませんよ」

赤蓮が歌うように言って草治に赤井の剣を差しだしてきた。草治の中でこれから起こることへの不安が広がつた。

赤井神社の鳥居へと続く長い石の階段を、一人の男が登つていた。異様な風体の男だ。青い髪に鱗で覆われた肌。そして狐のように吊りあがつた瞳は鳥居の下で立つてゐる一人の少年を向いてゐる。少年、赤井草治の手元には物々しい剣が握られている。

「アンタは何者だ？」

少年に聞かれ、男は顔が裂けるほど口元を吊りあげた。

「俺は海竜族のレンメイというものだ。夜分遅くにわりいが、御邪魔させてもらひづぜ」

レンメイの自己紹介に草治は眉を顰めた。海竜、つまりはツヅリを監禁している一族。

「今日は遅い。また今度にしてくれないか」

「そつもいかねえよ。ここに居るんだろう？天竜王の娘が。俺はアレの見張りをやつてたから分かるんだよ。アレの魔法の痕跡がここにある」

男が嫌らしい笑みを浮かべてきた。

草治はその笑みに嫌悪の印象を抱いた。それでも落ち付いて草治は頭を整理する。まずは友好的に話しかけるのがよいだろう。

「そうだ。ここにツヅリは居る。でも、少し待ってはくれないか。ツヅリは両親と会いたがっている。女の子がずっと海の底にいるのは可哀そだ。だから、」

「はあ？」

草治の切実な説得をレンメイは遮った。男は顔を怒りに歪ませていた。

「アレを天竜王に会わせるだと？そしたら、見張り役の俺はどうなる？下手したら殺されるんだぞ」

「でも、」

「うつぜえ。お前は人間で俺は竜。竜が人間に従う道理がどこにある？」

そう言つてレンメイは不気味な笑みを浮かべた。

草治は男の笑みを見て、剣を握る手に力を込めた。

彼は知つてゐる。神の性格を。竜も神と似た性格なのだろう。だから分かつた。男は草治を虫けらほどにしか思つていない。そして虫けらが彼の道を塞いだのだ、次にレンメイがどうするかは明白。レンメイの髪が逆立つていく。

草治は剣を抜いた。

『 結局、こうなりますか。勝ち田があるとは思えないんですけどね』

すでに赤蓮は草治の中に溶け込んでいた。

その時、草治の首筋に冷たいものが落ちてきた。  
雨だ。

『魔法の雨です』

「この雨は、俺の魔法で生み出したこの街を覆っている。この魔法があるかぎり俺は何をしても人間達には気がつかれない」

レンメイが残忍な笑みを浮かべているのを見て、草治は慄然とした。今まで様々な魔法を見てきたが、これほどの規模の魔法は初めてだった。

雨の勢いが増していく。バケツをひっくり返したという表現が相応しいほどの大雨へと変化していく。

「少しさせらよ、赤い魔法の使い手」

レンメイの手元へと周囲の雨が集まり出した。集まつた水はまるで生き物のようにくねくねと動きながら伸びていく。そうして彼の手元へと電柱の如き大きな水の槍が出来あがるのを草治は茫然として眺めた。

## 竜との戦い

雨の音は真夜中の全ての音をかき消す勢いで周囲を満たしている。これほどの雨では外に出ようと思う者は少ないだろう。そんな中、傘もささずに対峙する一つの人影があった。

レンメイと名乗った青い鱗を持つた男は水柱を軽々と持ち上げて、二タリと氣色の悪い笑みを浮かべた。水柱を天高く掲げ、男は振り下ろした。しかしそれは草治に向けられたものではなかった。階段の両脇の急斜面に叩き落とされた。

水柱によって斜面から大量の土が抉られた。

レンメイは薄笑いで草治の様子を見て楽しんでいる。あんなものを見たまでもない。

『あの水柱も魔法なので、赤井の剣には効きません。ですが』  
「分かっている。この剣の能力は奥の手だ。ここぞという時に使うべきだな」

草治が軽く頷く。その瞳に恐れは無い。剣が人の姿をした竜の喉元へと向けられる。

「神話の世に近しい時代の勇者や英雄ならばともかく、人が竜に剣を向けるとは。愚かだなあ」

叩きつけた水柱をレンメイは再び持ち上げた。

巨大な魔法に目を逸らさずに草治は剣に力を込める。

草治の退く意思が無い瞳を受けて、レンメイは笑みを深める。

「だが、嬉しいねえ。面白いねえ。お前は面白い人間だ。今の御時世、人間も神も全員話し合いでしか物事を決めようとしない。神も他の神から疎外されるのを恐れて大っぴらには暴れることはしない、そんなお利口さんばかりだ。やっぱり、分かりあうためにはお互いの魔法をぶつけて命を取り合うのが一番だよなあ」  
レンメイが陶酔した口調で語りかける。

力のあるモノ達は戦いに飢えている。鬼姫もそうだった。草治は言葉で語るのが上手では無い。だから、彼も己を伝えるために剣を構えている。

一つの殺気が頂点に達した時、レンメイが水柱を草治に振り下ろした。

車など軽々と粉碎できるほどの魔法の槍に対し、草治は剣の先端を掲げた。

そして迫りくる水柱が草治の剣の間合いに入つた刹那。細長い水の棒の右横に剣を滑り込ませ、そのまま巧みに剣を左に引いて水柱の軌道を流した。

水柱は草治の左に落ち、石の階段を粉碎した。石の破片が飛び散ることを歯牙にもかけず、雨によつて足場の悪さも気にせずレンメイへと向かつて草治は階段を飛び降りた。

リーチが長い武器を相手にする場合、そのリーチに入つてしまえばいい。それならばカウンターを狙われる危険も少ない。

竜の力のほどは草治には分からないからこそ相手の底がある程度知れるまでは剣の機能は使わないほうがいい。そして、そうなると草治に残された戦術は魔法無しの剣技しか無い。

レンメイは不敵な笑みで落ちてきた草治を見ていた。彼は水柱から手を離し、また別の武器を作る為か再び周囲の水を集め出している。『竜族は少し斬られても死ぬことはありません。だから斬つて下さい』

「分かつていい」

草治は上段から剣を叩きこんだ。時を同じくして、レンメイも右手を掲げ現在進行中で作成されている水の魔法を草治へと伸ばす。水の魔法は細長く、鋭利に尖つていきこちらも剣が完成する。

二つの剣がぶつかり、鉄と鉄がぶつかる音が雨の音を吹き飛ばす。刀身も柄も青い西洋風の剣がレンメイの右手に握られている。

レンメイが腕を振るい、草治を吹き飛ばす。

音もなく草治は鳥居の下へと着地する。

『もとは水とはいえ、硬度は下手したら普通の鉄よりも硬いかもしれませんよ』

「だが、まだ大丈夫だ」

言いながら息を整えようとする。

しかし、レンメイはその時間すらも『えない。レンメイは階段を駆け上がり草治に向かって剣を振るう。

たまらず草治は後退しながらレンメイの剣の嵐を防いでいく。

「これが人間の戦の仕方なのだろう?」

嘲笑い、レンメイは剣を浴びせかける。竜の怪力のためか、その一つ一つはとんでもなく重たい。

草治はレンメイの動きを視界に収め、時に斬撃を受け流し、時に剣の閃光から身をずらす。

『ああ、結局赤井神社へと入つてしましましたかー』

赤蓮が間の抜けた声を出すが後退を続ける草治にはそんな余裕はない。

レンメイと草治の周囲で水しぶきを上げる。

その戦いは神々しいものがあった。

竜と人間は踊るように剣を振るい続ける。

「は、ははははははは

竜が笑い声を上げていた。

だがそこには隙は無い。

「なあ、昔話で言つなら、俺は悪い竜でお前は捕えられた姫を助ける勇敢な魔術師といつとこりうか?」

レンメイの質問に草治は答えない。答えている暇が無い。もう、彼には本当に余裕が無かつた。それほどに竜の剣技は凄まじい。

水の剣が真横から草治の胴体を狙い定める。すかさず草治が上半身を捻つて飛び上がった。直後足元すれすれの位置を青き刀身が通過した。

草治は空中で見事な一回転を魅せる。

草治と共に赤井の剣も見事な弧を描く。赤い軌跡を空間に残していく。

「魔法の源流、だと?」

レンメイは目を見開き、その光景を見ていた。

草治の近くを満たす雨の魔法も水の剣の魔法もその全てが草治の剣によって広げられた魔法の源流へと一瞬で吸い込まれていく。

驚愕したレンメイに訪れる僅かな隙。

それを見逃さずに空中で勢いをつけた草治は剣でレンメイを真横に斬りつけた。

まるで水を斬ったかのような感触。ぱしゃりという音がしてレンメイから水しぶきが舞い上がった。

「え?」

驚きの声を上げる草治。そしてそれを見て氣味の悪い笑みを受けるレンメイ。

レンメイは拳を固め、草治へと向かって叩きつけた。

草治はまたもや吹き飛ばされ赤井神社の境内で受け身を取つて転がる。

せき込み、草治は息を切らす。

それでも剣を強く握り締める。はやく立たないと、殺される。

「そこまでだ」

突如、この神社の主を自称する鬼姫の声が響き渡った。

鬼姫は神社の前に立っていた。その横ではツヅリも立っている。

「そこまでだ。天竜が来る前に海竜に見つかった。私達いできることはもう無い。この茶番も終わりだ」

厳しい口調で鬼姫がそう言った。草治は反論できない。

草治とツヅリは鬼姫たちと一つの約束していた。

「竜族のうちどちらか一方でもこの神社に入つたほうにツヅリを引き渡す、そういう約束でしたよね」

ツヅリが肩をすくめて言った。少しも落胆しているようには見えないが、その心は深い悲しみがあるのだろうと草治は感じた。思わず歯を食いしばる。

『別に、貴方にとつてもツヅリさんにとって今までどうりの生活に戻るだけです。』主人様が悔やむことではありません』

赤蓮が慰めるようなことを言つてきた。だが草治はその言葉に納得できなかつた。

ツヅリはこれからずっと一人での暗い世界に閉じ込められるのだろうか。

『竜族と人間の感覚は違います。むしろ、魔法の源流に近しい世界は竜族にとつては望ましいとかんじるモノの方が多いと思いますよ』草治の頭でまたもや赤蓮の言葉が聞こえてきた。草治は何も言わず剣から力を抜いた。

赤蓮の言葉をうのみにするわけではないが、今の彼にはどうしようできない。

ツヅリがゆつくりとレンメイへと歩き出す姿を黙つて見届ける。

「なんだ、意外に従順だな」

毒氣を抜かれたと言わんばかりにレンメイは呆れたように言った。近づいてくるツヅリにレンメイは不思議そうな顔すら向ける。

『俺はお前が海の底から逃げたことが分かつた時、お前が天竜族に復讐にでもしにいくとでも思つていたんだが、どうやらお前は天竜族にはそれほど恨みが無いようだな』

レンメイの言葉をツヅリは鼻で笑つた。

草治にも彼女の言わんとすることは理解できた。何故なら彼女は天竜族を愛しているから。

毅然とした態度でツヅリが口を開く。

『確かにツヅリが海底で天竜王の人質となることは楽しいことではありません。しかしそうすることで天竜と海竜は友好的に過ごすこ

とができるのです。むしろ私はこの役目には誇りすら持っています

「ああ？」

ツヅリの答えに対してもレンメイは目を丸くした。

じろじろとツヅリを見まし、次の瞬間、腹を抱えた。

「くつはははははははははは」

再びレンメイが笑いだした。

今の話のどこに笑いの要素があったのかと呆れた視線を草治は向ける。先ほども草治との剣と剣のぶつかり合いで大笑いしていたしここがレンメイは周囲の視線が気にならないのか爆笑を続ける。

「あ、ははははは。お前とは話をしたことがなかつたが、ずっと不思議だつたんだ。どうしておとなしく捕まっているのかと」

「だから、ツヅリはこの役目を誇りに思つていてると言つていいと言つています。ツヅリの他にこの役目は務まらないとみんな言つてました」

少し語氣を強めてツヅリが言つた。

それからレンメイはひとりしり笑い終えたのか顔を上げる。

半笑いのまま彼はツヅリへと細められた瞳を向けた。

「お前は勘違いしているぞ。お前は、人質として天竜王へと預けられたのではない。ただ、邪魔だから天竜王はすてただけだ」

その時、ツヅリの表情がこわばるのを草治は見た。

## 黒き竜

場所は移り替わり、豪勢な間。天竜寺財閥の会長である天竜寺明久は風格のある男だ。切れめの瞳に張りのある髪をオールバックにして整えている。巨大な窓ガラスの向こうに広がる雨の景色をみていた。

「これは、雨じゃないな」

明久は一人呟いた。

彼は『ヤオヨロズ』という魔人搜索のメンバーの一人でもあるため、不自然な現象については鼻が利く。

「魔法の雨、というところか。しかし、並の魔人では無いな。規模が巨大すぎるぞ。また面倒なことになっているんじゃないだろうな」明久は後に立つ、ここには居てはいけない男に話しかけた。

「ああ、とてつもなく面倒なことになっている。我ら神々と、お前達『ヤオヨロズ』の存在すら揺るがすような事態だ」

白髪の男、アララギは厳めしい口調で答えた。

アララギも一応は『ヤオヨロズ』から視れば魔人の分類に分けられる。つまりはアララギも標的の一人なのだが、彼には危機感は全くない。

その様子に明久は軽く息を吐いた。

「君がここに来ること事態が、面倒なのがね」

「大丈夫さ。私も並の神では無いからね」

「それは知っているさ。それでもなければ、私は君と密かに癒着しないさ」

「ああ、そうだね。私達、神々はお前達『ヤオヨロズ』の上層部には感謝しているよ。何だからんで時に神を保護し、時に神の存在を隠してくれる」

「感謝される覚えはないさ。力のある神に手を出せば私達『ヤオヨロズ』もタダではすまないからね」

『ヤオヨロズ』の多くの者は、全ての異質な存在を集めることを目的としている。だが、手を出してよい異質な存在と手を出してはいけない存在があることを知っている。だからこそ、その分別がある。『ヤオヨロズ』の上層部の者は手を出してはいけない異質な存在と裏で通じていて。

このことは部下であり、戸籍上は養子となつてゐる天竜寺妃達は知らない。

明久は彼女達が手を出してはいけないモノと鉢合させしないようにも注意している。

「それで？結局、この雨は何なのだ？」

「まあ、人払いの魔法の一種だよ。私もよく知らないが、おそらく明久殿、お前にはまた工面してもらうことになりそうだ」アララギは申し訳なさそうな顔を浮かべた。

雨は降り続く。

「ツヅリが、父上達に捨てられた？そんなことがあるものか！」

吠えるような勢いでツヅリが叫んだ。

ツヅリの声は草治の心へと入り込む。彼はツヅリがどれほど両親のことを思つているのかを知つていたから。

レンメイはツヅリの反応に口元を吊り上げた。

「本当だぜ。だつてお前の存在は異常すぎるんだよ」

「異常？」

「お前は魔法の源流の色を濃く受けすぎた。魔法の源流は全知全能を所有し、我らの母なる存在でもあるが、その存在自体は忌み嫌われた『死』を意味する力だ。だからお前は捨てられたんだ」

高笑いするレンメイは吐き捨てる。

ツヅリはそれを受け入れるのを拒むように首を振る。

ところがツヅリに向かつて鬼姫が首を振る。

「その青い竜の言葉は間違っていない。ツヅリは、魔法の源流の一部と言つても良い。魔法はある程度ろ過されないとこの世界にひとつは危険すぎるんだ」

鬼姫も容赦なく言った。

ツヅリは更に青ざめ、首を振るのを止めた。

敵対しているはずの海竜族に言われるのならまだしも、神である鬼姫の言葉はツヅリに重たく響いたようだつた。

草治も鬼姫の言葉を否定できなかつた。彼自身も魔法の源流というものを垣間見ているから知つていた。魔法の全て、それはあらゆる知識、力、命、存在の全てがゴチャゴチャにグチャグチャに混ざりあい全知全能でありながら死の気配を含んでいるのだ。

草治も、魔法の源流が怖ろしいと思つた。

「そんな、父上と母上はそんなこと一言も言つてなかつた

「それはお前を不憫に思つたからだろ」

鬼姫がいくらか険を顰めた。

彼女は彼女でツヅリのことに同情しているようではあった。けれどもその優しさはツヅリには届かない。そして、更に彼女の心を切り刻む言葉が飛んでくる。

「いいや、違うよ。天竜族達はお前が怒り狂つのが怖かつたからだよ。お前が恐ろしかつたんだよ。だから、天竜はみんな優しい顔を張り着けてお前に接していたんだよ」

嘲笑い、嘲笑し、レンメイが言った。

レンメイは雨が降り続く曇り空へと両手を広げた。

「でも、海竜族は違う。ただ魔法の量が巨大な一族では無い。俺達は、どんな呪いも魔法をも撥ね退ける巧みな魔法の技術がある。だから、天竜王は海竜王にお前というイカレタ竜を殺すのを頼み込んだんだ」

不気味な笑みが顔に広がっていく。

「でも、お前の魔法は俺達にとつても危険すぎたんだよ。だから、お前みたいなのは海底で永遠を生きるのが正しいんだよ」

暗い笑みでレンメイが言った。

そしてその顔を見て、ツヅリの顔にも暗い笑みが生まれた。まるでレンメイの表情が伝染したかのように。

息を殺し、ツヅリが俯いて笑い声を漏らし出した。

「ああ、よかつた。そうですか、ツヅリは皆にとつて邪魔だったのですね。人質ではなかつたのですね」

声も暗い。

「それではもう、我慢する必要はありません。もう、何をしても父上にも母上にも天竜族のみんなにも迷惑はかかるないのですね」今までずっと眠そうな顔をしていたツヅリであつたが、壊れたような、妖しい笑みで彼女は言う。

レンメイはツヅリの言葉に怪訝そうな顔を作つた。

鬼姫も眉を顰める。

ツヅリの身体を真黒の魔法陣が取り巻いた。

その魔法の色と構成を観て、鬼姫と草治は絶句し、レンメイは顔を引きつらせた。

「どうして、お前は魔法が使えるんだ?・封じられているはずじゃないのか?」

「つは。まさか、貴方達の魔法でツヅリの力を封じることが出来ていたと思つてたのですか?」

ツヅリが噴き出しながら言うと同時に、彼女を取り巻いていた魔法陣から黒い火が溢れだした。黒い炎はツヅリに引火し、彼女に燃え盛つた。

炎はツヅリの色を黒色に変えていく。

黒い炎はのびあがり、天へと登る。

炎の先が二つに裂け、巨大な竜の頭が生まれ、次第に黒い竜の姿を造つていく。

あらゆる魔法の流派においても、竜を模倣した魔法は最高位のものとして崇められている。以前も、天竜寺円治という青年が竜に近い

炎の蛇の魔法を使ったことがあった。竜という存在 자체が魔法から生まれ、意思を得た超精密構成の魔法的存在だ。だからこそ、人間達も竜の魔法を真似しやすいのかもしれない。

その中でも黒い竜の魔法は人が生まれて以来、数人の魔術師しか使える者はいなかつた。そして眼の前で、黒き竜の魔法の原型が赤井神社の上空で咆哮を上げた。

黒き竜はそのおぞましいアギトから黒い炎の塊を吐きだした。いや、黒い炎では無い。魔法の源流そのものの塊が赤井神社めがけて放たれた。

耳をつんざく爆撃音が神社に落ちる前。鬼姫から黄金の粉が飛び散る。

鬼姫は化け物染みた跳躍で草治を抱え、空高く飛び上がった。

雨音をかき消す黒い爆音の中、とり残されたレンメイの悲鳴が草治の耳に聞こえてきた。

空を駆ける鬼姫に抱えられ、草治が真下を俯瞰すると神社にポカリと大きく深い穴が空いていた。最初からそこに何も無かつたように大地が消えている。草治は慄然として身体を強張らせる。

鬼姫は鬼姫で己の寝床を壊され、怒りで顔を強張らせる。

「よくも、よくも私の神社を」

目を闇欄と光らせ、鬼姫が黒き竜へと成つたツヅリを睨む。

鬼姫の怒氣を受け、赤井神社とその背後に佇む赤井の山から一斉に黄金の光の粒が飛び立つた。赤井神社の景色が黄金に染まる。その光の粒の一つ一つは小説の文字ほどの大きさの魔法の文字。魔法を良く知る者ならばこの魔法を観ておののくだろう。黄金の魔法が未だに生きているのだから。

黒い竜からはツヅリのような静かな気配は無かつた。むしろその瞳は知性の欠片すら感じられない。飢えた瞳で草治と鬼姫を睨んでいる。

黒き竜は禍々しき魔法の身体を携え、鬼の姫は黄金の魔法を纏い対

峙する。

前代未聞、互いに異端の中の異端な竜と鬼の闘いが幕を開けた。

## 黄金の魔法と暗黒の魔法

赤井神社の上空。

雨雲を突き破り、竜と鬼は澄みわたる夜空へと舞い上がる。

黒き竜は雨雲の上にどしりと座した。

草治は鬼姫の背に負ふさり、彼女の角を掴んで態勢を整える。いつもなら角を掴むと騒ぎ出すのだがさすがに今は何も言わずに竜を睨んでいる。

「あの娘、だんだん魔法の量が増している。暴走しているのか」

鬼姫が舌打ちをした。

黒い竜は時間が立つにつれて大きくなっているということは草治も感じていた。つまり、あまり時間をかけて闘うのは上策では無いのだろう。

暗黒を纏つ竜が獰猛な口を開いた。周囲に黒い、黒い球体が造られていく。その魔法の球を見て草治は息を飲む。

『あの魔法はやばいです。かなり源流に近い構成になっていますよ』

赤蓮の能天気な声が救いだつた。

それほどに竜の口から禍々しい気配が漂つてゐる。

そして竜は上空を飛来する鬼姫に照準を合わせ、その黒い魔法を発射した。

その様は竜の形をした砲のようでもあった。爆音と共に黒い弾丸が迫る。黒い砲弾自体がそこらへんに聳えるビルよりも大きい。

『純粹な黒い魔法に少しでも触れば、人間の身体は消えてしまうでしょう。ですから気をつけて下さいね』

切羽詰まらない赤蓮の言葉。

だが、これほど大きく速く高精度な魔法は赤井の剣で対処できる気がしない。

『ええ、実際のところ本当に大きな亀裂を剣で造らないと吸い込め

ないですよ』

「役に立たないね。アンタ達」

赤蓮と草治が頭の中で会話をしていると、鬼姫が声をはさんだ。彼女にも赤蓮の声が聞えるらしかった。さすがは半身同士といつところか。

目前に迫った暗黒の弾丸に対して黄金の光の壁を鬼姫は造る。鬼姫は暗黒の方へと両手を開く。

「バラバラにしてやるわ」

鬼姫も、鬼の名に相応しく妖しい笑みを見せて己の魔法を振るつた。暗黒と黄金がぶつかり合つた。

二つの魔法を眼の前で感じ、草治は対照的だと思った。

鬼姫が使役する黄金の光は魔法という存在を極限まで分解した力。竜が司る暗黒は魔法という存在を極限まで組み合わせた力。

理論的に考えると、鬼姫にとって暗黒の魔法は最も分解する量が多い魔法だ。

つまり、鬼姫の方が不利なのではないか。

だが、以外にも暗黒と黄金の魔法は触れ合つた途端、反発し合つたのかお互いに消しとんだ。どちらも同等分の魔法量が、痛み分けするように消えている。

魔法のレベルとしては同じなのかもしれない。

『いえ、私達が不利です』

「ああ、私達に勝ち目は無い。ツヅリを視ろ」

鬼姫が黒き竜を指し示す。竜のアギトからは再び暗黒の球が造られつつあった。

「あいつはいつも簡単に暗黒を造れるが、私は自分の鬼火を呼び出すのにけつこうな時間がかかる。先ほど消された鬼火を復活させようとするにも数時間はかかる」

鬼姫は自分の光を鬼火と表現しているが、眩い光は神々しく美しい。今も彼女の周りには赤井神社の敷地を覆い尽くせるほどの膨大な光が付き従っている。

しかし、その光も簡単に暗黒に消されてしまうとなると。

「結論を言つと、長期戦だと本当に勝ち目は無いということだな。でも、どうやって倒す」

草治が聞く。黒い竜の本体も純度は低いのかもしれないが巨大な暗黒の魔法なのだ。近付くことすら危険だ。

すると赤蓮がそれに答えた。

『それは大丈夫です。赤井の剣でツヅリさんが纏う暗黒を吸い取るのです』

「あんな大量の暗黒をどうやって吸い込むんだ？」

『あの竜を構成する核に剣を当てれば、あるいは』

「核？」

『そうです。核というか魔法陣のことですけど、それを壊せばたいていの魔法は壊れます。あの、アララギさんが居た異空間のように』

以前、草治は巨大な異空間を造つていた魔法の全てを壊したことがあった。その決め手となつたのは異空間を生み出していた魔法陣といふ核を壊しからに他ならない。

妙に納得するのを感じた。

「それで核つてどこだ？」

『さて、私的には彼女の頭を構成する魔法が偏つてゐるようには感じられるので多分そこかと』

赤蓮に言われ草治は竜の額を覗たが特に変化があるようには感じなかつた。草治の魔法を見る力はそれほど高くはないため彼女を信じてみるとしかないのでだが。

問題はどうやって近付くか。

草治はひとまず思考を止めた。なぜなら、黒い竜の口から再び砲弾が完成していったから。しかも4つも。その替わり、一発の大きさはそれほど大きくない。

「来るぞ」

草治が声を張った。

鬼はすぐさま空中で身を横に滑らせる。鬼姫は足元に黄金の波紋を残して水平に移動して離れる。

龍から黒い球が一発ずつ発射されていく。一発目の弾丸は鬼姫のすれすれを掠める。黒い魔法を身近で感じた草治の心臓が跳ね上がった。あまりにも禍々しい力を感じたのだ。

鬼姫も速度を上げて空を飛来する。あまりの速さに草治は息すら出来ない。

空を縦横無尽に鬼姫は駆け、2発目、3発目の弾丸を巧みに避けていく。

だが、草治達の前に4発目の黒い弾丸が目前まで迫り来るのに気がついた。空のどこに動いても避けることが出来ない。

『この大きさなら問題ありません。斬つて下さい』

草治は剣を振るつた。血と同じ色の亀裂が空間に入り、その亀裂から黒い世界が現れる。

すれすれまで迫っていた丸太のような大きさの弾丸を草治の暗黒は口を開けて暗黒を吸い込もうとした。

ところが暗黒の魔法の威力、速さと量は赤蓮の予想を上回つていた。およそ半分もの暗黒は亀裂に吸い込まれることなく、鬼姫と草治に襲いかかつた。

「ああ、つもう」

鬼姫が舌唇を噛み、黄金の光で残りの暗黒を相殺した。

「また、減つたじゃん。どうするのよ」

相殺された鬼火に目を細めて鬼姫が不平を言つてくる。

再び、龍から無数の弾丸の壁が放たれた。鬼は空を掛けながら弾丸をすれすれでかわす。時には大きい雲に隠れ、その雲も弾丸に吹き飛ばされる。鬼姫は自身の鬼火を浪費して直撃コースの弾丸を防ぐ。まさに防戦一方。

「何か遠距離から出来る攻撃ないの？」

草治が怒鳴る。

「アホが。鬼の私は基本的に肉弾戦しかしない」

鬼も怒鳴り返した。逃げるしかできない所為か一人とも機嫌が悪い。

『いやいや、一つだけありますよ』

赤蓮の声に鬼姫は訝しげな顔を造りながら空を蹴つて暗黒から逃げる。どうやら彼女にも心当たりが無いようだった。

『ほら、アレですよ。ご主人様との連携プレーにして一発限りの最強最大の一撃必殺』

そんなことを言われて草治も首を傾げた。だが今度は鬼姫も得心がいったのか、ああと頷いた。

「なるほど。そういうことか」

「何があるか？あるならすぐにやつてくれ。弾丸が掠めていくのは本当に心臓に悪い」

草治が切羽詰まつた声で言つた。鬼姫は空で一度静止して黒龍を見下ろした。

「分かった。やるよ」

そう言つて鬼姫は竜に向けて急転直下し出した。

空を金色へと変えるほどの光の群れは鬼姫を包みこむ。

対して黒き竜は迎え撃たんとばかりに巨大な暗黒の塊を打ち出した。大量に光を纏つた鬼姫とそれと同等のスケールの暗黒がぶつかり合う。

暗黒は全てを無にするために、黄金の群れは全てを分解するために。結果、暗黒と黄金は相殺し合い消えていった。

黄金の光が剥がれた鬼姫はそれでも竜に向けて直進する。黒き竜も再び砲弾を造らんと口を開いた。がはずれているのではと思えるほど開いていた。

竜との距離まであと数秒。

というところで竜から再び巨大な暗黒が吐き出された。

だが鬼姫のもとに集まり出した黄金の光は彼女の付近を取り巻く程

度で本当に微小しか残っていない。

その時、鬼姫が草治の腕を掴んできた。

-  
h?  
L

草治が何をするのか尋ねる時間は無かった。

鬼姫は撃ち出された暗黒から逃れようと真横に軌道をかえようと空を蹴った。

鬼姫は垂直に曲がることは成功し、黒い弾丸の半径よりも遠くへと鬼姫は空を駆ける。しかし、暗黒の有効範囲の外に出ることは出来なかつた。

あと一躍二と三と四で暗黒は捕まつたのだ。  
それでも。

「なめるなああ」

鬼姫が叫び、黄金を纏う右拳で暗黒を殴りつけた。暗黒の端っこに人一人分の穴が生まれた。もともと端の方の厚みが少なかつたのだ。そして鬼姫は左手に力を込める。

一  
いづけええええええええええええええ

『さやははははははは』

鬼の怒声と赤蓮の爆笑が草治の頭の中で重なる。

草治も叫び声を上げながら暗黒の魔法を通過した。

鬼姫の怪力によつて加速落下している草治へと、竜が暗黒を吐きだす時間は無かつた。

現性の久月モ感しシ林なし音の眼  
彼女は今何を思つてゐるのだろうか。

今は、分からぬ。言葉では届かない。異形な存在と対話するには  
魔法を使うのが一番効率良い。

竜の頭と草治の距離はおよそ刀身一つ分。

完璧な間合いで近づき、

草治は竜の額へと剣を突き刺した。どぶ沼へと剣が入るような感触のあと、何か硬いものを突き破ったのを感じた。

『ビンゴです。核を壊しました』

黒い鱗から血がにじみ出る様に、赤い亀裂が入っていく。

『この竜の身体を一つの魔法と考えて下さい』

赤蓮の助言に従い、草治は頭の中で強くイメージする。黒い竜がもとの世界に帰されるように。

亀裂は竜の身体中に広がっていき、その幅を広げていく。

そして、暗黒の竜の身体が、ぐにゅりと音を立て粘土のように崩れ出した。

膨大な暗黒が悲鳴を上げるような音を立て、亀裂へと吸い込まれ出した。しかし、その吸引力はいつもよりも高くない。吸い込まれるのを拒み、暗黒の魔法が草治の前で暴れまわっている。

もともと暗黒の魔法は人間にとつては不気味で怖ろしい。普通の神経に、この光景はかなりきついものがある。

眼の前で暗黒が駄々をこねる様に亀裂からの引力に逆らうのを観て、草治は己の意識が遠くなるのを感じた。

『繋がりましたか』

赤蓮の声が遠くから聞えてきた気がした。何を意図していったのかは分からなかつたが。

『本当に魔法を感じやすい体质ですね。そのくせ、魔法への免疫が少ない。だから他者の魔法も伝染しやすい、今も昔も、その前も』  
嘆くような声だった。

『あとは、貴方次第です。これ以上暗黒の魔法が暴れると貴方の肉体が持ちません。だから、何としてもツヅリさんの意識を取り戻してくださいね』

## 赤井少年と竜の姫

赤蓮は草治とツヅリが繋がったと言つた。

いつか夢で見た、ツヅリが監禁されていた世界に草治は立っていた。その暗い世界にツヅリもいた。彼女は小さくつづくまり丸くなつていた。

「草治様、聞いて下さい。今日は変わった夢を覗いたのです。いつもは父上と母上の夢しか覗かないのに。今日はツヅリが人間の世で変な少年と出会つ夢なのです。あまり、よく覚えてないのですが凄く楽しかつたのです」

そこでツヅリは俯いた顔を見せた。

「でも、その夢の中でツヅリは父上と母上に嫌われているのだと言わされました。それを聞いてとても悲しかつたです。でも、夢で良かつた」

ツヅリは眠そうな瞳で草治に言った。

彼女は、ただ悲しんでいたのだ。

信じていたモノに裏切られたから。そして彼女は結論を出した。全て夢だつたと。

彼女は閉じこもり、外では暗黒の竜が暴れまわつていて。草治は首を振る。

「それは夢じやないよ」

「え？」

「ずっと夢を覗いているのもつまらないだろ？だから、俺はお前を起こしに来たんだ。ツヅリ、お前を夢から覚ましに来たんだ」

「夢から、覚ます？」

「そうだよ。ツヅリもこんな暗い世界は嫌だろ？」

草治が断言すると、ツヅリは再び俯いた。

「いえ、そうでもありません。これが夢でもツヅリはこの場所が好

きです」

「でも、お前は言つただろ。何も無いのはつまらないと。何も無いつてのは、この世界のことだろ?」

「もうですけど、この夢から覚めてどうじりと叫ぶのですか。夢でいいじゃないですか。父上と母上に嫌われていたのは夢だったのです」

狂氣染みた声でツヅリが叫んだ。

その言葉を聞いて、草治の顔が引きつった。自然と声が出た。

「それは逃げているだけだ。今は、逃げるべき時じゃない」

「貴方にツヅリの状況は理解できません。貴方は逃げるしかない状況にいないからそんなことが言えるのです」

「いや、分かる。だって俺はお前の魔法に伝染してしまったから。お前の心情がおおよそ理解できる」

草治は強い口調で言つた。

草治は魔法について詳しく述べ知らぬが、少なくとも二つのことを知っていた。

魔法の使用方法は、魔法の源泉という生き物が魔術師という餌に釣られて反応した分を使用するということだ。これは生物的な意味での反射。

そしてもう一つ。

魔法の使用方法は、魔法の源流という全てを包むするモノのほんの一部をこちらの世界に持つてくることを使つことができる。そして、こちらに持つてくるができる魔法量と魔法の使い手の存在は対応している。この決まりを、赤い魔法では反射させると表現する。自分がという存在を魔法の源泉に反射させ、そこからこの世界に跳ねかえってきた分を使用することができるのだ。

どちらの理論も反射させることができることが原則だ。

ツヅリが暴走させている魔法の場合、後者の理論に基づいている。

そのため、ツヅリの魔法に触れたことで草治は彼女の心が流れなくなるを感じていた。

「お前は、悲しみで我を失つているから周りが見えていないだけだ。よく見てみる。お前の周りには俺が居る。お前だけじゃどうしようもないかもしないけれど、誰かと力を合わせれば、何とかなるかもしれないだろ。まだまだ逃げる状況なんかじゃない」

ツヅリが息をのみ草治を凝視する。

ツヅリの変化を感じ取り、草治は手を伸ばした。

「悪い夢は終わりにしよう」

草治へとツヅリも手を伸ばし始めた。

いつしか、真っ暗だった空が白み始める。

「相変わらず、細い神経ね」

呆れたような鬼姫の声を聞き、草治は我に帰った。

少しばかり意識を失つていたようだ。

周囲の暗黒は消えていた。

草治は星が瞬く夜空で鬼姫に抱きかかえられている。  
そして、草治の腕の中にはツヅリの小さな体があった。びつやら鬼姫が草治とツヅリを抱えてくれたようだつた。

ツヅリは力を使い果たしたため目を閉じて眠つている。  
安らかな寝顔だつた。どんな夢を観てているのだろうか。  
「ねえ、草治。その子は、どうするの？」

鬼姫が草治に尋ねてきた。

ツヅリの暴走は終わつたようだが、考えてみれば天竜族と海竜族とのいざこざについては何一つ解決していない。

「悪いけどレンメイとかいう海竜に引き渡すのが無難だと思つわ  
「いや、ダメだ。俺はツヅリに協力すると約束してしまつた」

「まるで、ツヅリの魔術師になつたみたいなセリフね。草治は私のモノなのに」

不機嫌そうな声で鬼姫が言った。

見上げると鬼姫は頬を膨らませている。

『嫉妬はよくありませんよー鬼姫』

茶化すような赤蓮の声が聞こえてきた。

鬼姫は鼻を鳴らしてそっぽを向いて黙り込んだ。

『まあそんなに心配する必要はないと思いますよ。話は終わつたみたいですから。下を見て下さい』

赤蓮の言葉が意図することが分からなかつたが草治は彼女に従つて視線を下にずらした。

守巢市を覆つっていた雨雲は消えていた。

鬼姫は赤井神社へとゆっくりと降りている。

近付きつつある赤井神社では暴走して竜となつたツヅリが暴れた痕跡は無くなり、暗黒の魔法で空けられた穴ももとあつた状態に戻つている。

そして、赤井神社の境内では三人の男が草治達を見上げていた。

一人は、両手が肘のところから消えているレンメイだ。

その隣には白髪のアララギが薄笑いを浮かべ、彼の横には草治が見知らぬ男が厳めしい表情で立つていた。

草治達が赤井神社に降り立つた頃、ツヅリは眼を覚ました。

「少し眠りました」

「ああ。お前を起こすのは大変だつた」

草治は肩を竦めてから眠そうな瞳のツヅリを下ろした。ツヅリの手を引いて草治はアララギ達のもとに向かう。

アララギは軽薄な笑みで口を開く。

「もう、大丈夫だ。全て解決した。彼のおかげで」

そう言つてアララギはオールバックの男を顎で示した。

男は切れ長の眼で草治を見つめてきた。

「初めてまして。草治君。私は天竜寺明久という」

落ち付いた口調だったが草治は天竜寺の名を聞いて訝しげな顔にな

つた。

草治は彼の名前を知っていた。天竜寺財団の長。ひいては天竜寺妃の父親だ。そして神を捕まえるのを生業としている『ヤオヨロズ』のメンバーだ。つまりは鬼姫達の敵。

「ああ、そういえば娘の妃がお世話になつてゐるそつで」

「いえ、それほど大した交流はありません」

草治の疑わしげな視線が気にならないのか、明久が声を立てて笑つた。

「いやいや、アララギ様に噂は聞いてゐるよ。妃と円治がそちらに厄介になつたそうじゃないか」

「どうして、それを？」

魔法によつて秘匿されているはずの事実を敵である明久が知つていたことに草治は驚きの声を上げたのだ。

「驚くことはないよ。私は力のある神についての情報はよく理解しているのだから。そして、力のある神と私の部下が鉢合わせしないようにも気をつけているのだよ」

「どうしてそんなことを？『ヤオヨロズ』は神を見つけるのが仕事なのでは？」

「いや、『ヤオヨロズ』上層部の考え方は違つ。上層部は、人間の世界では生きていけない神を保護しようと正在する。特に力のない神にとつて科学の発達した世の中は、身を狭くして暮らすしか選択がないからね」

「どうして、そのことを妃達には教えたのですか？」

「選別」

「選別？」

「そうだよ。人工の魔術師に見つかるくらいの神は、人の世でも暮らすのが大変だろうからね。見つかってしまった神は保護の対象となるわけだ。それ以外の神は、まだ人の世でもやつていけるわけでも問題はないわけだ」

明久は不敵な笑みを浮かべた。底の知れない笑みだ。

アララギもこの男の力を認めたからこそ密かに繋がっているのだろう。

「さて、本題に戻ろうか」

明久は視線をツヅリへと落とした。

ツヅリはただその視線を眠そうな眼で受け止める。

「アララギ様に頼まれてね。私達『ヤオヨロズ』がツヅリ君を預かることが決まったのだ」

明久が言った。

草治は言われたことが理解出来ず啞然とした表情を浮かべた。

「なるほど、それならば誰の厄介にもなりませんね。いいでしょう」

ツヅリも軽く息を吐いて口を開いた。

「ちょっと待て」

草治が声を荒げて叫んだ。

「ちょっと待て。どうしてツヅリが『ヤオヨロズ』に行かないといけない」

「それは、『ヤオヨロズ』が一番、神や竜などの魔法的存在を封じる手段に優れているからだ」

鬼姫が草治の疑問に答える。

彼女は厳しい眼で草治を見つめる。

「これが、一番の妥協だ。いや、全員が納得いく筈だ。明久も言つたし前も言つたろ？『ヤオヨロズ』は基本的には弱き神を保護する善良な機関だ。ツヅリは弱いわけではなく強すぎるため竜族としても人の世でも生きられない。だからそこツヅリは保護してもらう必要がある」

「しかし、そんなわけのわからない組織にツヅリを引き渡さなくても俺達が護つてやればいいだろ？」

草治が強い口調で言った。

だが、草治の主張に誰もが顔を顰めた。その理由を以外な人物が述べた。

「小僧、今日は何とかなつたが、本来暗黒の魔法はこんなものでは

ない。本当に暴走した場合、一瞬でこの街を消し切ることができる「レンメイ」が厳しい声で草治に言い聞かせるように言った。彼は今、暗黒の魔法をもろに味わい、両手を失った。だから暗黒の魔法の恐ろしさが分かるのだ。

「まあ。俺の腕は時間が経過すれば治るが、本来ツヅリが使うことができる暗黒の魔法は消したものは必ずもとに戻すことができない」全てを無にする力だ。竜にも人の手にも負えない、レンメイが顔を引きつらせていった。もしかしたらツヅリに海竜族の封印が破られたことへの恐れがあるのかもしれない。

それでも草治は異議を唱えようとした。

ツヅリを『ヤオヨロズ』に引き渡すことは逃げているようを感じたから。

「いえ、良いのです。ツヅリは、『ヤオヨロズ』で頑張ってみようと思います」

草治に向かつてツヅリが言った。

「貴方に言わされました。まだ、逃げるべき時ではないと」ツヅリは表情を和らげた。とてもすつきりとした顔だった。

その表情には嘘があるようには思えない。

「『ヤオヨロズ』にツヅリの魔法を制御してくれる可能性があるのならば、何としても行きたいのです。この力のせいで、誰かに迷惑はかけたくありません」

力強い声だった。

その声を聞いて鬼姫がツヅリ向かつて一步足を踏み出した。

「お前の心は清らかだな」

そう言って鬼姫はツヅリの頭を撫でる。

初めてだった。鬼姫がツヅリに触れたのは。

「もしも、『ヤオヨロズ』の島に着いたら、奈菜霧という狸に会つ

といい。アレはなかなか気の良い奴だ」

「ありがとうございます。鬼の姫。貴方の魔術師と末長く幸せに」

「何、礼には及ばぬよ。竜の姫」

言葉を交わし、鬼姫とツヅリは握手した。

魔法をぶつけ合い、お互に何かを感じたのだろう。

「それでは、ツヅリ君私と共に来てもらおうか」

明久の言葉にツヅリは黙つて頷いた。

その眼は相変わらず眠そうだが、揺らぐことは無く毅然と明久を見つめていた。

ツヅリは最後に草治へと手を振り、明久と供に神社を後にした。

アララギは神社を去る前に、半笑いを浮かべながら草治に言った。

「お前の思考は竜によく似ている」

「竜に？」

竜について詳しく知らない草治は首を傾けるだけだった。

「どうが、ツヅリの思考と草治が似ているように思えない。」

その反応をアララギは観察するように眺めた。

「竜という存在は、基本的に世界に興味を示さない。」こと無かれ主義で面倒事を好まない。そして草治君はこの世界に趣味と呼べるような関心ごとも無いのだろう？そしてお前は世界で起こることよりも、寝ているほうが好きらしいじゃないか。まるで人間の身体を持つていながら竜の心を持っているようではないか

愉快そうに、アララギが言つたが草治はそれを複雑な気持ちで聞いていた。

アララギが例にあげた草治のものさなダメ人間的思考が竜と似ているのならば、今まで彼が抱いてきた竜へのイメージが崩れつつあった。

言いたいことだけ言つてアララギが帰り、草治と鬼姫が神社に残された。

「ツヅリは、あの竜は草治と違つ。普通の竜とも違つ  
鬼姫がいう。

「あの子は、この世界に強い関心を示して、いろんなものを感じて成長しようとしていた。だから、大丈夫。ツヅリはどんな世界でもやつていける」

「どうやら、鬼姫なりにツヅリの無事を伝えようとしてこられた。それにしても草治をけなしているようでもある。

「俺は、そんなに頼りないかな」

「ああ、頼りないわ」

草治の咳きに鬼姫が即答した。

それから草治から目を背け、社へと踵をかえす。

「でも、草治の隣りには私がいるから、アンタも大丈夫なのよ」  
鬼姫からそんな声が聞こえてきた。これも気のせいかもしれない。  
草治は頭を搔き、夜空を見上げた。もうすぐ朝になるのか、赤井神  
社の鳥居から夜の景色が消えゆく街の姿が見えてくる。

なんとも忙しい夜だった。

## 少年の縁の行方

今日は、草治にとつても特別な日だ。

彼の母親である麻美の誕生日なのだ。

あとで、墓参りをしないといけないと考えながら赤井神社の掃除をすることにした。

そんなときだ。彼女が赤井神社に尋ねてきたのは、本当に久しぶりだった。

「元気？」

早朝。境内の落ち葉をはいている草治に向かつて一人の少女が手を振っている。

草治もだるそうではあるが、手を上げてこたえた。  
「もうつ。せつかく久しぶり会ったんだから少しは楽しそうにしなさいよ」

両手を腰に当てて少女は頬を膨らませた。

少女の名前は仙石早苗。草治の中学生の同級生だ。

「無愛想で悪かったな」

草治が憮然とした様子で答えると、仙石は少しだけ暗い表情を見せた。

「もしかして、まだ怒ってる？」

上目遣いで仙石が聞いてきた。

何が、とは言わなかつたが草治にはそれだけで理解できた。

「怒ってはいないが、思いだしたくない」

そう言つて草治はため息を吐いた。

中学の最初。

まだ、赤蓮の影響力が少なかつた頃、今よりは若々しかつた草治は幼馴染だつた仙石に告白したことがあった。

結果は、振られてしまつたが。

初恋は甘酸っぱいとか言つ奴もいるが、彼にとつては苦々しい思い出だ。

「ま、そうよね。4年も前の話だし、それよりも、「  
今度は笑顔を湛え、仙石は右手に握られた紙袋を草治に突き出して  
きた。気持ちの入れ替えが早い少女だった。

「私の爺ちゃんが、もつてけつてさ。源藏さんが欲しがつてた骨董  
品だつて」

早苗の祖父と源藏は友人どうしだ。祖父同士が仲良しひといことで  
草治も早苗もよく遊んだ。

「また爺ちゃん、変なものを買つて」

草治が呆れたような口調で言つた。

「草治。腹減つたー」

と、神社の方から鬼姫の声が聞こえてきた。

頭に帽子を被つた鬼姫は仙石の姿を見て眼を細めた。  
仙石はきょとんとした顔で鬼姫を見つめた。

「彼女は俺の従妹のレンだ」

草治が適当な嘘で誤魔化した。一般人に鬼姫のことを一から説明す  
るのは面倒くさいのだ。ちなみにレンという偽名は鬼姫が自分で付  
けたものだ。

仙石はレンと呼ばれた鬼姫に微笑んだ。

「へえ。草治にこんな綺麗な従妹がいたんだ」

「実はいたんだよ。それで?何をしに来たの?」

鬼姫の話題を草治は無理やり変えた。鬼姫がどこの出身だとどこの  
学校に通つているかなどを聞かれると対応できない。

草治の心配をよそに仙石は鬼姫から視線を外して照れたような顔を  
草治に向けて言つた。

「恋愛成就を祈願しにきたの」

「実は私、好きな人がいるの。私野球部のマネージャーしているんだけど、部長に惚れちゃったみたいなの。田口に口に思いが強くなっちゃって、そんで今日の大会が終わったら告白しようつと思つてているのよ」

恥ずかしそうに顔を赤らめる仙石。

草治は呆れた顔を見せた。わざわざ俺に報告するなよ、と彼の顔が言つてゐるようだつた。

「普通、大会が終わつてから告白するのは男のほうだと思つけどな。第一、その大会でお前の好きな奴がミスをしたら告白なんてできなくなるぞ。もう少し告白の計画をたてたほうがいい」

「馬鹿ねえ。草治は、彼は絶対今日の大会で優勝するわ。というか、恋愛に計画とかそんなものは必要ないわ。感情のままに動くべきなの」

仙石が言つた。何だか草治の恋愛の考えが間違つてゐると言われているように感じた。

草治が苦々しい顔を造ると仙石は苦笑した。

「別に、草治の恋愛観が悪いって言つてゐるわけじゃないわ」

仙石が励ますように草治の肩を叩いてきた。

草治は憮然とした顔を返すだけ。

何だか、中学の時もこんなやり取りをしたような気がした。

「草治、言つてたわよね？赤井神社は縁結びの神様もあるつて。さすがの私も、初めての告白だから少しだけ心配になつてきたの。それでお爺ちゃんのお使いのついでにこの神社に恋愛成就を祈願しに来たの」

仙石の話を聞いて草治の顔が曇る。

だからといって以前振つた男にそんな報告はいらないと思つただが。もちろん、彼女の気持ちは整理がついているのだが。

無言の草治の替わりに、鬼姫が拍手をしながら歩ってきた。

「素晴らしい考え方ね。この神社で祈れば恋愛成就間違いないわ」  
珍しく、鬼姫が上機嫌で頷いた。

神というのは人間からの信仰を集めることで力を増すらしい。鬼姫の場合はよりも多くの人間がこの神社に祈願することが必要となるのだ。

鬼姫が続けた。

「そして告白が成功したら、赤井神社のおかげだって皆さんにも言つてね」

確かに、恋愛成就是非常に良い宣伝になる。

少し腹黒いが効果的な方法だけど

「そうね。ありがとう」

神だの、信仰の世界からはほど遠い仙石は嬉しそうな顔で頷いた。

仙石が帰つてから、草治は麻美の墓参りへと向かつた。

人が居なくなつた神社で鬼姫と赤蓮は一人で呑氣にお茶を飲んでいる。

鬼姫はポツリと呟いた。

「本当だつたら、草治と仙石早苗は夫婦になる縁があつたのだがな。お前が草治の縁を滅茶苦茶にしてくれた所為でそれもおじやんだ」

じとつとした目で鬼姫は言った。

もしかしたら、今日仙石早苗がこの神社に来たのも草治に思つことがあつたのだろうと鬼姫は思った。まあその縁も終わつたことだから愚痴つてもしかたないことだ。

赤蓮は鼻を鳴らす。

「あの女だけは、ダメですー」

机の上を両手で叩き、赤蓮が駄々をこねる様に呟つ。鬼姫は軽く息を吐いた。

「それは、前世の仙石と草治の前世が夫婦だつたからか」

「それもありますけど、あの女、前世で私にいつも意地悪してき

たんですよー」

「仕方無いだろ。だつて私達はあの娘にとつて夫と仲が良い女だつたのだから。少なくとも仲良くしたいとは、本妻なら思わないだろ。おまけに、私達はその夫に恋心を秘めていたんだからなおさらだ」鬼姫が奢めるように言つた。

赤蓮はむくれたような顔を見せた。

と、赤蓮と鬼姫が同時に眼を開いた。

「珍しいお客様ですね」

咳くと同時。

扉が開かれ一人の女性が入ってきた。

お札が貼りついた大きな旅行カバンを引いている。

その鞄から強い力を鬼姫は感じた。

鬼姫が険しい視線を浴びながら、女性は微笑みを浮かべた。

「赤蓮ちゃん、お久。それと鬼姫ちゃんは初めてまして、かな」

「おやおや。死んでさらに異端となりましたね。お久しぶりです。

麻美さん」

赤蓮が苦笑して女性に挨拶した。

その容姿に鬼姫が感嘆の声を上げた。

とても美しい女性だ。しかし鬼姫の注意を引いたのそこではない。その女性があまりに、草治と似ていたからだ。

草治と異なるのは髪の長さと、その瞳から発せられる意志の強さ。

驚く鬼姫だが赤蓮は見慣れた様子だった。赤蓮は親しげな調子で死んだはずの女性に声をかける。

「その身体はどうしたのですか？赤井麻美の肉体は死んますよね？だからご主人様が神社に選ばれたのですから」

赤井神社の魔術師は世襲制だ。

麻美の血が動きを止めたから、草治が神社の魔術師となつた。

今、赤蓮達の眼の前にいるのは麻美の偽者ということになる。

麻美の姿をしたそれは、悪戯っ子のように舌を出した。

「お師匠様に生前とそつくりの身体を造つて貰つたの」

「そうですか。相変わらずどんでもない」とをしますねえ」

呆れました。赤蓮が呟いた。

鬼姫も啞然として呆けた顔を見せる。

赤蓮は麻美にもお茶を出し、ついでにお茶うけも用意した。

「それで、ご主人様を待ちますか」

「草治に会いたいのは、やまやまなんだけど。まだ会う時じゃないかなー」

「本当に、麻美さんは変な人ですね」

「あはは。よく言われるわ。そう言えば、草治は元気?」

「元気ではありませんよ。私が取り憑いているんですからー」

赤蓮も微笑んで答えた。

鬼姫は醒めた視線を自分の半身に向けた。赤蓮が邪魔さえしなければもつと自由に動けるのだが、この少女の草治への歪んだ思いは計りしれない。

「でも、私の思い通りになつてくれないんですよねー。この前も人助けならぬ命がけの竜助けなんかしたんですよ。私が元気を吸つているのにどこからあんな元気が湧いてくるのか、本当に不思議です」「嘆息するように赤蓮が言った。この少女の願いは、草治が少女だけのものになること。

この願いは、鬼姫と赤蓮の心が一緒であつた時からあつた願いだ。その時は、二つはレンと呼ばれていた。レンが抱いた、前世の草治への届かない恋心。そして前世の草治と夫婦となつた女からの執拗な苛め。

こんな低弱な人間の女と彼は不釣り合いで。私こそが彼の隣にふさわしいなどなどのドロドロとした独占欲。

この記憶は鬼姫の中にはほとんどない。赤蓮が全て持つているから。今はもう、赤蓮の歪んだ愛がどんな形になつたのかは見えない。それでも、麻美へと嘆息の声を上げる赤蓮を見ると少しあくまくなつた気もした。

麻美が満面の笑みを浮かべる。

「私が教えたのよ。草治に助けを求めてくる人は何があつても助けをあげる努力をしろつて。あの子は私の自慢の子だから、赤蓮ちゃんには負けないわ」

自信に満ちた声音だ。

「草治は強い子。だから私は私の目的を追い続けられるの」

そう言つて麻美は自分が持つてゐる鞄に視線を落とした。

「それはさておき。私が今日、ここに来た理由は、この鞄を赤井神社に預かってもらいたかったから」

麻美は大きな旅行カバンについていた御札をはがした。

中には、燃え上がるような赤い髪の少女が入つていた。

それを見て赤蓮と鬼姫が同時に眼を細めた。

「あははは。ちょっとね、友達が祀つてゐる神様を誘拐してきたの頭を搔きながら麻美が言つ。

鬼姫が噴き出した。彼女は狼狽した声を出す。

「ちょっと待て。誘拐してきた?他の土地の神を?なんでそんなことを?というかどこの神を?」

「それは、本人が起きてから聞いて下さいな。鬼姫ちゃん」

麻美は意地の悪い笑みを浮かべてはぐらかした。

鬼姫は麻美の笑みに憤りを覚えた。

「ふざけるな。他の神を連れてくるなんて許されるはずがない」

「ああ。大丈夫、大丈夫。この子は正式には神じやないから。とうか人工的に造られた神なの」

「造られた神?」

怪訝な表情で鬼姫は聞きかえした。

『ヤオヨロズ』などでは人工的な魔術師を造つてゐることが有名だ

が神を造るなんて聞いたことがない。いや、あまりにおこがましい話だ。

「そうね。神を造るなんてとってもいけないことよね。でも、それが分からぬ人もいる。だから、ここにこの子を連れてきたのよ」憐れみの混じつた視線を麻美は小さな赤い神に落としていた。

「この子は、たぶん神としては生きられない。でも妖怪として生きるもの、可哀そうでしょう。そういうわけで、この子に人として生きることを教えてほしいの。それくらいできるでしょう」

麻美が爽やかな笑みを戻した。

鬼姫は難しい顔で紅い髪の少女を睨んでいた。

少女を見る限り、なかなかの力を秘めていることが分かつた。だが、あくまでなかなかだ。神としては少し足りない。

力のない神が人間の世で神として生きるのは辛いものだ。

「『ヤオヨロズ』に保護してもらうというのは、どうなの？」

「ああ。無理無理。この子の魔術師が凄い『ヤオヨロズ』嫌いなの。それにこの神のことも異常なくらい愛してるわ。だからこの子を『ヤオヨロズ』に引き渡したら、『ヤオヨロズ』と戦争しちゃうつてこともありえるの」

麻美があっけらからんと答えた。

鬼姫は麻美の言つた戦争という単語に引っかかりを覚えた。

現在、『ヤオヨロズ』と各地に散らばる土地神達は敵対しあつているわけでもないが友好的ではない。かなり微妙な関係だ。力のある魔術師が『ヤオヨロズ』に喧嘩を売ることで下手をしたらその関係を崩すことが考えられる。

「それほどに、力のある魔術師なのか？」

「ええ、そこらへんの土地神を退けるほどの力は在るわ

「そんな魔術師から、神様を奪つてきて大丈夫なの？」

「うーん。多分、滅茶苦茶怒つてるわね。でも、あの魔術師は正気を失っている。彼女にこの小さな神は任せられない。だから、お願

麻美は真剣な眼差しを鬼姫に向けた。

場所は守巢湖近くの球技場で野球大会があると仙石は言っていた。麻美の墓参りの後、暇だったこともあり草治はそこに足を運んだ。最初は、関係ないことなので行く気がしなかつたが、結果だけ見てみようかと思いなおしたのだ。

陽が傾きかけた夕刻。

丁度、表彰式も終り選手達は充実した笑みを浮かべている。その脇でトーナメント表を草治は眺めていた。

聖葉学園も出場しているらしかった。草治の知り合いがいるわけでもないので彼には関係ないことだが。

仙石の出場しているチームは優勝していた。彼女が自分の学校の野球部を自慢していただけはあるようだ。

観客席から視線を動かし、草治は仙石の姿を見つけた。彼女の正面には野球帽を被つた少年が一人。

二人は夕日のためか顔を紅くして話し合っている。

その姿をみてわずかに草治の胸が痛んだような気がした。

「赤井じゃない？」

観客席でぼーっとしていると後から声を掛けられた。

意外なことに、そこには天竜寺妃が立っていた。

妃は草治の隣に腰を下ろす。

「アンタがこんなところに居るなんて珍しいわね。野球が好きなの？」

確かに草治はあまりスポーツを楽しむような柄ではない。学園の体育の授業もかなり手を抜いて参加しているし。

「野球は好きでも嫌いでもないよ。ただ、案外俺も女々しいところがあるようだ」

草治はくわしい説明をせずにそう言った。

そんな草時に妃は怪訝そうな顔を向けてきた。

草治は彼女から視線を逸らした。

何となく、今の顔を他人に見られたくなかった。多分、いつもと同じ仮面なのだろうけど。

「お前は何をしに来たんだ？」

「部活よ。吹奏楽部で応援だつて」

「部活？」

「そんな変な顔をしないでよ。昔から吹奏楽には興味があったの。だから先日入つてみたの。」

妃に言われて、草治は驚いた。初めて彼女と出会った時は吹奏楽部に入つていなかつた。何か、心境の変化があつたのだろうか。

草治の意外そうな顔を見て妃が少しだけ照れたように言った。

「本当は部活なんてしていられないくらい忙しいのだけど、こういうのも悪くないわ」

そう言つて妃が立ちあがつた。

「赤井。アンタもさあ、そんな陰気な顔しないで好きなことでもしてみたら？」

「そうだな。それがいいんだろうが、俺の好きなことってなんだろうな」「うな

好きなこととはどういうことなのだろうか。

今の中には進んでやりたいと思えることがない。相変わらず情けない考えだ。

(ああ、こんな考えだからシマラナイ人間だと思われてしまうのか  
「だから、そういう顔をするからいけないのよ」

唐突に妃は草治の頭を叩いてきた。

「少しば、楽しそうな顔をしなさいよ」

「楽しい、か。天竜寺は、とても楽しそうだね

草治は表情を和らげて言った。

妃は瞳をきょとんとさせた。

彼は知っている。この少女の心は下手をしたら草治以上に心が空っぽだった。

「昔の天竜寺の笑顔は、学園でも凄く嘘つぽかつた。でも、今の顔には嘘が少ない。この変化は多分、お前が本当に楽しいと思えるからなんだと思う」「う

「おかしなことを言うわね」

妃の顔に驚いたような表情が現れた。この顔も嘘は少ない。全部が全部本心というわけでもないけれど、彼女も変わりつつあるのだ。

「ああ、俺は少しおかしいんだ。今はおかしいんだ。でも俺も変われるだろ？ 天竜寺のように」

真剣な草治の視線に天竜寺が噴き出した。

「私みたいに、か。本当にアンタはおかしいわね。でも、嫌いじゃないわ。アンタのそういうところ」

天竜寺はバイトがあるということで球技場で別れることになった。

『ヤオヨロズ』の仕事なのだろう。草治は何も言わず天竜寺を見送った。

草治も神社に帰ることにした。

妙にすつきりとした気分だった。

天竜寺妃と話が出来たからかもしれない。

最後に、球技場を振り向いた。

そこには、仙石早苗と見知らぬ少年がいて、一人はとても楽しそうで。

「赤井神社が結んだ縁。きっと幸せな縁となるだろ？」

赤井草治は穏やかな表情で囁き、その場を後にした。

彼には、未来を見通す魔眼も無いし、鬼姫のようにそれぞれの縁の相性も分からない。

だけど、あの二人は幸せになるだろ？

赤井神社の魔術師としての赤井草治の勘がそうつげていた。

## 神格を認められなかつた神様

ある日の夕方、家に帰ると真赤な髪の少女が居間の隅に縮こまつていた。

歳は草治と変わらないくらいだろうか。

顔を覆い隠す長々しい髪から瞳をわずかに覗かし、草治を隠れ見ている。いささか不気味だ。

だるそうな瞳の草治と少女の眼が合つた。

「ひああ」

何故か悲鳴を上げられた。

そして少女は完全に髪で顔を完全に隠した。髪にはこんな使い方もあるようだ。

草治の陰気な瞳を見て睨まれたと勘違いしたのだ。よくあることだ。悲しくなるけど。

「鬼姫か赤蓮の友達か？」

草治が抑揚のない声で尋ねた。

少女は黙つたままだがものすごい勢いで頭を左右に振つた。真赤な髪も振り乱れる。

その反応は意外だった。

今まで何度も鬼や竜などの人外と会つた所為か。少女の雰囲気が何となく人間じゃないような気がしたのだ。

鬼姫やツヅリという竜が持つていたどこか、人間と違い、決して人間とは相容れない感覚。それを眼の前の少女は持つていた。だから、鬼姫に用が合つたのだと思ったのだが。

「もしかして、俺に用？」

草治が聞くと少女は頭が取れるくらいの勢い上下に髪を振り乱して何度も頷いた。

何だかため息をしたくなつた。

鬼姫と赤蓮の話だが、草治のことは周囲に散らばる神々の間で噂に

なつてゐるようだつた。問題なのは、その噂に尾ひれが付いているようで。

ついこの間もツヅリといつた竜が草治を頼つてきた。彼女は草治を力のある魔術師と勘違ひしていた。

「俺に何の用？」

うんざりとした顔を表に出さないようになつたが、草治の低い声は問い合わせているようでもある。草治の声に少女は身を竦ませた。黙り込んで何もしゃべらない少女に、草治はどうしたもんかと頭を搔いた。

（どういふか、鬼姫と赤蓮はいないのか）

「いにしますよー」

沈黙した部屋に、草治の心の声に答えるような赤蓮の明るい声が入ってきた。

鬼姫がドアを開け、その肩のあたりを赤蓮が浮かんでいる。この幼い姿をした幽靈少女は本当に何でもありだ。おそらくさきほども草治の心を読んでいたからこそこのタイミングで入つてきたのだろう。「もー。そんな怖い顔しないでくださいよ」

憮然とした表情の草治に赤蓮がからかうような笑みを向けてきた。「怖い顔は生まれつきだ。それより、この子は何だ？」

「さあ？ 何でしょ？」

赤蓮はそう言つて鬼姫に視線を向けた。鬼姫は呆れたように赤蓮を一瞥してから、口を開いた。

「なりそこないの神様、かな」

「なにそれ」

「だから、まあ妖怪とか魔人とかそんな感じ、だと思つ」濁すように鬼姫が言った。

自信が無いなんて鬼姫には珍しかつた。

草治の認識としては、力のある魔法を使える人外が神様で弱い魔法しか使えない人外が妖怪だととらえている。

「あー。日本で神様を名乗る場合、『オノゴロ』という組織に認められ、神格を貰わないといけません。カガリさんは『オノゴロ』に神格を認められてないので神様というわけではないということです」再び草治の考えを読んだように赤蓮が説明してくれた。カガリとうのは赤髪少女の名前だろう。

神格だの、かなり常識はずれなことを赤蓮が言つたが草治は驚かない。

(『オノゴロ』って組織も『ヤオヨロズ』と似たかんじなのかな)  
「『ヤオヨロズ』は人間の神様ごっこ。『オノゴロ』は神が神を律する組織だ。全く違う」

今度は鬼姫が説明を入れてきた。

馬鹿にするような鬼姫の視線に気付き草治は顔を引きつらせる。

「もしかして、鬼姫は俺の思考が読めるの？」

草治がさりげなく聞いてみると鬼姫は何も言わず、そっぽを向いた。赤蓮は草治の思考が読める。赤蓮と鬼姫は半身同士である。つまり、鬼姫は草治の思考が読めるのではないか。三段論法的に考えるとそんな不安が生まれてくる。

まあ今さらそんなことを気にして仕方無いが。

草治は何もしゃべらずにそわそわとしている少女に視線を戻した。

「えーっと、カガリでいいんだよな」

そう言うとカガリと呼ばれた少女は頷いた。

ひとまず、イエスかノで答えられるクローズドクエスチョンならば意志の疎通は可能であるようだ。

カガリについて知っていることは少ないが状況を整理するために、気になつことをピックアップして質問を作るしかない。

「カガリは俺に助けてほしいことがあるんだよな」

草治が聞くとカガリは頷いた。

「カガリは神様になりたいの？」

草治の質問にカガリは首を左右に振った。

「そつか

そう言つて草治は頭を搔いた。

(ほかに、何て質問すればいいんだ)

言葉がほいほいと出てこない口下手な自分に嫌気がさしながらも草治は鬼姫達に助けを求めるための視線を送った。

草治の救援の合図に気が付き鬼姫はあからさまなため息を吐いてきた。

もう少し頑張れよ、と蔑むような目を鬼姫はしているような気がした。

(仕方ないだる。あまり人と会話しないから、こういう時に言葉が出てこないんだよ)

「力ガリは神として暮らすのはキツイ。だから力ガリに人間としての生き方を教えてあげてほしいと『ある人』から依頼を受けた」ため息混じりで鬼姫がそう言つた。

その情報をもつと早く教えてほしかつたが、草治は不満を抑えることにした。

「神として暮らすのがキツイなら『ヤオヨロズ』に保護してもらえばいいだろ?」

「まあ、依頼者にもいろいろあるそうだ。それに私が視ても、力ガリは人間の世のほうが縁が根ざしやすいと思つのよ」

鬼姫は髪を搔き上げながらそう言つた。

一応、彼女は縁結びの神様でもあるようだから、そうなのだらう。何はともかく、力ガリもこの神社でしばらく預かるみたいだ。また食費がかかる。

草治が情報を整理していると突然後ろ髪が軽く引っ張られた。驚いて振り向くと力ガリが手を引っ込めるのが見えた。

「あ、あの」

初めて、力ガリの声が聞こえてきた。鈴が鳴るような綺麗な声だと草治は思つた。

「あ、あの、違う」

「何が、違うんだ?」

「その、えっと、私は人間になりたいわけでは、なくて」  
カガリは俯いていて草治と目を合わせることはなく、両手の指もせわしなく動いているが、その声ははつきりとしていた。

「私は、私は魔術師になりたい」

きつぱりとカガリは言った。

カガリの主張が予想外だつたらしく鬼姫と赤蓮はお互いに顔を見合させて驚いている。何だかんだでこの二人は仲が良いのかもしれないとあまり驚いていない草治は思つた。

草治にはカガリが魔術師になる意味が分かつていなかからこそ淡々とした感情でカガリの主張を聞いた。他者である誰がどんな職業を希望しようが、その人の勝手であるのだから。

しかし、次に出たカガリの言葉に草治は驚き、呆れ、呆けた顔を見せることになる。

カガリの赤髪から両目が現れ、その瞳が草治を捕えた。

澄んだ紫色の瞳だった。

「だから私に、赤い魔法を教えて、くれますか」

少女は上目遣いでクローズドクエスチョンを出してきた。

## 神格を認められなかつた神様（後書き）

試験期間といふこともあり、かつてこのをつけて授業で習つた単語を入れたりしてみましたが、なにぶんバ力学生なので単語の使い方と意味が間違っているかもしれない気を付けてください。

## 赤井神社の弟子

赤井神社を囲む木々が紅葉を始めた頃の話だ。

魔法を教えてくれますか？

赤いもみじのような髪を持つ少女は、そんなことを赤井草治に言つてきた。

「私は、その、魔法が使えるのに、使えないのです。だから、いつもお母さんに怒られて。だから、」

赤い髪で顔を隠し、力ガリは手で髪を弄つてゐる。拳動不審だ。

力ガリの説明も要領を得ない。

魔法が使えるのか、使えないのか。

「だから、あの、その、お母さんに怒られないように魔法が使える様になりたくて。ですから、その、私を弟子にして、ください」「

「何それ？意味分からないわ」

不機嫌な調子を隠さずに、何故か鬼姫が力ガリを睨んでいた。

鬼姫は、人外に対して友好的ではない。

そして意志の弱そうな力ガリは鬼姫の威圧によつてすっかり怯えてしまつてゐる。

赤蓮は苦笑を浮かべて鬼姫の裾を引っ張つた。

「まあまあ。別に、ご主人様が力ガリさんと契約するわけではないのですからー。嫉妬は止めて下さいね」

「別に、嫉妬はしないわ。ただ、この馬鹿は、何も知らない癖にお節介をやくから、面倒なことになりそうで氣が氣でならないのよ」

そう言つて鬼姫は草治を一度睨んできた。

面倒事に巻き込まれやすい彼は鬼姫に反論できず、口元もぐ。

「でも、今回ることはなかなかに良い話だと思いますよー」

赤蓮が悪い空気を吹き飛ばすように両手を打ち鳴らして笑みを浮か

べて言つた。

「カガリさんがご主人様の下僕になると解釈すれば、カガリさんが私達の下僕になることと同義ですから」

いつのまにか草治は鬼姫と赤蓮の下僕になつていたようだつた。確かに、そんな上下関係が無いわけではない。家事は全て草治が行い、鬼姫と赤蓮はごろごろしているだけだし。

赤蓮の提案に鬼姫は渋々とした感じだが頷いていた。

「そういうことなら、いいわ」

「ほ、本当ですか？ ありがとうございます」

少しだけ嬉しそうな声がカガリから上がつた。彼女は鬼姫に何度も頭を下げている。というか、この少女は大切なことを知らない。（俺は、魔法なんて一つも使えないんだけど）

魔法具があれば多少は魔法が使うことができるが、それだけだ。魔法に関しての知識も乏しい。教えるなんて出来るはずが無い。

しかし、それを伝える機会というかタイミングを口下手な草治は掴めないでいた。

カガリは草治にも近付き頭を下げてきた。

「こ、これからよろしくお願ひします。お師匠様」

「いや、俺は」

「よかつたですねー。カガリさん。ご主人様は凄腕の魔術師なんです。特に赤い魔法にかけては人間にしてもくのはもつたといいくらいです。きっとすぐに赤い魔法を習得できますよー」

草治の言葉を赤蓮が遮つた。

彼女は草治の手を握り、魔獣を倒したーだのあること無いことを喋り始めた。

赤蓮は悪戯つ子気味な笑みを浮かべてはしゃいでいる。草治が困った様子が面白いよつだつた。草治自信は赤い色の魔法と言われもなく知らない。まず、魔法の色の違いも分からない。

そして赤蓮の話を聞いてカガリから熱い視線を草治は感じた。

『考えがあるので、少し私に合わせて下さい』

頭の中で赤蓮の声が響いた。

この声はカガリには聞えてないようで、彼女は赤蓮の話に耳を傾けている。

怪訝な顔を草治はするが、赤蓮はこれ以上何も草治には言つてこなかつた。ひとまず草治も赤蓮に任せることにして、魔術師がなんたるかを抗議している赤蓮の話に集中する。

「魔術師になる場合、人間の生活といつもの知らないといけませんねー」

「そ、そなんですか？」

「そうですよ。魔術師は皆魔法を使えることを隠して普通なふりをしているのです。亡国のスパイや忍者や隠れヲタクみたいなものであります」

赤蓮はペラペラと変なことを言い、カガリは赤蓮の言葉をまに受けてしまいに頷いている。忍者やスパイと隠れヲタクが同じ分類ということをカガリが覚えないだろうかと草治は心配になつてきた。  
「つまり、魔術師になる場合、人間の生活も習得しなくてはなりません」

「え？でも、私、そういうのは良く分からぬ」

「そうですかー。でも大丈夫です。人間の生活なんて簡単に習得できますよ。学校に通えば」

「学校？」

「そうですよー。学校は人間の造つた社会に適応するための人間を生産する場所ですからねー」

身も蓋もないことを赤蓮が言つた。

学校にはそんな一面も無くはないが、社会に適応できない草治は複雑な気持ちだつた。

何にせよ、赤蓮はカガリを学校に通わせたいようだつた。

鬼姫と赤井神社の力を使えば、無理やりカガリを転入させることはできるだろう。

「楽しい学校生活になりそうですねー」

赤蓮が楽しそうにそう言つたが、草治にはこれほどに内向的な少女が学校で上手くやっていけるのか疑問だつた。

### 朝のホームルーム。

転入生が来るらしい、そんな話題が教室で飛び交つていた。天竜寺妃は怪訝な顔でその話題を一人聞いていた。

(そんな情報は、私のところに来ていない)

妃は仕事柄、周囲の情報は『ヤオヨロズ』と言つ機關の下つ端工作員を使ってほぼすべて把握するように心がけている。力の無い妃にとって諜報活動こそが、最大の切り札と言つてもよい。妃の諜報力には彼女の兄弟達も舌を巻いているほどである。

彼女が通う聖葉学園の情報は特に。

だが、彼女の情報網も完璧ではなかつたようだ。

(あとで、情報網の在り方を整える必要があるかしら?)

妃が思考している内に、件の転入生がホームルームで紹介された。教室に新しいクラスメートが入り、男子から歓声が上がる。それは転入生が女だったからというよりも少女の容姿のせいだ。

遺伝子教育を受けたのか、印象的な真赤な髪が顔を隠しているが、スタイルはそれなりに良い。男子が騒ぐのも頷ける。

黒板には、赤城力ガリと書かれていた。

赤城力ガリは緊張しているのか何も喋らずに、もじもじとしている。その仕草も可愛げがあつて男子はニヤニヤとしている。ただ、女子の反応は微妙だ。

「それじゃー、赤城さんは天竜寺さんの横の席に座つてね」

教師が妃の左にあつた空席を差して言った。力ガリは周囲の視線から逃げるためか小動物のような素早さで早々と妃の隣に座つた。

「はじめてまして。私は天竜寺妃というの。よろしくね。赤城さん」

「あ、は、はい」

自信に満ちた笑顔を作り、妃は転入生に挨拶をすることにしたが力ガリは一言答えるだけで顔も合わせようとしない。いわゆる人見知りだろうか。妃は内心呆れ果てていた。

人見知りは三歳くらいまでで克服しないといけない発達課題だとうのに、遺伝子に問題があるのでないか、仕事柄そんなことさえ思つてしまつた。

ホームルームが終わり、妃の周りに取り巻きの女たちが寄つてきた。この教室の中心は彼女なのだから当然なのだが。

赤城力ガリは男子に囲まれて質問攻めにされている。彼女はびくびくとした態度で、片言で質問に答えている。

（もっと堂々としていればいいのに）

妃はびくびくとしている赤城から視線を外し、男子に囲まれている赤城を剣呑な視線で見つめる数人の女子を眺めた。露骨に舌打ちをしている女子もいる。かなり険悪な空気だ。

（うざいわね。こういうの。でも、気持ちは分かるわ）

妃自身、はきはきとしていない人間はあまり好きではない。だから、この新しいクラスメートととはそれほど話すことは無いだろう、そう思った。

彼女にとつて学校は、普通の人間のふりをするただのカモフラージュだから必要最低限の交流だけでいいのだ。

これが、少女たちの出会い。

季節は秋。葉っぱの色が移り変わる頃の話だ。

赤城力ガリが転入ってきて数日がたつた。

力ガリは自己主張が少ないためか、一人でいることが多かった。

天竜寺妃は力ガリが教室で孤立しているのを横目に、力ガリの位置が教室で定着しつつあるのを感じつつあった。

一人、寂しそうだと思わないでもないが。

(何か、きっかけがあれば少しは変わるのだろうけど)

「私には、関係無いことね」

そう呟いて、妃は転入生のことを頭から追い出した。

今は、もっと考えないといけないことがある。

妃は近くに生徒達がいないかをさりげなく確認した後、携帯を取り出した。

一通のメールが届いていた。

姉である天竜寺渕莉からだ。

渕莉とは兄弟の中では一番接点が多い。渕莉も妃も戦闘魔法よりも情報収集のほうが得意という共通点がある。そして、情報量に関して妃は渕莉に及ばない。

渕莉からのメールを開き妃は絶句した。

天竜寺円治が何者かに襲われ、負傷した。

そんな簡潔な文章で始まっていた。

円治が襲われたのは守巣市からそれほど遠くない場所だった。  
魔人狩りの探索中に襲われたようだつた。

天竜寺円治、戦闘に関しては天竜寺兄弟の中ではトップクラスのチカラをもっている。そんな兄が負かすとは、襲撃者はかなりの強敵

だ。

しかも、襲撃者は円治に致命傷を与えず、遊んでいるかのよう両脚を折られているらしい。

依然犯人は捕まつておらず、日星も付いていない。

渕莉は最後に、気をつけろという言葉を残していた。

(魔人から視れば、私達『ヤオヨロズ』は敵でしかない)

『ヤオヨロズ』が魔人に襲われるのは当然のことだが、兄を上回るほどの魔人には会つたことがなかつた。これは、妃の上司である天竜寺明久が力のある魔人と彼女達が鉢合わせしないように工面しているのだが、このことは妃は知らない。

(いずれにしろ、力の強い魔人がこの近くにいる。それを捕まれば、かなりの手柄になるわ)

妃は少しだけ胸が高鳴るのを感じた。

力の無い彼女はいつも、無能として蔑まれていた。彼女自身、弱い魔法しか使えないため、無能のレッテルは仕方が無いことだと受け入れていた。彼女が生まれた『島』では魔法の高さこそが全てだから。力の在るモノに従うのが自然の原則だと思っていた。人形のように周りに従ついたら、気が付いたら心まで空っぽになつていることに最近気が付いた。

(でも、もしも、強い魔人を捕まえることができれば)

近頃、変わりたいと妃は思うようになつていた。

今年の夏、偶然奈菜霧という化け狸を捕まえた頃から、そんなことを考えている自分がいた。魔人というか魔狸を捕まえて自信が付いたのかもしれない。

つらつらとそんなことを考えていたが、彼女に近づいてくる人影に気が付き妃は携帯をしました。

「あ、あの」

意外にも赤城カガリだつた。

彼女は、俯きながら妃に話かけてきた。

「何か用かしら？ 赤城さん」

妃は優雅な口調で尋ねた。

だが、内心は疑問で溢れていた。この内気な少女が自分に用があるとは考えにくかったのだ。それに、妃は途中でサボってきたが今はホームルームをしているはずではなかつたか。

相変わらずカガリは拳銃不審だったが声だけは綺麗だつた。

「え、えつと、さつき体育祭の競技を決めていて」

「知つてゐるわ。もしかして教えに来てくれたの？」

「そ、そう。天竜寺さんは、私とテニスをすることに決ましたの」

「ふーん。そつか。ありがとう」

妃は一応礼を言つたが、体育祭になんか出るつもりなどなかつた。今は、そんな時ではない。

見栄えのよい造り笑顔を浮かべていると、カガリが顔を上げてきた。口元にはわずかに笑みが浮かんでいる。妃に礼を言われたのが嬉しかつたのかもしれない。

「う、うん。頑張ろうね。天竜寺さん」

カガリはそう言つて教室に戻つて行つた。後ろ姿も少しだけ楽しそうに見えた。

確かに、体育祭は来週。

(時間があつたら、出てあげようかしらね)

そんなことを妃は思つた。

何だかんだで彼女もお人好しなのだ。

その後、妃の魔人捜査が始まつた。

基本的には、情報収集と情報管理と情報整理の三点を行い、不自然な地域を徹底的に調べた。だが、一向に進展はない。そういうするうちに、体育祭の時期が近づいてきた。

清々しい秋晴れの下、聖葉学園体育祭が始まつた。

(本当は、サボりたかつたわ)

心中で愚痴をこぼしながら、妃は第一試合の会場に向かうことにした。

その後からはカガリが付いて来ている。

妃とカガリが出る試合は、テニスのダブルスだ。

指定された場所に行くとすでに相手チームが揃っている。

男子生徒と女子生徒のペアだ。

「君達がボクの相手かい？悪いけどボク達が勝たしてもらうよ」短髪の女子生徒が快活な声で妃達に声をかけてきた。妃は一応この学園の生徒の情報は在る程度目を通している。

名前は白井美香と言ったか。

「美香、変な宣言は止めてくれ」

白井の横で長身の男が彼女を窘めるように言った。

この男も知っている。有馬辰巳。

この一人は、そこそこ運動ができるということで有名だ。「ひとつと始めましょうよ。返り討ちにしてあげるから

妃も白井に対抗するような自信に溢れた笑みを返した。

本当は、体育祭の勝敗なんてどうでもよかつたが、こうこう高飛車な態度が天童寺妃であり、そう演じる様に命令されている。

カガリを含めた4人はコートに入り、試合を始めることにした。

有馬辰巳と白井美香の運動神経は妃の予想以上だった。

（手強い、というか、）

妃は前方で固まっているカガリを見つめる。

（この子、予想以上に役に立たないわね）

カガリはほとんど動かず、さらにはボールが迫ってくればよけいた。

もはや、天童寺が一人で戦っていると言つていい状態だった。

（まあ、頑張っているんだろうけどね）

試合結果は、妃達の惨敗だ。

試合が終わり、「コートの上では白井と有馬が勝利のためかはしゃいでいる。

(うざいわねー、ああいうカップブル)

カガリは自分が敗因だと気が付いてるのか、いつもよりも俯いている。妃は特に気にしてないのだが。さすがに見かねて妃は声をかけることにした。

「そんな暗い顔しちゃダメよ」

妃の言葉に、カガリは顔を上げた。「でも、」と暗い顔で何かを言おうとしていた。

内向的な人間は自己嫌悪にハマりやすい。

「こういうときは、誰かの所為にして気分を入れ替えることを勧めるわ。例えば、相手チームの女の胸が平すぎて本当に女かどうか気になつて集中できなかつた、とか」

そう言つて妃は白井に流し眼を送つた。

白井は少しむくれた顔で妃に視線を返した。

「胸が無いって誰のこと?」

「さあ?」

妃は肩を竦めてしらばつくれた。実を言つと、残敗で少しだけ機嫌が悪かつた。白井は白井で胸が無いことを気にしていたようだつた。二人は睨みあい、その二人の後でカガリと有馬がオロオロとしている。

「おい、お前ら、何をしているんだ?」

コートの外から低い男の声が割つて入つてきた。振り向くと陰気な女のような顔立ちの男が立つていた。赤井草治。非常に不幸体質の男だ。

以前までは、この男が魔人ではないかと疑っていたこともあるくらいに、不自然なことが彼の周りでは起つていたのだ。最近はそういうないが。

「草治?バスケは終わつたのか?」

有馬が親しげな口調で話しかける。

「いや、俺はサボってきたから知らない」

赤井が当然だる、と言つた表情で答えると白井と有馬は揃つてげんなりとした表情を作つた。

「お師匠」

妃の後ろから泣き声に似た声がして、力ガリが赤井に向かつて飛び出した。

彼女の行動が理解できずに、妃は茫然と力ガリを眺めた。これほど行動的な少女だったのかと認識を改めるほどに力ガリの動きは素早い。

力ガリは、赤井に飛び付きめそめと泣き声を抑えている。

「草治。その子は？ つていうか師匠つて何？」

有馬達も呆けた顔をしている。

赤井はバツの悪そうな顔を見せた。

「遠縁の子で、巫女になりたいつていうから、作法とかいろいろ教えてる」

「巫女？ すげえな」

何故か有馬が興奮したような声を上げている。

「辰巳？ もしかして、巫女さん好きとかいう変態？」

「ち、違う」

白井に醒めた目で見られて有馬が慌てて否定している。

それは、さておき妃は赤井と力ガリが親戚同士ということを知らなかつた。

(普通、学園の生徒は親戚の情報も含めて把握しているのに。この私が見逃したのかしら？)

最近は忙しかつたからそつなかもしれない。いざれにしろ、気を引き締める必要がある。

「天竜寺。力ガリがいつもお前に世話になつてゐるみたいだな」

そう言つて赤井草治が妃に頭を下げてきた。まるで力ガリの保護者のようなセリフだ。別に、世話をした覚えは無いのだが。

「俺は、こいつを落ち着いた場所に連れていくために帰るから、後

はよろしく

唐突に、赤井は泣いているカガリを見てそんなことを言った。

「おい。 そう言ってサボるきだろ」

「まあ。 そんなところ」

赤井は手を振り、カガリと一緒に歩いていった。

(どういう関係かしら?)

恋人、というふうには見えない。でも、なかなか親しげな様子ではある。

(別に、どうでもいいことね。私には関係無いこと、だし)

「関係無いわよね?」

誰にともなく妃は呟いた。

## 魔法否定の剣

『ひとまず。今日は魔宝具を使います。使い方は普通の魔法具と同じです』

入り込んだ赤蓮の声が頭の中に響いてきた。

その声に従い、紅石と呼ばれる宝石の魔法具を虚空に投げた。すると紅石は空中で止まり、そこを中心とした魔法陣の円が飛び出した。

それを見て力ガリが感嘆の声を上げる。

草治もこの赤い宝石の魔法具の簡単すぎる操作に驚いていた。ただ、投げるだけで魔法陣が飛び出すのだ。

紅石の魔法陣を閉ざし、虚空で固定されている紅石を手に戻した。

「これはどうだい？」

赤井草治は赤い宝石を力ガリに渡して言った。  
力ガリは口を開いて宝石に魅入っている。

「これは、何ですか？」

「その石は魔法具の一つ」

力ガリから魔法を教えて下さいと乞われてから草治は一応魔法について講義をしている。付け焼刃であるが、赤蓮からも力ガリに魔法について語れと言われている。

昼間、力ガリは赤城力ガリとして学校に向かい、その後は草治が魔法の授業をしている。もちろん草治は魔法なんて使えない。そして力ガリも魔法が使えない。しかし力ガリの体質には魔法が扱えるはずだと鬼姫は断言していた。とりあえず赤井神社の倉庫にあつた魔法具の使い方を教えている。

「魔法は、魔法の源流と呼ばれている場所から己の魔法を取り出さないといけない。取り出す方法は、魔法陣を描くことでこちらと魔法の世界を繋ぐことが基本。これができないと始まらない

「はあ、分かってはいますけど、魔法陣の描き方が良く分からないんです」

「より精密な魔法陣になればなるほど魔法の源流に近付きやすくなる、らしい。だけど今はそんな小難しいことを考へないで、この魔法具に入っている魔法陣に従つてみる」

草治がそう言つと、カガリは宝石を虛空に投げた。

宝石はくるくる回転しながら床に落下した。

「本来なら、意識しただけで、宝石から魔法陣が飛び出すんだけど。もつと簡単な魔法具のほうがいいのかな」

草治が困ったように言つて今日の授業は終わることになった。カガリが赤井神社にやつてきてしばらくたつが魔法に関しては進展がない。

「あの、やつぱり、私には才能が無いのでしょうか？」

不安そうな顔でカガリは草治に聞いてくる。

いろいろな魔法具を使っても魔法陣の一つも出せないと彼女は気にしているのだろう。

だが、ひとまずこの少女は最初よりもいろんなことを話すようになつた。学校に通つていることが大きな要因になつてしているのかもしれない。

今日の体育祭では失敗したと落ち込んでいる所為でいたせか雰囲気が暗い。

「まあ、時間はたくさんあるからゆつくりやってみればいい」

草治は穏やかな口調でそう言つたが、カガリの表情は晴れない。

もつと他に励ましの言葉を送ろうと草治が思考する。

草治が何かを言つ前に、カガリが草治と田を畠わせて弱々しく笑つた。

「多分、時間はそんなにありませんよ。近くに、お母さんが来ているのを感じます。きっと、私を連れ戻しに來たのです」

体育祭があつた夜のことだ。

守巢市で情報を集めていた工作員達から突然連絡が途絶えた。何かがあつた。天竜寺妃のカンがそう告げていた。

(連絡が途絶えた場所は守巢湖公園付近ね)  
位置を確認して、妃は家を飛び出した。

現在、目的地に一番近い魔人狩り部隊は妃だ。  
いの一番に魔人に近付くチャンス。

(勝算もある)

妃は全速力で夜の街を駆ける。

守巢湖に面した場所にその公園はあつた。公園と言つてもむしろ広場といった感じだ。ブランコなどのかわりに、様々な形の石像達が散らばつていて。

それほど遅い時間帯ではない。

だが、公園には、その周辺にも人がいない。  
やけに閑散としている。

公園の中心にあつた石像の上には、一人の女が座つていた。  
20歳くらいだろうか。眼鏡をかけていてお堅そうな雰囲気のある  
女だ。

「貴方ですね？執拗に私を探つていた『ヤオヨロズ』の職員は」  
女は眼を細め、妃を見下ろしながら言った。ものごとに敏感な妃は  
すぐに女の嫌悪の籠つた視線を感じ取つた。

「貴方が、円治兄さんをぼこぼこにした魔人かしら？もしそうなら、  
私は貴方を捕まえないといけないの」

「円治」というと天竜寺円治ですね？あの高慢で雑な魔法の使い手  
嘲笑するような声を聞き、妃は軽く息を吐く。

(ようやく魔人を見つけた)

『ヤオヨロズ』の奴らを見返す機会が来たのだ。

妃は懐から短剣を取り出した。幾何学的な紋様が刻まれた黒い剣だつた。

これは奈菜霧という化け狸を捕まえた報酬として上司である明久から貰った高度な魔法具だ。これが、彼女の自信を煽っていた。

妃が自慢気に短剣を振りかざすのを見て女が嘆息した。

「ああ、本当に『ヤオヨロズ』は私の邪魔ばかりする。私はただ、私の大切な、大切な娘を探しに来ただけなのに」

嘆きの言葉が出てきたわりには女の瞳は飢えた蛇のようだった。口下を女は舌で唇を舐める。その舌の動きも蛇に似ていた。

「『ヤオヨロズ』なんて皆死ねばいいのに。本當は、全員殺したいけど我慢しているのに。どうして貴方達は私の前にやつて来るの？殺して、と言つているみたいじゃないですか」

『ヤオヨロズ』への嫌悪を吐き、女の腕が蛇の如く跳ねあがつた。その指には赤い指輪が付いている。

「世界を造る理よ。世界を形作る理よ。私の幻想を受け入れなさい」朗々と、女は唱えると指輪から赤い光が溢れだした。女を起点として赤い円が大地に広がっていく。

赤い円は血の池のような色をしていた。

(血の池)

そんなことを妃は思つた。

そして、血の池からいくつもの真赤な腕が飛び出した。腕だけではない。次第に人影が現れる。赤いゾンビだ。

「気味が悪い魔法を使うわね」

「貴方達、『ヤオヨロズ』に言われたくないわ。人間の理を無理やり変えてまで魔法を求めるなんて、本当にヘドが出る」

遺伝子教育のことだろうと妃は思つた。

今でも、人間の遺伝子を変えることに抵抗を感じる人間も多いようだが、眼の前の女はそんな倫理観だけで『ヤオヨロズ』を敵視して

いるには、女の視線がやけに粘ついていたように思えた。

「本当に、本当に汚らわしいわ、貴方達。『ヤオヨロズ』の人間は本当に壊れているわよ。もはや人間じゃないわ。だから、あんなに簡単に、笑いながら私の神を壊せたのよね、きっと」

女の瞳は危ない輝きを放っていた。

「そうよ。貴方達みたいのが、神を狩るのはおかしいわ。貴方達みたいなクズの所為で、私の娘も怯えているのよ」

理解不能な女の話を聞いて妃は不敵に笑う。

この女は壊れている。

それでも、臆さずに妃は己の魔法を身体中にめぐらせた。妃の顔から笑顔が剥がれ落ちて、人形のような無機質な顔へと変わっていく。幼いころから妃は魔法を呼吸するような感覚で扱うことができた。彼女の魔法は微小な電気を造ることだが、応用すれば身体能力を高めることができる。

身体が軽くなつたのを感じ取つた後、妃は目標の女に向かつて走り出した。

彼女の前には赤いゾンビ達が壁となつて立ちはだかっている。疾風の如く速く、軽やかに。

妃はゾンビ達の距離をつめて魔法の剣を一閃。

妃の短剣が触れた刹那、ゾンビは赤い塵となつて消えていく。

（凄い。これが、魔法解除能力）

予想以上の剣の力に心の中で称賛の声を上げた。

負傷した円治から、この魔人の魔法について聞いていた。

どれだけ攻撃しても、死ぬことが無い赤いゾンビ達。

円治はそう言つていた。円治の炎の魔法が全く効かなかつた。だが、妃の手元にある剣はあらゆる魔法の存在を否定する。動きを止めること無く、剣はゾンビを貫き続ける。

女に向かつて、一直線で妃は駆ける。

「つな？まさか私の魔法が消えた？分解されたわけでもない。『帰された』わけでもない」

狼狽した声が女から聞えてきた。

妃は、足に魔法を集中させてゾンビ達の上に飛び上がった。そのままゾンビの頭を踏んで突き進む。

「私の魔法が『否定』されたということね。さすがは無色の魔法。面白いわ」

女に肉薄し、そんな声が聞こえてきた。

だが、後は妃が剣を女に向かって振るうだけ。もちろん急所は外す。

普通の人間ならばとらえ切れぬ速さで。

「でも、私の赤い魔法も面白いわよ」

余裕に満ちた女の声が聞えた。

女の顔から赤い腕が突然生えた。腕が妃のほうへと伸びていく。（早く、否定しないと）

妃は目の前の腕を斬り落とす。

だが、腕を否定した後、妃はあることに気が付いた。感覚が研ぎ澄まされすぎているゆえに気が付いた。（腕に囲まれている？）

妃の周囲360度、その全てに赤い腕が浮いていた。その腕のほとんどが空中で固定されている。

「私の魔法陣に入った時点で貴方の負けよ。私は赤い私兵を無限に、簡単に引き出せるの」

妃の腕が、足が掴まれた。

細い腕のわりに、とんでもない握力だった。

魔法によって痛覚も抑えているため痛みはないが。

（結局、私は無能でしかないのね）

妃は醒めきった頭でそんなことを思った。

## 火神の残骸

小説数年前の話だ。

茅野恵美は火神に仕える魔術師だつた。彼女と神は姉妹のような関係でお互いにお互いのことを信頼していた。恵美も火神を姉のように慕つていた。

だが、ある日『ヤオヨロズ』の魔術師が彼女達のもとにやつてきて言つた。

「さああ。試験の時間だよお。今日一日、俺に殺されたら不合格。俺から逃げられたら合格だよお。簡単で分かりやすいルールでしょ？」

男はそう言つて彼女の神を殺した。

男の顔は覚えていないが、その時の記憶は忘れたことが無い。

あれから努力を続け、赤い魔法の使い手としては随一の実力を得た。全ては、彼女の大切な娘を護るためだ。

だが、ここ数週間、彼女の娘の消息が掴めない。一応、この守巢市の周辺から気配は感じるのだが、気配が巧妙に隠されている。

（もしも、カガリが『ヤオヨロズ』に捕まっているのなら）

恵美は唇を噛みしめて、天竜寺財閥の影響力の強い総合病院を眺めていた。

この場所に天竜寺妃が入院している。

昨日、妃を痛めつけたが殺しあしなかった。

『ヤオヨロズ』を殺すことは『オノゴロ』という組織に禁じられているから。

まだ、『オノゴロ』に逆らえない。せめてカガリが魔法を使えるまでは。

だからひとまず妃に近付く『ヤオヨロズ』構成員を手当たり次第に調べるしかない。

だが、なかなか大物が釣れない。

下つ端ばかりだ。

(やはり、天竜寺財閥の本部に乗りべきかしら)

そんなことを考えていた時だ。

ある少年が病院に入つていくのを見かけたのは。

恵美は眼を見開き、身体を震わせて少年を凝視する。

女のような綺麗な顔立ちの黒髪の少年だ。その顔に見覚えがあつた。

「麻美様？」

震える声で恵美は呟いた。

体育祭の次の日。

天竜寺妃が入院したという噂を草治は聞いた。

階段から落ちたらしくと妃と同じクラスのカガリは学校から帰つてきて言った。

草治には彼女がそんなミスをするとは思えなかつた。仮にも天竜寺妃は『ヤオヨロズ』という組織の魔術師だ。

「そういうわけで天竜寺のお見舞いに行つてくるよ」

草治は鬼姫達に言い残して一人で神社を出た。

本当はクラスメートのカガリにも付いて来て貰いたかつたが、カガリは恥ずかしいと言つてブンブンと首を振るので仕方が無い。

お見舞いとなると、果物でも持つていいくのが無難だろうと考えり<sup>ン</sup>ゴを買って妃が入院しているという病院に行つたが妃の部屋は面会謝絶となつていた。

そういうわけで何の収穫も無く草治は、神社に帰ることにした。

しかし、街を歩いていると妙に首筋に粘つく視線を頻繁に感じた。たびたび振り向くと、いつも同じ女がこちらを覗いていた。

眼鏡をかけた長髪の女だ。歳は20前後。

女は恍惚とした顔で草治を見つめているような気がした。

(ストーカーさん、かな)

不気味なものを感じて草治は走り出す。

すると女も追いかけてくる。

(本物だな)

げんなりとした面持ちで草治は走る。

女の足は意外と速い。

これでは神社まで付いて来てしまうだろう。

ストーカーに自宅がばれるのは厄介だ。

草治は足を止めた。女も足を止める。

ため息をついて草治は女に近付いていく。草治が歩いていくと女は笑みを深めていた。そして草治よりも先に女が口を開いた。

「もしかして、貴方が麻美様の御子息ですか」

「あれ？ 母さんの知り合い？」

母の名前を出されて草治は気の抜けた声を出した。

草治の返事に女は感極まつたという具合で両手を擦り合わせた。

「やはり、やはりそうですか。まさかこれほど麻美様と似てらっしゃるとは。私は茅野恵美と申します」

草治と母は本当に似ている。時々、クローンなのでは？と疑われることがあるほどだ。

「はあ。そうですか。母とはどういう関係で？」

「麻美様は私にとって赤い魔法の先輩といったところですわ」道端で魔術師と会うのは草治にとって初めてだった。というか大きな声で魔法とか言わないでほしかった。恥ずかしいから。

茅野恵美という女性は草治の手を握りしめてきた。

草治はきょとした顔で下がるが恵美は気にしない。

「ああ、本当に麻美様に似てらっしゃる。抱きしめていいですか？」

「止めて下さい」

草治がきつぱりと言った。

面倒くさそうな人だと草治は思った。

「それで？貴方の祀る神様を探すため、この守巣市に来たと？」

歩きながら草治が聞くと恵美は首肯した。

出会った時はテンションがものすごい高かったが、次第に落ち着いてきて今は大人の女性といった雰囲気を出している。

「ここ数週間探しているのですけど、なかなか見つからなくて、困つているのですわ」

「大変ですね」

適当に相槌を草治がうつ。

「そうなんです。多分『ヤオヨロズ』に誘拐されてしまつたんですね。本当に困りましたわ」

そのわりに恵美には余裕がある気がした。

もしかするとアララギのように『ヤオヨロズ』上層部と面識があるのかも知れない。

草治と恵美は赤井神社の鳥居までいっしょに歩いた。

恵美が麻美の暮らした神社を見たいと希望するので草治が案内することにしたのだ。

「へえ。ここが麻美様自慢の魔法の神社ですか」

鳥居をくぐり、閑散とした神社を観て恵美は少し落胆したような声を出した。

「意外と普通ですわね」

恵美は拍子抜けしたような顔を見せた。

しかし、その顔はすぐに驚愕に変わることになる。

赤井神社の宿舎から一人の少女が顔を出した。

真赤な髪が揺れる。

「力、カガリ？」

悲鳴のような声が恵美から上がった。

その声にカガリは怯えたような顔をしたのに草治は気が付いた。

「お、お母さん」

ぼそぼとした声で力ガリが言つ。

それを聞いて草治も驚いた。恵美のよつた若い女が力ガリの母親だつたとは思いもしなかつたのだ。

恵美が力ガリに近付いていく。

「もう、心配しましたのよ。突然出でていくから。つてきり『ヤオヨロズ』に捕まつたのかと」

恵美は力ガリに抱きつき、涙声で言つた。

(何はどうもあれ、親子の感動の再会といつやつか)

だが、力ガリは震えるだけで無言だ。嬉しさの震えじゃない。

何か、不自然だと草治は思つた。

「さ。帰りますわよ、力ガリ。もう家では儀式の準備も整つているの」

穏やかな声で恵美が言つと力ガリの怯えがさらに膨らんだような、そんなふうに草治には視えた。

明らかに、力ガリは恵美が言つ儀式を怖がつてゐる。

「草治。お前は本当に、周囲の縁の糸を歪めるのが上手ね。せつかく前回のツヅリの教訓を生かして力ガリの魔法の気配を消していくのに」

神社から鬼姫が歩いてきた。その顔はかなり不機嫌に見えた。鬼姫は険しい視線を恵美に向ける。

「言わせてもらおう。何度儀式をしても、力ガリは生きかえらない」  
草治には鬼姫の言わんとすることが分からなかつた。  
(力ガリが生きかえる?)

力ガリは草治達の眼の前にいるのに。

鬼姫は草治の困惑をよそに恵美を真つ直ぐに見つめる。

「正確には、オリジナルの力ガリという神様をお前は蘇らしたいん

だろうが、無理だ。諦めろ」

「無理では無いですわ。私の理論は今度こそ完璧なの。きっと成功するわ。どうして皆分からないのかしらね」

恵美は諭すような聲音で言つた。

鬼姫は双眸を強くする。

「無理だ。いや、止めなさい。結局のところ、儀式とやらでその力ガリを殺すのでしょ？『オノゴロ』が黙つていないと」

「違いますわ。力ガリを殺すのではなくて造りえるのです」

草治は鬼姫と恵美の言葉に絶句した。

（力ガリを殺す？造りえる？）

当の力ガリは黙つたままだ。

ため息混じりに鬼姫は恵美から視線を外して草治に向かう。

「力ガリという神は、昔、『ヤオヨロズ』に殺されたの。そして、今ここにいる力ガリは力ガリ神の死骸で造られた神様もどき」

そう言つて鬼姫は踵を返した。

「まあ、私は忠告したし、後は好きにしなさいな。馬鹿な魔術師さん」

鬼姫は言い残して神社へと戻つていく。

何が何だか訳がわからない草治は、鬼姫を説明を求めるために声をかけようとした。

だが草治の口が開く前に、恵美が奇声をあげた。

「忠告？そんなもの必要無いわ。私は今度こそ、力ガリを直すから」  
そう言つて恵美は慈しむようにして力ガリの頭を撫でる。恵美に触れられて力ガリの身体がブルリと震えた。

「魔法がろくに使えない身体を壊して、造り直してあげる。大丈夫。全て私に任せて、力ガリ」

「や、やだ」

力ガリがポツリと呟いた。

恵美の優しげな顔が強張る。

「どうしたの？力ガリ」

「もう少し、もう少し待つて。お母さん。すぐに、すぐに魔法を使えるようになるから」

真つ青な顔で力ガリが叫ぶ。

「何を言つてゐるの？そんなことしなくとも儀式で貴方を造りなおせばいいだけのこと。折角だからその卑屈な心も直してあげるわ」

「や、やだつてば！」

大声が響き渡つた。

力ガリは恵美の腕を振り払う。

恵美の顔が凍りついた。

「本当に、今回のかはりはどうしようもないわねえ」

声には苛立ちが混ざつていた。

今回、つまりは前回もあつたのかも知れない。

恵美は右腕と振りかざす。その指には紅い指輪が一つ。それを見て草治の背筋に悪寒が走つた。

「赤蓮！」

「はい、はーい。準備万端ですよー」

草治の眼の前に剣を持つた赤蓮が現れ、草治の中に憑依する。

紫色へと瞳が変色する。

恵美の瞳も紫色へと変わつていた。

赤い魔法の使い手の魔眼は紫色を宿すことが多いといつことを以前、赤蓮がいつていた。

「力ガリ、逃げろ！」

草治の声を聞き、力ガリは草治のほうへと走り出した。

訝しげな顔で恵美が草治を睨む。

「どうして、邪魔するのですか？ 草治様」

「ふざけんな。お前の都合に力ガリを巻き込むな」

怒鳴り声を草治があげる。

すると恵美が瞳を伏せた。

「麻美様ならばきっとそんなことは言わないでしょう。やはり姿が似ているとはいへ、草治様と麻美様は違うのですね。失望しましたよ、草治様」

暗い輝きを恵美の瞳が放つてゐる。

(壊れているな。この女)

草治は心中で吐き捨てた。

『人間誰しも、壊れてしまう時があるものです。ご主人様はそれが悪いことだと思うのでしょうかけど』

赤蓮の声が聞えたような気がしたが草治はその声に返す余裕はなかった。

恵美を起点として赤い魔法陣が広がった。

そこからいくつもの赤いゾンビが這い上がりてくる。

## 赤井少年と赤蓮

『鬼姫は、依頼者から恵美さんと魔法をぶつけ合つのを禁止されています。ここは主人様が、恵美さんを止めてあげるしかありませんよー』

能天氣にも語尾をのばして赤蓮が説明する。

赤蓮が言う依頼者こそ草治の母親である麻美本人なのだが、このことを草治は知られていらない。麻美自身がそう望んだのだ。今はまだ草治は知るべきではない、と。

麻美が力ガリを赤井神社に連れてきた時に依頼したことは3つ。一つは力ガリに人間の世界のことを教えること。そして力ガリの身柄を保護すること。最後に、力ガリに執着している恵美の心を救うこと。

しかし、赤蓮は草治に力ガリに人間の世界を教えてほしいとしか言わなかつた。草治には危険なことをしてほしくなかつたから。

いや、麻美の思惑道理に草治が動くのが嫌だつた。麻美は赤井草治を魔術師として鍛えようとしている。そんなことをされたら更に草治が赤蓮から離れてしまう。

だが赤蓮の思惑を知らない草治は馬鹿みたいに恵美を神社に連れてきた。そして結局麻美の予想道理に草治は剣を抜いている。不快だつた。

恵美の魔法陣から這いでて、紅の人影がゆらゆらと身を揺すりながら向かってくる。対して草治は剣を構える。

『それについても、恵美さんの魔法は純度の高い赤色をしてますねー。おそらくかなりの使い手ですよ』

一応、赤蓮が解説を始めたが草治はそれどころではないため返事をしてくれない。

紅いゾンビ達は猫背で足どりは酔っ払いのようにふらふらしている

が、その動きは素早い。筋力のような力は高いのだろう。

あつという間に近付いてきたゾンビ達に草治は真横に剣を振るう。剣の軌跡の後には、空間に血がにじみ出たような亀裂が入っている。この鈍い血のような色こそ、赤い魔法の象徴だ。魔術師のランクは、振るわれる魔法の色の純度で判断できる。

草治の色は赤井の剣の力だが、恵美の色は実力によるもの。紅いゾンビ達のいくつかが草治が入れた亀裂に飲み込まれていくが、恵美はゾンビを無限に製造できる。

（これは、勝ち目がありませんねー）

心の中で赤蓮はため息を吐いた。

まあ、今回は危なくなつたら鬼姫が助けてくれるのだろうけど。

草治は剣を一心不乱に振り続けて亀裂を造つてゐるが、次第に息が荒くなつていくのを赤蓮は感じ取つた。もともと赤井の剣は使用者の負担が大きすぎる。

『おそらく、恵美さんが造つた魔法陣の中心を剣で突けば全てのゾンビが消えるかと』

赤蓮が草治の頭の中で声を響かせた。すると今度は返事を返してくれた。

「このゾンビの中を搔きわけて行くのは無理、だと思われる」かなり弱い声だった。ゾンビ達の動きの速さ、そしてその数は草治は敗北する未来しか予想できないようだ。

「逃げるぞ、ひとまず」

そう言つて草治は力ガリの手を引いて鳥居のほうに走り出した。力ガリは茫然としながらも草治に付いてきた。一気に草治と力ガリは石段を駆け下りる。しかし、逃げられない。赤蓮はそう思った。そして彼女の予想は的中する。

『上から、なにやらいつぱいきましたよー』

赤蓮の声に反応して草治は後を振り向き、息を飲む。

神社の境内から紅い噴水が上がっていたのだ。

紅い水ではなく、紅いゾンビ達が密集した噴水が空に上がっている。西に東に北に南に、ゾンビ達がこれでもかとばら撒かれていく。そして大雨の如き量で草治達のもともに落ちてくる。

咄嗟に草治は剣を振るつて亀裂を造った。

ゾンビ達は亀裂に吸い込まれていくが、膨大な量のゾンビ達全てを呑み込めなかつた。草治とカガリはゾンビの洪水に押し流される。

草治とカガリは赤井神社の石段から転がり落ち、視界いっぱいに集まつたゾンビ達に押さえつけられた。草治は首を掴まれ、仰向けて倒れていた。

「本当に、ここらへんの魔術師は軟弱ですね。草治様も、『ヤオヨロズ』の職員も」

どこからか、恵美の声が聞こえてきた。

草治の視界と赤蓮の視界は今は繋がつているため彼女がどこにいるかは分からなかつたが、近くに来ていることだけは分かつた。彼女の声は勝ち誇つている。

（まあ、魔法を知つて数ヶ月のご主人様では、相手にならないのは仕方ありませんけど、この人はまだ諦めるつもりはないようですねー）

草治の中で苦笑し、赤蓮は草治から氣力が湧き出てくるのを感じていた。噴水のような激しい氣力ではない。むしろ、湧水のような慎ましくも芯のある氣力だ。

草治の紫色の瞳に力が入る。

「『ヤオヨロズ』の職員？」

紅い集団の奥にいる魔術師に向かつて草治が尋ねる。

どこからか恵美のクスクスとした笑い声が聞えてきた。

「天童寺という魔術師達です。私が魔術師としては再起不能になるまで苛めてあげた人なんですが、もしかして知り合いでしたか？」

恵美の嘲笑うような声を上げる。

「草治様にも見せてあげたかったですよ。特に、天童寺妃とかいう小娘なんか左腕と左足をすごく綺麗に美しく、ぱつきりと折つてあげましたわ。それなのにあの娘、表情一つ変えませんの。やはり、『ヤオヨロズ』の人工魔術師は気味が悪い」

恍惚とした声が響いてきた。

それを聞いてカガリから絹を裂く悲鳴のような声が上がった。恵美の気味悪い告白のためか、それとも知り合いの妃が母親に暴行を受けたことを知つたためか。いざれにしろ、カガリにとつては衝撃的な事実だろう。

恵美は歌うような聲音で続ける。

「『ヤオヨロズ』の倫理觀は間違つていると思うのよね。組織としては神を保護するとか歌つていますけど、遊び感覚で弱き神を殺す人間もいるのですよ。神を何だと認識しているのでしょうか？」

問いかけるような声に、草治は答えない。身動きが取れないため、ただ歯を食いしばっていた。紅いゾンビの力はとてもなく強い。カガリからは泣き声が聞こえてきた。よく泣きだす子だと赤蓮は思つた。

「でも、おかげで私は分かりました。神とは、絶対的に崇めたてまつられないといけないモノなんです。つまり、心も魔法も弱い神ではダメなんです。こんな、カガリではダメなのです」

「はなして、はなして下さい！痛い、止めて」

カガリの悲鳴で赤蓮は理解した。どうやら恵美はカガリを捕まえたようだった。対して恵美はカガリを叱りつけるような声を出す。

「どうして、分からないの？カガリ。今の貴方じや、ダメなの。『ヤオヨロズ』を皆殺しにするどころか、貴方なんかじや、誰にも認められないの。これ以上、私の手間をかけさせないで」  
さらりと、『ヤオヨロズ』討伐宣言も聞こえてきたが、それ自体は草治にとつてはどうでもよかつたようだ。

草治の頭の中に赤井麻美との記憶が流れしていくのを赤蓮は視た。

「馬鹿じやねえの？」

草治の低い、低い声が口から漏れた。侮蔑と嫌悪が混ざった短い言葉が周囲に響いていく。この少年は口下手だが、彼の言葉にはある種の力がある。恵美とカガリから漂う胃が痛くなるような空気が凍つたのを赤蓮は感じた。

「アンタは、カガリの母親なんだろ？ だつたら、何で自分の子どもを否定する。カガリは、アンタのために魔法が使えるようになりたいと言つたんだぞ？ その気持ちすら否定するのか？」

「はあ？ どつちにしる、このカガリに魔法の才はほとんどない。どんなに頑張つても、程度が知れてるのよ」

「はつ。大切なのは才能や資質ってか。その考えは、『ヤオヨロズ』の優れた遺伝子を優遇する思想と同じだな」

「草治様、いい加減、殺しますよ？」

恵美の言葉はナイフのように尖つっていた。

己の思想が、忌み嫌う連中と同じだと貶されたのだから当然の反応かもしれないが、同時に草治の首を掴む紅いゾンビの力が強まつていいく。

「つく

草治の顔が苦痛に歪む。

そろそろ潮時かもしない、と赤蓮は思つた。

しかし草治も、右手に握られた剣に力を込めていく。まだ、足搔くつもりのようだったが、もう遅い。もう草治は息すらできない状態だ。

『負けですね』

『まだ、負けてない』

赤蓮が告げると、草治の心の声が彼女に飛んできた。こんなことは初めてだった。赤蓮の驚きをよそに草治は声を造る。

『赤井神社は、歪んだ縁を結び直す、縁結びの神社だ』

草治の頭の中で麻美との記憶が広がつた。

ずっと、昔、麻美は草治に問うた。

将来何になりたいか、そんなありふれた質問だつた。それに草治は、なりたいものなんて無い、自分になれる職業なんて無いと答えた。子どもにあるまじき捻くれた答えた。この頃から、少々卑屈な少年であつたようだ。

麻美は草治の答えを聞いているのか、聞いていないのか、笑顔でこんな言葉を草治に返してきた。

「それなら赤井神社の魔術師になるべきだわ。赤井神社は、歪んだ縁を持つ人間を招き寄せる魔法の神社。草治は彼らを助ければいいわ。誰かを助けてあげる仕事つてとてもステキだと思わない？」正確には初代赤井の魔術師が、レンと呼ばれた鬼と彼の歪んだ縁を嘆き悲しみ、その罪滅ぼしのために造つた魔法の神社なのだが。何はともあれ、麻美から提案された良く分からぬ職業を聞いて草治は軽く息を吐いた。

「俺みたいのが、人助けなんて出来るわけないと思うのだけど」「大丈夫よ。困つた人はね、とりあえず誰かが側に居るだけで安心するものなの。一人で困るよりも、二人で困るほうがいいでしょ？草治はただ、一緒に困つてあげればいいの」

「そうなんだ。簡単な仕事だから俺にも出来そうだね」

麻美の適当な言葉に、幼き草治は満足げに頷く。

自分みたいな人間が誰かの助けになれると思つただけで珍しく草治の胸が高鳴つたのだ。

そんな話を昔、したことがあつたのを草治は思い出していたようだつた。

実際は簡単なんてとんでもない話だ。

今も、草治は首を絞められて意識を失いかけている。

その一方で氣力だけは満ち溢れている。

草治が剣をよろよろと振り上げた。

赤蓮には草治が何をしようとしているのかが分かつていた。無理だ

と思った。現に、草治の腕からは力がどんどん抜けている。それでも、草治は剣の切つ先を真下に向けて剣を道路のコンクリートへと刺しこんだ。

どぶり、と泥沼を斬つたような音が剣と道路から上がった。

剣がコンクリートへと刺さり、道路から血が出たような赤い亀裂が生まれていく。

赤い亀裂は、傷口から血が漏れていくかのように、どぶどぶと赤く細い線を大地の上に広げていく。

『赤井の剣の有効範囲は、刀身の長さまでって決まっているのです

が』

赤蓮はやれやれ呆れたと言わんばかりの声を響かせた。

剣の亀裂は、草治を中心とした蜘蛛の巣といった具合の形と大きさで完成した。

「帰れ」

草治が咳き、亀裂がパクリと開いて漆黒の魔法の世界がその姿を覗かせた。

周囲のゾンビ達が一瞬で黒い魔法に取りこまれ、吸収されていく。吸収できたのは、赤井神社の境内から溢れ出たゾンビの数を考えれば微々たるもの。

それでも草治の視界が一気に開き、カガリと彼女を押さえている恵美の姿を捕えた。

瞬間、弾けるように草治は起きあがり、一人へと走り出した。

恵美の顔は驚愕で固まっている。

「少しば、頭を冷やせ」

草治が一言。

そしてその言葉と共にどび蹴りを恵美に喰らわせ、カガリから引き離す。

草治という少年は女だらうとけつこう容赦なく攻撃する。何だかん

だで鬼姫に対してもそうだった。

『とはいえ、』

赤蓮は状況を整理する。

恵美は草治に蹴り飛ばされた後すぐに立ち上がり、鬼を思わせる形相で睨んでいた。

『女とはかくも怖いモノなんですね』

いろいろな理由で草治を祟っている赤蓮も同じようなものなのだが。『それはさておき、恵美さんの魔法陣は依然、神社の境内に健在ですよ』

どうしますか、と赤蓮が問う。

『あのバカ女の魔法陣を壊す』

草治は赤蓮の心の声を打ち返すように間髪いれずに赤蓮だけに答えた。彼の心は怒りで満ちている。

どうやら、今回のいざこいで草治と赤蓮はより深くリンクできるようになつたから理解できた。

それでも、草治とより近づけることは赤蓮にとっては喜ばしいことだ。思えば、こんな壊れた自分と彼がこれほどに近づけるとは考えたことがなかつた。

赤蓮は草治が心を壊した人間を嫌つてているのを知つていて。だから恵美に対して激しい怒りを抱えている。

けれど、本当は、赤蓮は茅野恵美以上に壊れています。ずっとずっと昔に死んだ時に、壊れてしまつたのだ。

昔も今も、草治への歪んだ心で埋め尽くされついて、彼への愛と憎悪が日替わりで入れ替わることもある。きっといつか自分は憎悪に負けて彼を不幸に導くかもしれない。

だから草治は赤蓮もきっと嫌いなのだろう。それでも良かつた。そんな関係でよかつた。

だけど、一つだけ聞いたかつた質問があつた。

今なら、彼の本当の気持ちが聞ける。

『私は、恵美さんよりも壊れてます。こんな私は、ご主人様のおそ

ばに居てもいいんでしょうが』

いや、違う。こんなことが聞きたかったわけじゃない。

『私は、壊れたままでもよろしいのでしょうか?』

赤蓮の疑問はすぐに草治に打ち返された。

『壊れているかは知らないが、今のお前がいないと俺は何も出来ないんだよ。悪いが、俺に付き合つてもらひよ』

そう言つて草治は剣を構えた。

『そうですか。 そうですね』

赤蓮は嬉しそうな声を上げた。

今日の草治の言葉は、彼女の中にある草治への愛情と憎悪の天秤へと届いた。天秤は愛情のほうへと激しく傾き、嬉々とした声を赤蓮は上げる。

『どうやら、本日の私は』主人様への愛のメーターがマックスです。 もう、メチャクチャ頑張っちゃいますよー』

赤蓮の華やかな声と一転して、草治とカガリの周囲に氣味の悪いゾンビ達が再び集まり出す。

## 火神の魔法

力ガリにとつて茅野恵美は母親であり、絶対的な存在だった。

恵美の意思に従うために力ガリは動いてきた。

彼女が魔法を使うように言つたから、頑張つて魔法を覚えようと思つたのだ。魔法が使えない『力ガリ』は要らないと母が言つたから赤井神社までやつてきた。

でも、母は言う。

今之力ガリには魔法の才能は無い。

今之力ガリの心すらもダメだと言われた。

だから捨てられるのだ。壊されるのだ。

そのことを悟り、力ガリの心と身体が悲鳴を上げた。

「何で、何で私は、こんなに、こんなにも役立たずとして生まれてきたのですか」

誰にともなく、力ガリは憎悪の言葉を己に吐いた。

力ガリは恵美を恨むことはなかつた。

自分の心が弱く、魔法も使えないから、今之力ガリは死ぬのだ。つまり全て自分が原因。

「私が、私が不甲斐ないから、天竜寺さんまで」

先ほど告げられた母による天竜寺妃への暴行も少女の心を抉つていた。

妃とそれほど仲が良いわけではなかつたが、力ガリは彼女に好感を持つていた。何だかんだで力ガリを気遣つてくれた。

沈み込む力ガリの肩を草治が揺すつた。

「お前は何一つ悪くないよ。悪いのは、あの女だ」

草治が強い口調で言つた。

だが力ガリの心は晴れることはない。むしろ面と向かつて絶対的な存在の母を侮蔑する言葉を向ける草治に反感を持った。

「お母さんは、何一つ悪くありません」

私が悪い、とカガリが甲高い声で叫んだ。

カガリは強い力で草治の腕を引っ張り、鬼気迫る顔で彼を睨みつけた。

草治の口から、わずかに息が漏れた。

それを見てカガリは少し戸惑った。

見ようによつては草治が笑つたようだつたから。

「なるほど、悪いのは無力な自分ってか。それなら、お前は具体的にどういう自分だつたら悪くなかつたと思えるんだ？魔法が使えるように生まれたらよかつた？」

草治に問われ、カガリは頷いた。もつと魔法が使えて、もつと神らしく堂々と出来ていれば母が機嫌を悪くすることもなかつた。

カガリの首肯に草治は眼を細める。

「そうだな。だけど、そんな贅沢が現実に叶わないことも分かつているよな」

冷たい言葉だつた。

カガリの理想は贅沢なものでしかない。ただの甘えだと彼は言う。

「分かつてします。やはり、私はお母さんにとって要らない子だとずっと前から理解してました。だつたら、無力な私はどうすればいいんですか？死ねば、いいんですか？」

「お前の母親がどうか知らないが、世界に要らないものは無いよ」

草治が言い、剣をゾンビへと振つた。

カガリは混乱して気が付かなかつたがいつの間にか、周囲は紅いゾンビが寄つてきていた。

「たぶん、どんな人間もどんな存在も、本人が知らないだけで必ず世界からは必要とされている。無力な存在なんてこの世界には無いよ」

淡々とした聲音がカガリの心に妙に反響した。

斬りつけられたゾンビから彼らの赤色とは違つ赤い亀裂が生まれる。まるでゾンビから血が出ているかのような光景だつた。亀裂が開き、ゾンビのいくつかが吸い込まれていく。

続けて草治は周囲を斬る。

「カガリ、お前だつてそうだよ。お前は役立たずでは無い。今のお前の縁はからまつてあるからそつ思えるかもしねいけれど、からまつた縁は俺達がほどいてやる。赤井神社はそういう場所だ。だから、カガリの力も貸してくれ。お前の母親と仲直りしたいだろ？」

仲直り、その言葉はカガリの心を揺さぶった。

最後に、草治は地面へと剣を突き刺した。

大地から血がにじみ出たような亀裂が広がる。それこそ蜘蛛の巣を描くように。

あたり一面のゾンビ達は蜘蛛の巣を模した亀裂へと、じつそり墮ちていく。

紅い景色が一気に消え、恵美の姿が再び現れた。

彼女は怒りで顔が歪んでいた。

草治は怒り狂う恵美へと赤井の剣を向けた。

「そういうわけだ。アンタの縁も魔法も全部あるべき場所に戻つてもらひ」

「ははは。偉そうなことを言つけど、草治様、アンタ息切れしてんじゃない。言つておくけど、私はまだまだ余力があるのよ」

「ああ、そうだな。俺は魔法を使いすぎた。つていうか、なんかもう吐きそうだ。魔法を使う度に、吐き気をもよおすから出来るなら、もう降参したいけど」

よく見ると草治の顔が青白い。

それでも彼の瞳はまだ足搔くことを語つてている。

恵美は草治の戯言を鼻で笑い、再び右手を掲げた。

「なんで、草治様はこんなに首を突っ込んでくるのよ。アンタは関係ないでしょ？どつかに消えて下さいよ」

周囲にゾンビ達が集まり出す。

草治も再び剣を振り上げる。

絶対的に不利な状況に関わらず母に抗つ草治の姿に、カガリは感嘆した。

カガリにとつて絶対的な存在の恵美に、臆することなく草治は抗っている。恵美に対して絶対服従だつた彼女には、その姿勢は新鮮だった。

(もしかしたら、私はいろんな理由をつけて、怖ろしい母に抵抗することから逃げてきただけかもしれない)

そんなことをカガリは思った。

今までは、母の言いつけを守り、母の期待にそつことが全てだと思つていた。

だけど、草治達と接し、人間の学校に通つて気が付いた。

誰かに従うだけではダメなのだ。誰かの指示を待つだけではダメなのだ。

自分の正しいことをすべきなのだ。

そして、カガリの心は決まつていた。

(私は、まだ生きたい。そして、お母さんともつと仲良くなりたい)  
いつしか、カガリの手はポケットをまさぐり、ある物を掴みとる。  
それは、草治から渡された紅石と呼ばれる魔法具だった。

無造作に紅石を投げると、瞬く間に赤い魔法陣が飛び出した。初めての成功だが、それほど感動しなかつた。むしろ、今のカガリには出来て当然だと思えた。

そして、カガリは草治の魔法についての講義を思い出す。

『魔法の原則は、反射』

そのことをいつも言われた。言われた時は何のことか分からなかつたが、今なら分かる気がする。

魔法陣の中に黒い世界が映る。全ての色が重なり合つた混沌の黒。本当の魔法の世界だ。

黒い世界に人のシルエットが浮かぼうとしていた。

黒い姿はあつという間にはつきりとした像へと変化する。紅い髪の少女の姿へと変化した。

自分の姿だ。あたかも鏡に映るように魔法の世界に自分が映つてい

る。

これが魔法の反射。この魔法の像こそがカガリという存在の魔法の質と量。

魔法の像へと手を伸ばす。

同じく、魔法に映った自分も手を伸ばした。

魔法陣を隔て、二つは触れ合つた。

途端、魔法の像の自分が、粒子となつて現の世界へと飛んできた。桜吹雪のように舞い、カガリの中へと入つていく。カガリの中で魔法が駆け廻つた。

身体が熱い。だがそれすらも心地良い。

荒々しい豪炎が身体を焦がしまわつている。

ああ、燃やさないと。

人も神も世界も魔法も魂すらも。

轟音、暴風、爆炎が突如カガリから上がつた。

近くに居た草治はうねり拡がつていく炎を浴びた。

(熱くない)

周囲のゾンビ達は、カガリからの豪炎を浴びてのたうちもがいでいる。

しかし、草治には何の外傷も与えなかつた。

『物理的な炎では無く、魔法の炎ですから、カガリさんが燃やしたいモノしか影響を与えないのでしょうか』

赤蓮が解説する。

それを聞いて草治は、あることを思いついた。

『カガリ、お前の炎で神社までの道を造れ』  
叫び、草治は石段に向けて走り出した。

赤井神社の境内にある魔法陣さえ壊せば草治達の勝ちなのだ。

炎となつたカガリは草治の言葉どうり、彼の行く手に立ちはだかる

ゾンビへと体当たりして吹き飛ばす。

血のように赤い炎の中、草治は石段を駆けあがる。

『まさか、力ガリさんがこれほどの魔法を使うことが出来るとは。まだまだ荒くて不死身の魔法を完全には消せてはいませんが、これなら神格だつて認められるかもしません』

赤蓮がしみじみとそんなことを言つている。よく見ると炎の中には、苦しみもがいでいるゾンビ達がちらほらと見受けられる。どうやら力ガリでもゾンビを倒すことは出来ない様だった。

草治は石段を登りきり、境内の真ん中の地面に描かれた魔法陣を見つけた。

もう、身体は疲労で限界だつたが足に力を込めてそこまで走る。魔法陣も血の池のようだつた。

草治は剣を振り上げて、魔法陣の中心へと刺し込んだ。

紅い魔法陣の上に、草治の暗い赤の亀裂が差し込まれていく。

そして亀裂は広がり、黒い魔法の世界が覗き見えた。

魔法陣は吸い込まれる。

恵美の魔法が吸い込まれていいくのを観ていて、唐突に眠気のよくなものが草治を襲つた。この感覚には覚えがあつた。

『そうですね。恵美さんの魔法に感染したみたいですね』

最後に、赤蓮の声が聞こえ、草治は瞼が閉じていいくのに気が付いた。

幼い恵美と、力ガリだつた火の神の記憶には靄がかかつっていた。火の神は優しい神だつたという情報しか、恵美の魔法には無かつた。だけど、火の神が『ヤオヨロズ』に殺される記憶は鮮烈に残つていた。

悲鳴を上げ殺される神と、『ヤオヨロズ』の男の魔法に怖れおののき逃げ出す恵美。彼女の魔法はこの時からある形を成すことになる。心優しい神を見捨てた自分に嘆き失望し、己を捨てるにした。神を見捨てた『恵美』という人間に生きている資格は無いと判断したから。

それから、落ちこぼれと言われていた彼女は必死に魔法を学んだ。それこそ己を壊すかのような勢いで赤い魔法の師匠に教えを乞うた。みるみるうちに彼女は力を付けていった。

だけど、彼女と親しくしようとする同門はいなかつた。

恵美は魔法を習い、火の神を蘇らせることが考えていなかつた。だけど時折、火の神を見捨てた時の記憶が頭によぎることがあつた。そんな時、彼女はところ構わず絶叫し、記憶を吹き飛ばすように半狂乱で己の魔法を暴れさせた。こんな危険な少女に誰が近づこうと思うだろうか。

だから、恵美はいつも一人で魔法の練習を繰り返していた。彼女もそれでよかつた。

しかし、ここで恵美に一つの転機が訪れる。彼女の指針に大きな影響を及ぼす出会い。

赤井麻美との出会いだ。

ある日、師匠へと魔法についての疑問を聞きに行つた時一人は出会つた。

師匠の部屋を開けると、師匠は不在で変わりに麻美が居た。

麻美は師匠の教えを卒業して数年たち、面識なかつたが恵美は彼女を知つていた。

なぜなら赤井麻美は人間でありながら、『オノゴロ』から神格を認められた数少ない人間だつたから。

麻美は笑顔で恵美を迎えた。

「私は師匠に頼みごとがあつて来たんだけど、今日は居ないみたいだね」

口惜しそうに麻美が言う。

軽い雰囲気の麻美に対して恵美は直立不動で何も答えられなかつた。麻美の瞳に吸い込まれるように、彼女の魔眼を凝視する。

赤い魔法の使い手としてはよくある紫色の瞳には、深紅の紋様が浮いていた。これこそ、『オノゴロ』から神の眼と言わしめる、全てを見透かす魔眼。

麻美の魔眼は恵美を見透かしている。

と、麻美の魔眼が普通の黒い瞳へと変わつた。

「なるほど」

彼女は頷き、笑みを消す。神妙な面持ちで麻美は恵美を見る。

「恵美ちゃんは、凄い目標を抱えてみたいね。けど、神を蘇らせるなんて人間には絶対に無理」

麻美は恵美の心を読み断言した。火の神は蘇らないと。

その言葉を聞き、恵美が絶叫する。

言葉は無く、理性も無い恵美の魔法が師匠の部屋で暴れた。

赤い死人を呼び出し、目的も無く全てを打ち壊す。

しかし、恵美には麻美がどこにいるのか分からなかつた。突然、分からなくなつた。

叫ぶ恵美の声をぐぐり、どこからか麻美の声が届く。

「ははは。恵美ちゃんの心もけつこう壊れてるね。うちの神社に祟るあの子よりはましだけど、もう治らないくらい心が壊れてるわ。少なくとも、今の世界に貴方の心を埋めてくれる人は存在しない」  
麻美の余裕のある声も恵美にはどうでもよかつた。単に、暴れて、

頭の隅にこぐりつく火の神を見捨てた記憶を忘れたかった。

そんな恵美の心をも見透かし、麻美が笑う。

「ふふ。恵美ちゃんはおもしろいわ。だから私が手伝つてあげるわ。神格を認められた私が貴方を手伝つてあげる」

何を言われたか、恵美にはすぐ分からなかつた。

（神が私を手伝つうこと？）

茫然とした面持ちで、魔法を止めると眼の前で神秘的な笑みを浮かべた麻美が立つていた。

魔法を止めるまでそこに麻美がいることに恵美は気が付かなかつた。

（これが、神の魔法？）

怖れおののき、恵美は麻美を伺う。

麻美は軽やかに恵美に近付いてきた。

美しい女性だと恵美は思つた。

「人間に、神を蘇らせるのは無理だけど、神様ならできるわ。私に任せなさい。それに丁度、私も神の蘇りについて興味があつたから少しは知識があるわ」

そう言って麻美は恵美へと一冊の魔道書を渡した。

「これに、神を作る魔法が載つています。これを複写し、貴方の魔法として使いなさい」

「はい」

神託を与えた巫女の如く、恵美は答えた。

麻美はそれを満足そうに聞き、再び口を開く。

「恵美ちゃんの心は壊れているけど、私は壊れることが悪いと思わない。だから、恵美ちゃんの思う通りにしなさい。人間の倫理、道徳も気にせずに、邪魔なモノは排除するといいわ。そうするしか、貴方の心は正氣を保てないだろ？から」

「はい」

恵美の従順な返事を聞き、今度は麻美の顔が曇つた。

「だけど、きっと貴方は最後に後悔をするわ。その前に、恵美ちゃん

んの心を正してくれる存在が生まれてくれるといいんだけどね」  
麻美は最後に言った。

その後、恵美の奇行も収まることになる。

これが、茅野恵美の心を占める記憶。

その全てを知り、草治はため息を吐いた。

「母さんが原因か」

恵美を促した赤井麻美は草治の母親だ。

なぜ、麻美がそんなことをしたのか知らないが、今はそんなことどうでもいい。

草治は恵美の魔法を、心を辿る。

人の心中も、魔法の源流と同じで真っ黒だった。暗い空間のところどころに記憶が浮いている。

そして恵美の心の根源には、火の神を見捨てた己への絶望が根付いていた。

それを取り去るにはどうすればいいのか。

「そんなこと、できませんよ」

過ぎ去つていく恵美の記憶から返答があつた。

茅野恵美の虚像が草治の前に浮かぶ。

「私の過ちは死ぬまで消えない。この罪悪感を少しでも償うために力ガリを造ったのよ」

「なるほど、そうして力ガリは魔法を使えるようになつたわけだが、どうだ？」

草治は恵美に尋ねる。

本来の力ガリという神はとても力の弱い神だつた。  
だが、今の力ガリはとても強い可能性を見せた。

恵美の目標はほぼ叶つたと言つてよい状態だが彼女の顔は曇つている。

彼女の本当の願いは叶っていないのだ。

「結局、力ガリの魔法をみても心は晴れませんでした。私は、ただ力ガリ様に謝りたかつたのかもしれません。だから、力ガリを造つた」

「それが分かれば十分だ」

そう言つて草治は虚空に手を伸ばす。指には赤い糸が巻き付き、どこかに繋がつてゐる。草治は己に繋がる糸を引く。

「赤蓮も一応、鬼姫の半身だから、彼女と同等の力と権限がある」草治が虚空へと呟く。

恵美は茫然として糸の先に広がる暗い景色へと視線を伸ばす。しばらくして、糸の先から二つの人影が現れた。

赤蓮と力ガリだ。

ただ、力ガリの様子がいつもと違う。おどおどした態度ではなく、菩薩のような優しい笑みを湛えている。

「力ガリ様？」

恵美の口から自然と名前が出た。力ガリは穏やかに頷く。恵美と力ガリは言葉も無く向かい合つてゐる。

「力ガリさんの中に残つてゐる力ガリという神の人格を呼び起こしてきましたよ」

赤蓮が自慢げに胸をそらしていた。

さすがは赤蓮といったところだ。

先に、力ガリが口を開いた。

「ごめんなさいね。私が弱い神だつたから」

「違います。私の心が弱かつたから」

「いいえ。人間の心が弱いのは当然のこと。だから神様が護つてあげないといけないの。それなのに、私は何も出来なかつた」

力ガリは自嘲するように言つ。力ガリという神の心の声は恵美の世界に広がる。

「だけど、貴方が造つたあの子は、きっととても立派な神様になるわ」

途端、花が咲いたような笑みを見せた。

それと同時に、力ガリの姿が紅く輝き始め消えていく。

「力ガリを、私を助けてあげて、恵美」

その言葉を最後に、力ガリは光となり暗い世界を灯の如く照らし始めた。

力ガリの言葉は恵美の心を晴らしたわけではない。だけど、確実に彼女の心に変化をもたらしたようだった。

それを感じ、草治の意識も閉じ始める。

ふと、目を覚ますと見慣れた顔が2つあった。

鬼姫と赤蓮だ。

草治が起きあがると、鬼姫がわずかに安堵したような表情を見せた。

場所は草治の寝室。

何だか力ガリのことも全て夢のように遠くに感じられる。

「力ガリと恵美は？」

「あの二人なら、追い出したわ。私の神社を荒らしたのだから当然でしょ」

鬼姫が少し不機嫌そうに答えた。

赤蓮は苦笑して鬼姫をみている。

「ひとまず、恵美さんも正気に戻ったようです。だからご主人様に謝罪したいとうるさかつたんですけどね。一応、恵美さんから手紙を預かりました」

赤蓮に手紙を草治に渡してきた。

「長い文章なのですが、要約すると、『迷惑をかけました。これからは今の力ガリと頑張ります』的なことが書いてあります。あと、恵美さんと力ガリさんはこの近くに越してくるとかも書いてありますよ」

赤蓮に説明を受けたが、一応草治は手紙を開いた。彼女の言う通り

几帳面な字がびっしりと詰まっていた。

新しい家のめどもたつたので遊びに来て下さいとかも書いてある。

「却下します」「

鬼姫が突然、草治に詰め寄ってきた。

「力ガリの家に行くのは認めません」

目元を吊り上げて、鬼姫が強い口調で言つ。

どうして鬼姫が怒つているのか分からぬ草治は赤蓮へと助けを求める。

「力ガリさんも、『オノゴロ』に認められたため正式に神様です。ちなみに、ご主人様はまる2日寝込んでいました」

赤蓮が苦笑いで答えてくれた。

鬼姫にとつては、他の神と草治が会うのを何故かよしとしない。

「鬼姫は古い神ですから、考え方も古くて、神とその魔術師は強い絆で結ばれているって考えてるんです。それこそ、親や恋人よりも強い絆で。まあ私はそんなの認めませんけど」

茶化すように、赤蓮が言い、鬼姫の顔が真っ赤になつた。

鬼姫と赤蓮がぎやあぎやあと草治の上で騒ぎ出す。

神様としての威厳も何もあつたものではない。

案外、神様の心も人間とそう変わらないのかかもしれない。

かつての力ガリは、人間は弱い生き物で、だから神が人間を守らないといけないと言つたがこの二人にそんなことが出来るだろうかと疑問に思えた。

「俺が、頑張らないといけないなあ」

そんなことを呴いてしまつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5045o/>

赤井神社にようこそ

2011年2月21日12時18分発行